



他人を殺す事によってしか、この世界に自分を存在させる事が出来ない。

力とは、洗礼のようなものだったのだろう。

そう、言わば、恩寵なのだ。

辺りには、バラバラ死体ばかりが転がっていた。数分前までその肉塊は生き物で、ある一人の人間を殺そうと、手に手に得物を持っていたのだ。けれども、どんなに武装しようとも、どんなに数を並べようとも、何も意味を為していなかった。

彼らは、降り注ぐ雪の墓標によって埋められていくのだろう。

誰もが、みな死んでしまった世界の中で、どんな言葉を語る事が出来るのだろうか？

“青い悪魔”は、自分を傷付けようとする脅威を滅ぼさざるを得ない。そこには対話なんてものは無い。他人に対しての恐怖から、敵愾心が生じるのだ。

殺す事に対するのは、おそらくは無為自然な行為なのだろう。純然として、他者が怖いからこそ行えるのだ。

彼は踊る。自分を傷付ける者達を粉々の硝子の破片のように変える為に。

誰も彼を殺す事なんて出来はしない。あるいは彼は死の象徴そのものなのかもしれない。

氷雪の紫紺の下、彼は無表情のまま歩き出す。

彼の心は閉ざされている。それは氷の霊廟のようだった。

.....僕は何の為に生きているのだろうか？

感情というものを、彼は思い出す事が出来そうになかった。全ては壊れてしまったから。このどうしようもない程の力を手にしてしまった時から、彼は壊れてしまったのだろう。それはきつと代償にして、それ自体が裁きなのかもしれない。

雪が世界を閉ざしていく。冷たい粉雪が青い屍衣を覆っていく。

辺りには、青い闇ばかりが広がっていた。全ての人間は彼の前では死んでいく。彼の力とはそういうものなのだから。

青い悪魔は、伝説となっていた。

不思議の国のアリスのような服を纏った。少女のような姿の、美少年。

それが、青い悪魔だった。

彼は無感情のまま歩き出す。この世界は彼にとって空漠でしかなかった。

女という性別に生まれてしまったらしい。

自分には、水月という名が与えられた。

物心付く前。女とは何なのか、と思った。

街にいる友人達、彼女達に訊ねてみた。

すると、女とは恋をする者だと言われた。

水月は、自分自身の肉体に違和感を覚えていた。

あるいは、自分自身の存在そのものに対して、懐疑の念を抱いていたのかもしれない。

それは幾ら年齢を重ねても、変わらなかった。

日々、成長していく肉体。

整っていく顔立ち。いや、昔から街で一番の美人だと言われた。

思春期の頃だろう。絶世の美女だ、と友人から冗談交じりに言われた。

絶世とは何なのだろうか。

美女とは？

水月の疑問は尽きない。

水月はよく、理屈っぽいとも言われる。しかし、思考の渦が頭の中を回っている。

まるで、思考する、という事を前提にしか生きられないかのような。

容姿が良い、という事はどういう事なのだろうか。水月はただただ、そんな事を強く考えていた。

水月は、男達から告白された。

告白の意味が分からない。

付き合うというのは、どういう事なのだろうか。一緒に会話したり、食事したりする事とどう違うのだろうか。その先の事が、頭に浮かばない。……いや、その先の事は多分、分かる。しかし、実感が持てない上に。その意味を感じない。価値を感じない。

どうにも受け入れがたい事実があるだけだ。

ただ、自分の肉体の成長を知って。

水月は夏でも、厚着を着込むようになった。

そして、帽子を目深く被り、日中を過ごした。

引き籠もりがちになった日もある。

他人との関わりが酷く、億劫になった。

自分は人間ではないんだなあ、とふと思った。

壁に架けられた天使絵。

それから、悪魔画。

そういった神話の世界に強く憧れていた。

水月は自分の肉体が醜いと思っている。

肉体を他人に晒したくない。そんな思いでいっぱいだった。

雪のように白い肌。透き通るような長い金髪。

水月は、美しいらしい。

しかし、それは水月にとって何の価値も無いものだ。必要の無いものなのだ。

水月は気付く。

ああ、自分は女じゃないんだ、と。

身体は女らしいのだが、どうやら、心が女じゃないのだろうと。

しかし、男なのか、と問われると分からない。

水月は、自分では自分の事を“中性”だと思っている。聞く所によると、天使には性別が無いらしい。

水月はひきこもりがちになった。

自分自身の肌も何故か見れなくなっていた為、浴室には余り、入れなくなってしまった。

鏡も見れない。自分の顔が嫌だった。

何故、他人から美しいと言われるものを、自身は醜いと感じてしまうのか。

水月は気付いていた。

人間は美しさに見惚れるみたいだが、自らが美しい肉体を有しているのならば、それは果たして幸福なのか、と。美しさは愛でるものであって、纏うものではないのではないかと。自分の美貌が嫌だった。自分の豊満な肉体が嫌だった。

自分は人間では無いのではないか、そんな事ばかり考えて過ごしていた。

それから、少しずつ、少しずつ、他人が醜いと呼ばれる物や感性に魅了されていった。

水月は死体集めが趣味になった。

まずは、剥製やホルマリン漬けの小動物、ピンで止められた標本箱の蝶を大量に集めた。

家が資産家で、両親が不在だった為。家政婦も遠ざけて、学校にも通わなくなり。一人、大きな屋敷の中に籠っていた。

水月の感覚は、天と地が反転するかのようになり、美醜がどんどん捻じ曲がっていった。

今後の人生の一切を、閉塞的に生きるしかないのだろう。

自分が好む耽溺の中で生きるしかない。

水月は、そう確信していた。

それにしても分からないものがある。

同い年の女達。

彼女達と、何故か話が合わなかった。

男の話。交際の話。それから、他人の陰口。

どうしようもなく馬鹿馬鹿しくなって、興味を失い、彼女達とは距離を置いた。

自分の肉体は呪われていると思った。

自分の肉体は、死なのだと。

だからこそ、水月は死体に憧れた。

死体はみな煙たがるが故に、美しい。

それに比べて、生きている存在は酷く醜く感じた。

自分の体臭が気持ち悪い。
排泄という行為さえも、気持ちが悪い。
呼吸しているという事さえも、気味が悪くて気持ちが悪かった。
ちなみに、この部屋には時計が無い。
ただただ、時間ばかりが過ぎていく。
水月は、今の自分の年齢を知らない。
大体、思春期の頃に、部屋を出なくなった。
今は幾つくらいなのだろう。二十は過ぎている筈だ。
もしかしたら、三十に届いているのかもしれない。どうだっていい。
問題はだ。
いつの間にか、自分の時間が止まっているという事だった。
老いないという現象が、肉体に発生している。
水月は、いつしか病的に、世界各地の奇妙な品物ばかりを集めるようになっていた。
水月の家には、財産が腐る程ある。どうやら、地主とやららしい。
この辺りに住んでいる者達の財産を徴収して、生きているみたいだ。
全部、顔も見ない家政婦と、年に数回のやり取りだけで財産の徴収を済ませていた。
両親は、何となく、水月を捨てたのだろうと知った。
そういえば、もう二年くらいの間、外に出ていない。
欲しいものがあれば、カタログを見て、注文を入れる。
そうやって過ごすのが、何よりも幸せだった。
将来は、骨董品などを売って過ごそうと考えている。
そういう風に、生きようと。

十

テレサは給仕のバイトをしていた。
客商売というのは、大変だが、やりがいはある。
店にやってくる客の一人一人を眺めるのが好きだ。
客の癖なども見つかったりして、楽しい。
仕事が終わる、家に帰る。
何となく、外の世界を見てみたいなあと思った。
旅費はある程度、溜めている。
窓の外を見る。夜景が綺麗だ。
何となく、外に散歩に出かけた。
今日は何だか、空気がいい。長閑な風も吹いている。
テレサは周りを見渡しながらか歩いていて、何か面白いものは無い事かと。
いつも歩いていく、散歩道。

一人の女性が、街頭にある露店に立っていた。

彼女はスレンダーな身体に、豊満な胸と腰をしていた。

それから、何よりも透き通るような白皙の美貌をしている。

彼女は何やら、唸っていた。

テレサは遠目で、彼女を見ている。

何やら、大きなものを手に取って見ている。

どうやら、オウム貝の化石を選んでるらしかった。

その露店は、珍妙なものばかりを売る店で、街の中でも一風変わった道具屋だった。

テレサは女を眺め続ける。

「両方、買おう。買って置いて、損は無いからな」

そう言って、彼女は露店の主人に、貝の入った袋を渡されて陽気な顔で歩き出す。

「あ、あのっ」

テレサが何故、こんな行動に移ったのか分からない。

彼女は、気が付くと、見も知らない美人に話し掛けていた。

「ん……？」

美女は、テレサをまじまじと見る。

「あ、あ、えと。あの、こういうの好きなんですか？」

「……んーん、大好きだぞ」

「も、もっと、良い店。教えましょうか？」

少しどもりがちだ。

「そうだな、教えて欲しい」

彼女は晴れやかな笑顔を浮かべていた。

テレサは、何だか。良い人そうだな、と思った。

十

彼女の名は、ミナヅキと言うらしい。

文字も教えてくれた。文字は不思議な形をしている。彼女は異国の者だという。

『水月』。みなづき。

テレサ達の街の言葉は、比較的この辺りの共通言語だ。

水月は、少し勉強して、ここにやってきたらしい。

「テレサ、というのか」

「は、はい」

お友達になってくれませんか？ と言いきうになって、口を嚙む。

彼女は街から外れた場所へと向かっていく。テレサは彼女に付いていった。

そこは、朽ちた教会を改造した場所だった。

夜中まで開いている。所謂、ブラック・マーケットと呼ばれる場所。

テレサは危険だから、行くなと親や友人から言われていた。

しかし、何故だか、水月と一緒にならば、平気だろうと思った。

不思議と彼女といると、妙な安心感を覚えて仕方が無い。

「この辺りでは、魔女狩りが流行っていたらしいな」

「ええ。でも、もう一昔前です。私の生まれた頃は無かった。私も教え聞かされたばかりで。とつても、怖い話でした」

「ふむ。成る程な」

彼女は何処か男言葉だった。

この地方においての、ちゃんとした女言葉を教えようかと言うと。

「いや、意図的に男言葉を使っている。私は女じゃないからな」

「女じゃない？」

テレサは困惑したような顔になる。

「性自認の問題かな。といっても、男だとも思っていない。強いて言えば、中性かな」

意味深な事を言う。

深夜の教会。

蝙蝠が空を飛んでいた。

教会の明かりが煌々と灯っている。

此処では、週に二回程、ブラック・マーケットと呼ばれるバザールが行われていた。

テレサ自身、此処に来るのは初めてだった。

様々なものが売られている。

異国の調味料に、船や馬車の模型。

沢山のあらゆる種類のナイフ、剣。手斧。乾いた血がこびり付いた、錆びた刀剣。

不気味なものが陳列されている。

奥に進むにつれて、怪しげなものが売られている。

動物の目玉の瓶詰め。トナカイの頭部の剥製。虎の毛皮。

更に、使い古された、拷問道具、処刑道具などが置かれている。

水月は廃教会にて行われるバザールにて、色々な人間と話していた。

此処にやってくるのは、表の世界では何をやっている人間なのだろうか。

明らかに、カタギではない。

そんな臭いが充満している。

顔に大きな傷のある女。

ぶつぶつと水晶球を覗き込んで、独り言を言い続ける老人。

延々とカードを並べ続ける中年の紳士。

テレサは占いをしてみないか、と言われて、断った。彼女に声を掛けた男は、片目を眼帯で覆った男だった。

様々な種類の蠅の標本箱。

白骨で作られたと銘打たれているナイフ。

なめされた動物の内臓で作った絨毯。

猿の首の生えた植木。

奥に進むにつれて、グロテスクなもの割合が増えていく。

水月は立ち止まった。

顔を包帯で覆った男に聞く。

「その棺桶に入っている標本は何だ？」

「処刑によって、生皮を剥がされた囚人の死体だ。刑務官がヤバイってんで、売ってくれた。こいつな、後で事件を調べた結果、何とまあ無罪だったんだよ。だから、ヤバイってんで、俺に売ってくれたんだな」

「それ、買いたい。最高だ。また、私のコレクションが増える」

「持っていくの、大変じゃないか？ お前、細腕だろう？」

「平気さ」

水月は底知れない、悪意と歓喜の表情を浮かべる。

その相貌は、何処までも無垢だった。

テレサは彼女を見て、少し、怖いな、と感じた。

正直、テレサは此処に来た事を後悔している。

見てはいけないものを見せられているような。

「それにしても、奇妙なもんだよなあ」

包帯の男は言う。

「お前さんみたいな、美人に限って。こういう品物を買いたがるんだよ。貴族階級の女達ばかりだ。まあ、お前さんは少し毛色が違うように見えるがな。もう少し、年の入っている美人が買いたがる。退屈なんだろうな、彼女達は」

「そうか、そうか。みんな、考える事は同じなんじゃないのか？」

彼女はとても楽しそう。

十

テレサは水月の泊まっている、宿に招かれた。

彼女が今晚のうちに購入した沢山の品物が、部屋の中に置かれている。

全部、馬車などで持って帰るのだと言う。

「後は、女の生首が沢山、欲しいんだよなあ。美人の生首」

彼女はぽつりと言う。

テレサは反応に困った。

「み、水月さん。貴方も相当、美人じゃないですか」

実際、テレサは彼女程の美人を見た事が無い。

絶世の美女という言葉が、遜色無く使える。

「私は、美人なのか……？」

彼女は、さも不思議そうに訊ねた。

「そうですよ。顔も、身体もすらっとしているし」

「私は、自分の肉体を捨てたいと思っている」

彼女は本気の声で言った。

テレサは面食らったような顔をする。

「私は美人なのか？ 分からないなあ。美醜が分からない。私に分かるのは、私がどうも、女としての役割を欲しないのと。強い死の耽溺に魅せられているって事くらいだ」

彼女は真顔で、そんな事を話し出す。

テレサは彼女の言っている事がよく理解出来ない。

「いいかい、テレサ。美ってのはな、美人ってのはな、認識の問題なんじゃないかなあ。時代によって、美人の形ってのも違うだろう？ それから、自分自身が美しいとかされる肉体を所有していても、仕方がないんじゃないか？ 何故なら、美しいものは、標本にしたり、瓶詰めにしたりするのが面白いだろう。加工して改造したりするのもいい。美は俯瞰によって顕現されている。私は自ら、纏いたいとは思わないんだよ」

顎に手を置いて、少し苦悩するような顔になる。

「私はな、人間を解体したいんだ。人間の欲望が何なのか、の研究をしている。けれども、私自身はどんな欲望も行使しない。私は傍観者でいたいんだ。沢山の書物、沢山のコレクションに囲まれて生きたい。人間の底知れない暗黒が好きなんだ。書物がそれを教えてくれる。聖書もね。あれはとても邪悪な教典だ。だから、私は聖書が好きだ」

テレサは彼女の言っている事がまるで分からない。

理解出来ない。

どういう感性の下で、どういう発想なのだろうか。

水月が言っている話の内容は、テレサにはまるで理解出来ない世界の話だった。

先ほどの廃教会での出来事も、夢の只中を歩いているような。

不気味な夢の中を歩いているような気分だった。

テレサは育ちが良かった。

彼女を虐げる者はいなかったし。彼女は太陽や草木を愛でていた。

幽霊話に本気で震え上がり、料理を作ったりするのが何よりも好きだった。

彼女は男達によくもてた。しかし、本物の相手と出会うまでは交際はしないと誓っていた為、誰とも付き合った事が無かった。

そんなテレサの理解の中においては、まるで異存在として水月は立っていた。

魔人。

そうとしか思えない。

「人間の眼鼻、顔の骨格。スタイルってのは幾らでも加工によって作れるんだよ、テレサ。私が仮に美人だとしても、それは私に何の意味も齎さないだろう？ 私は自身の容姿を何の有効活用もさせる気が無いからな。恋愛に興味が無い。性愛に興味が無い。この容姿を使って、金を稼ぐつもりもない。話を聞く限り、随分と面倒臭いらしいじゃないか。美人とやらはな。いや、女っ

ていう生き物がかな？ 私は女という生き物の享樂を貪るつもりが、欠片程も無い。でも、女の邪悪さは好きだ。情念、情欲。彼女達の醜さが好きだ。それこそ、コレクションにしたいんだよ」

流れるような言葉の数々。

テレサは黙らされる。

構わず、水月は喋り続ける。

「絶世の美女、美男ってのは捏造だ。人間の認識、頭の中のな。虚構物。問題は、人間は美しい異性を求めたがる。認識したがる。皮膚一枚めくれば、筋組織が露呈するのにな。それはどういう事なのだろうか。私は考えるわけだ。なあ、どういう事なんだろうな？」

水月の思考は、テレサにはまるで理解が出来ない。

それでも、彼女の言葉は。聞き入ってしまう、何かがあった。

「人間の精神の暗黒。私が何よりも愛して止まないもの」

水月の両眼は怖い。

まるで、テレサの心の内部の内部に、踏み込んでくるかのような。

十

「処で、テレサ。聞いてくれるか。私はどうも、不死の化け物らしい」

テレサは面食らう。

彼女の言っている言葉が、よく分からなかったからだ。

水月は。今日はかなり厚着をしていた。

全身を隠すマントを羽織っている。

スタイルがいいと言ったのが、とても気に障ったらしい。

彼女の思考はまるで理解が出来ない。

「私の眼からしてみると、どいつもこいつもストリッパーに見える」

と、分けの分からない毒を吐いた。

テレサには分からない。

彼女の女性性の否定が。

「私は観る側でいたい。つまり、鑑賞者でいたいという事だな。観られる側でいたくない。従って、芸術なども行わない。私は愛でるだけだ」

少しずつ、少しずつ、何だか。蝕まれていきそうな感覚。

テレサには分からなかった。彼女の事が何もかも。

「女ってのはあれだ。化粧で着飾る。ファッションで着飾る。肉体美で男性を誘惑し、同性をも扇情する。私はそんな生き物の仲間である事を止めたかった。別に君が理解する必要なんて無い」

何かに対して、彼女は恨みを抱いているかのようなだった。

きっと、それはテレサが理解出来ない領域のものを、彼女が認識しているからなのだろう。彼

女の価値観、抱えている視野を理解する事は叶わないかもしれない。

それでも、テレサは彼女に酷く惹かれている。

「それにしてもだ」

水月は微笑する。

「今日は空が美しいな。天体が輝いている。大宇宙の運河は素晴らしいものだな」

テレサは彼女を奇妙に思う。

女性らしい、繊細な感性も有していると思う。

十

「んーん。処で、君は私に付いてくるのか？」

テレサは困ったような顔をする。

水月も、困ったような顔になる。

「えと、.....旅をしているんですよね？」

「まあ。そうだが」

「お仕事を長期的にお休みして。付いて行こうかなあって」

「何故だ？」

彼女は本当に分からないといったような顔をする。

「え、えと。私、街の外ってどうなっているか見たくって。資金を貯め続けていたんですけど。踏ん切りが付かなくて。水月さんとなら、いいかなって思って」

水月は少し、首を傾げる。

「何で、私なんだ？」

「え、ええ？」

テレサは困った表情。

水月はまじまじと、テレサを眺める。

何だか、少し。悪辣さを含んだ表情になる。

そして、言った。

「いいよ。着いてくるんだろう。じゃあ、二日後の朝。街を出る。準備を整えておいて欲しい」

水月の声音は、とても優しそうだった。話していると、何だか落ち着く。

テレサは喜ぶ。

そして、家に帰った。

自分の部屋の中。

何を持っていこうか。二日後までには準備しなければならない。

何だか、ピクニック気分になっている。

しかし、街の外。新聞やテレビなどで、見聞きした情報しか知らない。

化粧品。櫛。ドライヤー。それから着替え。下着。ああ、お気に入りのブローチも持っていこう。花柄のヘアピンも。

「しかし、どうなのかなあ？」

くっくっ、と。くすんだ長い髪の女は、目の前の男に対して楽しそうに言う。

「そう。お前はこう言いたいのか。女は男の所有物であり、男としての所有の為に。化粧と衣服を纏わなければならないと。あまつさえ、仕草。振る舞いが。男の欲望機械でなければならない、と。つまり、女というものを物質化しているわけだ。凄いな？ 私に、官能的であれ、艶かしくあれ、と進言するのはいいだろう。しかし、お前の中にある無意識下の欲望は何なんだろうなあ？ 露出度の高い服、見られる主体としての仕草。お前は欲望するわけだ。くっくっ」

街中だ。

水月が、一人の男に絡まれているみたいだった。

テレサはそんな水月を遠目で見て、完全に呆れていた。

おそらく、歩いていたら。何気なく声を掛けられ、思わず男は彼女を“ナンパ”しようとしてしまったのだろう。

男は、本当に困った顔をしていた。

水月の言葉責めを徹底的に受けている。

嫌な女に捕まったものだなあ、とテレサは思った。

「お、俺は、ただもっと綺麗な服、着ればいいんじゃないかって」

ぼそぼそと男は喋る。

「ほう？ 他には？」

「え、えと。……これから、お茶しませんかって」

ぼそぼそと、聞こえないくらいに喋る。

「ほう？ お茶の後、何を目論んでいたのかな？ 興味があるな」

テレサは見かねて、彼女に駆け寄った。

「水月さーんっ！」

テレサは叫んだ。

水月は彼女を見て、ううん、と唸った。

「ああ、なんだ。えと、お前の方はなんだったかな？」

……忘れてやがる。

テレサは愕然とした。

「冗談だよ、テレサ。準備は整えたのかい？」

そう言って。彼女は飄々とした態度になる。

しかし。その後、ふと思いついたように。

「ああ、そうだ。お前、女を紹介してやる」

彼女は逃げていこうとする男に話を振った。

「彼女はテレサと言う。お前が望むならば、何でもしてくれるだろう。お前は汝が欲すべき物を

、欲せよ、をこの女に対して行える権利があるのだ。良かったな？」

男はテレサの顔を、まじまじと見る。

「……えっ、えっ」

「紹介してるんだ。私は駄目だが。彼女は君に一目惚れしたそう。良かったな？ 何でもしてくれるそうぞ？ そう、何でもだ。一目見て分かった、お前は異性に対して、何処までもエゲツなくなれる。抑圧しているだけに過ぎない。彼女ならば叶えてくれるだろう。どうだろう、彼女に着せたい衣装ならば、幾らでも私が手配するが。それから、彼女にして欲しい事の助言、彼女にしたい事の助言。何でも相談に乗ろう」

男の眼は、テレサに釘付けになる。

「えっ、えっ。み、水月さん……」

テレサは、勢いよく彼女の手を掴むと、男の下から急いで去っていく。

水月は仕方無さそうに男の下から駆け足で、離れる。

路地裏。

テレサは息を切らしていた。

「はあっ。はあっ。……み、水月さん……。な、何を考えているんですかっ？」

「出発はやはり明日だ。今夜のバザールで。年代物のフランス人形が売られる。刺し殺された妊婦のドレスもだ。それから、ホルマリン漬けの人体。胡散臭い魔道書もだ。欲しくなった。買ってから出発する」

水月は。

テレサの事など、殆ど気にしていない。

「将来、ああいう品々を売る為の店を開店するのが私の夢だ。まあ、ぼんやりとした構想しか持っていないけれどもね。買ってしばらく、愛でた後。売り捌く。ああ、勿論、売りたいものも出てくるだろうな、本当に気に入ったものは。それはそれで、ずっと保管するさ。今はとにかく、集めたい。そういった、品物をね」

水月はふっふっ、と。一人、空笑いを浮かべていた。

テレサは顔が引き攣っていた。

本当に、彼女に着いて行っていいのだろうか、と。

彼女は、やっぱり異質だ。

ひょっとして、これ以上、深入りしていいのかどうか分からない。

ひょっとして、信用出来ない人間なのかもしれない。しかし。

それでも、彼女には何かしらの魅力を感じた。

これまで、出会った事がない理解不能な人物だが。

けれども、彼女に付いていけば。色々な世界を見られるのだろうと。

十

バザール。

来るのは二度目だ。

二日前にも来た。

何だか乖離感を伴う感覚だった。

非日常の中に、また紛れ込んでしまったような。

此処にいる人々は、何処か異界の住民のようだった。まるで現実世界の中ではなくて、冥界の淵を彷徨っているかのような。

彼女は。巨大な二つの首を持つ、蛇の剥製を買っていた。

テレサは段々、彼女の趣味を理解してきた。

言うならば。

黒いモノ。

それに対して、異常なまでに執心している。

おそらく、この街を訪れたのは、このバザールの噂を聞いてからだろう。

何だか。彼女と一緒にいると、テレサも背徳的な気分になってくる。

「良い物をお探しかな？」

ふと。

そこには、背の低い老婆が立っていた。

「……良い物？」

水月は訊ねる。

「良い物。欲しいんじゃないろう？」

「何かによるな」

「あたしの名はヌーナ。欲しいんじゃないろう？ 人間の悪意を凝縮させたようなものが」

「……ふふっ？ 欲しいぞ。でも、何をくれるのかな？ 幾らで？」

そう言って。

老婆ヌーナは、水月の目の前にあるものを掲げる。

それは、短剣だった。

テレサはこの老婆に怯えていた。

影が無い。

いや、それ処か。

少し、この老婆から距離を離す。すると、何故か老婆の身長が少し高く見えた。更に距離を離す。更に、老婆の身長は高く見え。水月を追い越している。

……何なんだ？ こいつは？

テレサは両足が震えていた。

ここ数日の間、まるで夢の中を、ふわふわと彷徨っているように思う。

悪夢の中をだ。

「幾らで売る？」

彼女は短剣を手にとって、訊ねる。

「お主が出せる。最小限」

「ふーむ、この硬貨一枚でいいのか？」

「おおっ、そうじゃ、そうじゃ」

水月はこの辺りの硬貨を一枚、老婆の掌に置いた。

「この剣は。ヤバイな……持ち主の生命を奪う」

「そうよ、そうよ、わしは四十年、時間を奪われた。持ち主の生命力を吸い取る。もう少し言えば、所有者によって多少の変化はあるらしいのう」

「けっけっ、と老婆は笑う。」

「ふーん、いい品物じゃないか。欲しいなあ、これ。でも、お前」

水月は意地悪そうに笑った、

「手放したいんだな？」

「そうよ。残り短い人生、楽しみたい」

「ふうーん。この短剣は何て名前だ？」

「『アンサラー』という。大事に取っておいてくれないか？」

「分かった、買った」

そう言って、彼女は硬貨を老婆に渡した。

水月はクスクスと嬉しそうな笑みを浮かべる。

そして、テレサに向き直る。

「ああ、いい買い物したよ」

彼女はその短剣を腰の袋に仕舞う。そして、とても満足そうな顔をした。

十

水月とテレサの二人は馬車に乗る。

御者の男は、二人に礼をする。

馬車の中は、水月の荷物でいっぱいだった。

彼女はうきうきと、それらを撫でている。待ちきれなくなったのか。包みを開いて、仲のものを確かめていく。テレサは少し引いていた。

大きな棺桶に入った、グロテスクな死体。

テレサはずっと、窓の辺りを眺め続けてやり過ごす。

「まずは、これらの荷物を。宅配便で私の自宅に送り届けられる街まで行く」

彼女はそう言った。

此処から、数十キロ先に進むと、デュラスという女君主の領地に着くらしい。

そこでは、郵便所があるとの事だった。

水月は御者にそこに行くように言った。

荷物は馬車の御者に頼んで。郵便物として送って貰う事になった。

水月は送り先の住所を紙に書きとめて、渡す。

そういえば、彼女の家は何処にあるのだろう。

自分の肉体は体細胞の集積体でしかなく。それらを構成しているのは、分子と分子の結合でしかないのだろう。自らの肉体に神秘性など、何も無いのだ。

自然でさえも、自らを救済しないのだと思わなくてはならない。

食べる事、眠る事。空の青さ、花の香り。木々の景色。太陽の紅さ。それらも黒い闇を感じるのだと。

ぼんやりと、人間である事を止めたいなあとばかり思っていた。

日々、怠惰で倦怠な生活ばかりが続いていく。

何となく、老いに対する下らなさも感じていた。

人間は変わっていく。肉体の変化と共に。環境の変化と共に。

しかしだ、私は変わるつもりはない。それだけは私の唯一の信念なのかもしれないな。

どうしようもないくらいに、私は私自身の変化を拒んだ。

たとえばそれは、衣服。たとえば、それは老い。

自分自身の意思は他人の従属物でしかなく。

自分自身の意思は、他人によって変えさせられる。冗談ではなかった。

たとえば、性。

たとえば、性の役割。

女である、という事。

男である、という事。

エロス。

人間の、ありのままの生。人間が周囲によってあてがわれる生。

その渦の中から、抜け出したい。どうにも居心地が悪いからだ。

女の性。

見られる客体としての肉体。

あらゆる男に媚びる衣装。

女は性としての商品なのだと思う。そして。

女は男に商品にされた後、子供を孕み。男の補完物として生きていく。そんな風に見えてしまつて。女の側もそれを喜んでいて。男に所有されたいという意思を持ち。

水月は肉体を捨てたいと願った。

この肉体に意味を与えたくない、と。

世界のルール的一切を根絶したいのだと。

自らを世界のルールの価値に閉ざしたくない。

水月は。そんな事ばかり考えて、日々、生きていた。

夢の中で目覚める。

そいつは、そこに立っていた。

茶色に何処か薄っすらと、深緑が混ざるドレスを身に纏っている。

髪は両サイドを縛っている。美貌だ。

周りは、灰色の大地だ。岩山の中にいる。

「おや。こんにちは」

そいつは笑顔で会釈した。

「お前は、何だ？」

「私は貴方が買った、短剣です」

「アンサラーという名前だったかな？」

「そう、でも。私の名前は『他人の死』と呼んで下さい」

そいつは、再び。会釈した。

ドレス姿の美貌。曲線的な肉体をしているが。

「お前、男だろう？」

彼女は断言した。

「ええ。そうです」

他人の死は頷く。

「ふむ、私と同じ匂いがするな。性別を超えたいのか？」

「というよりも。人間を止めた向こう側には、性の否定があるのかもしれませんが」

他人の死と言ったか。

意味深な名前だった。

どういう事なのだろうか。他人の死。不可解な名前だ。

「あれは、あの人は。何ですか？」

隣で、一人の女が目を覚ました。

彼女も、この世界に来たのか。

そいつは、クスリと笑う。

「私は悪魔。君達で言う処のそれかもしれないね」

風で、両サイドの髪が揺れる。

テレサは辺りを見渡す。

枯れた木々。枯渇した湖。太陽の無い、灰色の空。

「此処はどこなんですか？」

「夢の世界だろうな。何で、お前と私は意識を共有しているんだ？」

「えっ、えっ。そんな事、言われても……」

水月は他人の死に向き直る。

「それで、お前は何の為に出てきたんだ？」

とても、つまらなそうな顔。

他人の死と名乗る者は。そんな彼女の表情を、意に介する事なく。自身の目的を言う。

「貴方の運命を見る為に」

「ふうん？」

「運命が欲しくありませんか？」

「いや、別に」

水月は淡々と返した。

「そうですか。貴方はそうなんですね」

そいつの周囲から。瘴気が満ち溢れていく。

「他の誰も。私を使いきれない。私は幸福と共に、彼らから寿命などを頂きます。まあ、等価交換みたいなもんですよ」

「ああ、そう。呪いの道具って奴か」

水月ははあっと溜め息を吐いた。

「呪われるのは間に合っている。それで、話は終わりか？」

「……えっえと」

テレサは思わず、噴き出した。

「何か、願いでも……」

「無い」

水月は、きっぱりと言った。

「でも、その為に私を買ったのでしょうか？」

「いや。何か、この手のものを集めるのが私の趣味なんだ。効用に興味は無い。願いなんて、もう自分で叶えられる。お前はちゃんとコレクションの一つをやっていればいいんだ」

悪魔は無言になる。

水月の方が、一枚上手だな。

テレサはそう、苦笑した。

「とにかく。私は貴方の旅を見たい。私を色々な場所に連れて行ってください。私は旅する悪意なんだ。そっちの方は約束出来ませんか？」

[いいだろう]

水月は笑った。

鋭利な悪意。彼らから、そのようなものを感じた。

十

馬車から降りて。道端を歩いていると、河が流れていた。美しい河だ。

奇怪な顔の者が釣りをしていた。

魚だ。

大きな魚がヒレで釣竿を持って、釣り糸を河の中に垂らしている。

「何が釣れるんだ？」

水月は魚に訊ねた。

魚は此方を見る。横からはみ出た、巨大な黒い眼球。

「鳥と獣を釣っている」

魚はそう言う。

「そうか。釣れたものはあるか？」

魚はヒレを動かして、後ろにある樹木を差した。

そこには。ぴちり、ぴちりと、陸の上に上がって跳ねている大きな虎の姿があった。

テレサは水月の背後に隠れて、その様子を眺めていた。

彼女は水月の袖を引っ張って、此処から離れるように示唆する。

異空間だ。

魚は、びちい、びちい、と背ヒレを揺らし、エラを震わせている。

隣には。大きなザリガニがいた。同じように、釣竿を垂らしている。

デス・ウィングは、テレサを眺めていた。

そして、おもむろに呟く。

「気にするな。テレサ。ああいう異形は何もしてこない。只、いるだけだ。街中を歩いている群衆と同じだ」

そう言いながら、水月は河沿いを歩いていった。

デュラスの領地。あるいは中心地である『ヴァーゲン』に向かって。

十

デュラスは経済を回している。

彼女は言う。欺瞞無く言う。

私は支配をしているわけじゃない。民に手を貸しているだけに過ぎない。民が望んでいるんだ。

街中では、沢山の餓死者がいる。もっと、酷いのは餓死も出来ずに、中途半端に餓えて、過酷な労働環境の中に生きる人々だ。

この国は自由主義なのだという。なので、国民の在り方は平等なのだと。

実態は、資本家が自由に生きている。

彼らは、労働者は悪だと言う。弱者は悪だと言って、罵る。生存競争を持ち出し、適者生存論を持ち出して。資本家は本を出す。上流階級から中流階級の暮らしをしている者達が、本を手に取り、資本家を賛辞する。

そうやって、体制は維持されていく。

まるで。一個の収容所のように見えた。

みな、此処の国の体制を自由だと思っているのだろうか。

間違いがないのは。

デュラスを殺したとしても、なお。この国の経済状況は変わらないという事実。

中流階層の暮らしをしている者達の一部で、下流層、最下流層を救済しようと。彼女の暗殺を目論んでいたが、悉く失敗に終わって、次々と投獄され、中心人物は死刑に処された。見せしめとして、彼らは公衆の面前で死体を晒され。新聞記事に顔写真を載せられた。

そして。

デュラスは、暗殺の件に関して。言った演説がこれだ。

……私を殺しても。この国の制度は何も変わらない。

と。

きっぱりと、彼女は述べた。

実際、デュラス自身、別の支配者の跡継ぎを続けているだけだった。実際、彼女が死んでもなお。この国の制度は変わらないのだろう。そして、この制度は一定数、秩序を保ち続けている。

デュラスは支配者としては、以前よりもマシな方だとも聞く。

街のシステムの破壊を目論んでいるのは、いつだって中流階層ばかりだった。下流階層の者達は、自分達の人生を肯定している。宗教を作って肯定している。どれ程貧しくても、救済があるのだと信じている。下流層は更に、下の者達をも見下している。這い上げられるのだと信じて、自らの生き方に疑問を抱いている。

この空は寒い。

凍えるような空気だ。極寒の風が吹き荒れる。

システム自体が動き続けている。

民は、みな。システムの維持を願っている。

そうする事によって、安心が得られるからだろう。

弱者の側もまた。自らが奴隷である事を、享受し。宗教的なものに縋って、自らが奴隷である事に大いなる意味を見出している。神々の環の中で、与えられたものなのだと。死後の世界で救済が行われるのだと考えている。

……といったものが。この街の事前知識となる本を読んで分かった。

どちらかという、反体制側の人間が、中立的に書いた本だ。

簡単に手に入るもので、水月は馬車の中で、その本を読んで。テレサにも渡した。

テレサの住んでいる場所は、比較的経済が安定している場所だ。

自殺者こそ多いが、『ヴァーゲン』の中央区程に、酷くはない。

テレサは、自分が如何に。世間知らずなのかを思わされざるを得なかった。

この世界にはどうしようもない程に、抗いがたいものがあるのだと。

「デュラスを殺しても。資本家達を殺しても、何も変わらないだろうな。システムには終わりが見えないのだからな。支配者が入れ替わるだけだろうな。人間ってのは凄いな？ 自らが、支配される事さえ。望んでいるんだ。安心するのかな？ どんなに苦痛に満ちた人生でも、慣れるんだらうなあ」

テレサは、彼女のそんな言動に辟易する。

「私はこの街が好きだよ？」

彼女は少し、楽しそう。

「水月さん。……」

テレサは泣いていた。

「何で。この世界は、こんなに酷いんでしょうか……」

「さあね」

そっけなく返されたが、水月は何か考え事をしているようだった。

「今夜泊まる宿を探そう。また夢の中で『他人の死』とやらに、邪魔されないといいんだけどな」

彼女は宿を探していた。

標識のように立っている、街の地図を眺めた。

「幽霊屋敷……？」

彼女は好奇心に満ちた眼を浮かべている。

十

そこは閑散とした場所だった。

街の外れに建てられている。みなから、放置されているみたいだった。

途中、街の雑貨屋に寄って、この屋敷の事を訊ねたのだが。ずっと、放置されていると言われた。

特に、立ち入り禁止というわけでもないらしい。

「今晚は。此処に泊まるのか」

彼女は楽しそうに笑った。

テレサは困ったような顔になる。

「シャワーとか無いんじゃないかなって」

「私は何も気にならないけどな」

屋敷に入って。不思議な光景が広がっていた。

とても綺麗だ。誰かが住んでいるのだろうか。

だからこそ。とても不可解だ。

違和感というものは、とにかく。頭の中ですぐに理由を組み立てられなくても、確かに感じるものだ。

「水月さん、水道から。水、出ますよ」

ばしゃばしゃ、とテレサは両手を洗う。

「バスルームに電気が点きます」

テレサははしゃぐ。

「あっ。お湯も出ます」

テレサは屈託なく、笑った。

水月は警戒心を露にする。

しかし。荷物を置くと。気にせずに寝台で眠る。フカフカの毛布だ。

十

テレサは湯船に浸かる。外は寒い。癒される。

ぽとり。

音がした。

ぽとり。音がする。何だろう。と彼女は思う。

見ると。

どろっと、赤黒く染まった液体が。蛇口から滴り落ちていく。

血液。それも、何だか。腐臭さえ漂わせている。わさわさ、と。蛆虫の死体も混ざり合っている。どろり、と。内臓の一部、骨の一部のようなものも混ざっている。

どろどろと、濡れたタイルの上を赤黒く染めていく。

もぞもぞっ、と。蛇口の先から生き物が這い出してきた。それは。

指だった。指が蛇口から咲き出そうとしている。

気付けば。

シャワー・ノズルの無数の孔から、黒い髪の毛が這いずり出している。

ぷちゅり、ぷちゅり、と音が鳴り響く。

ぱちい、ぱちい、と電灯が明滅していく。

テレサは震え出した。……………。

水月に助けを呼ぼうとする。しかし、声が届かない。まるで、防音室のようだ。

シャワー・ルームの中にある鏡。

鏡には人影が映り始めていた。女の顔だ。

顔がどろどろに溶解している。物の腐った臭いも漂ってきた。

テレサは泣きそうになる。湯船から這い出す。

そして、必死で。ズブ濡れのまま服を着ると。飛び出した。

その間にも。

髪の毛を、後ろから引っ張られる。そのせいで、ひっくり返りそうになった。

水月は、家に郵便で届けずに置いておいた幾つかの品物に魅入っている。

テレサが騒いで、面倒臭そうな顔をしていた。

「み、み、水月さんっ！ お風呂の中っ！」

「ああ。私達に出て行って欲しいんじゃないのか？ 招かれざる客なんだろうよ。まあ、人を殺すだけの力なんて彼らにはあるのかな？」

と、彼女は眠りに付いた。

……………しかし。

気付けば。

窓の隙間。台所の隙間から、沢山の白い腕が這い出してきた。

床下からも。無数の白い髪の毛が這い上がってきた。

大量の目玉が転がっていく。

「テレサ。毛布の中に入れ。私の隣に來い」

水月は強く言う。

死が、部屋中を這い回っていた。

そして、二人は朝まで熟睡した。

結局、何も起きなかった。

「何だったんですか？ あれは」

「幽霊。残留思念というか。壊れた思念が集まってきたんだろうが。私達に危害を加える事は出来なかったらしいな」

そう言って。二人は屋敷を後にする。

「そっか、みんな天国に行ければいいのだけど」

テレサは怖い思いをしながらも。時間が経過して、少し安心すると。そんな事を口走った。

「テレサ。この世界には死後の世界なんて無い。冥界なんてものはな」

水月は意味深な事を言う。

「幽霊ってのは、思念の残り香みたいなものだ。死後の世界があるわけじゃない」

まるで、テレサの見たものなど、何も無かったんだと断言するように、彼女は告げる。

「『ヴァーゲン』の市場には良さそうなものが売っているらしいじゃないか。何でも香辛料がいっぱい。これから、買いに行こうと思うんだ」

「えっ。そうなんですか」

十

市場内には、色々なものが並んでいる。

.....

魚、羊肉、塩漬け、野菜。食糧だけではなく、薬や日用品なども売られている。

テレサはそれらを眺めて、大きく息を吐いた。

テレサの街では売られていないものばかり。目新しい。

「何か買って。料理しようか」

水月がそう呟く。

「はいっ！ 私もそんな事を考えていた処ですっ！」

ふと。

一人の男が近付いてきた。

どうやら、市場の路地の奥から歩いてきたみたいだった。

男はまるで、昔からの知己の仲のような物言いで言う。彼女の方は、この男を知らない。しかし、実際、彼の方は彼女の事をよく知っているのだろう。

「デュラスを暗殺しようと思うんだが」

男はそう言った。

彼は背中に布切れに包まれた何かを背負っている。

それは何か分からないが。とても歪だ。

彼は顔を布で隠していた。

髪の毛は白髪交じりだった。若白髪だという。

「ふーん」

水月は淡々と返す。

「また、何で？」

「民が苦しんでいるから。下層階級の者達が」

「そうなんだ」

他人事だった。

水月はふと、思った事を訊ねる。

「それより。紅珊瑚の砂を知らないか？ 何人もの者達を死に至らしめた香辛料らしいのだが。此処で手に入ると思ってな」

「お前。……『デス・ウィング』だろう？」

男は言った。

水月は、少し眉を顰めた。

「んん。何の事かな？」

「お前の風貌を仲間が知っている。背徳者と呼ばれているらしい連中の一人だそうじゃないか。なあ、頼む。手を貸して欲しい」

「何で？」

「民が苦しんでいる。俺はエリートじゃない。俺は下層出身だ。エリートの奴らのように変な正義感に燃えて権力を壊したいわけじゃねえんだ。残飯を食って生き延びた事だってある。なあ、協力してくれ。確かにデュラスを殺す事に意味は無いかもしれない。けれども、民は希望を取り戻す。現実が無力じゃないって事が分かると思うんだ」

「知らない。関係無いだろう？」

「お前なら、デュラスを殺せるだろ？」

「知らない。もう、用は無いですね？」

男は、何だかやるせなさそうな顔になる。

「どうしても、動いてくれないのか？」

「何で。私が人助けを？ それは私がすべき事じゃないじゃないか。苦しむ者はいるだろうな。何故、彼らを助けなければならない？ また、新たに苦しむ者が変えられるだけなのに？」

まるで、愚か者を見るかのように。彼女は言う。

男はそれを聞いて、怒り出しそうになった。

「お前に分かるのか？ 不平不満を言えば、ムチ打たれる人間の苦しみが。誰にも認められず、才気を潰されていって。可能性を潰されていく者達の苦しみが」

「分からないよ。分からないな、他人の痛みなんて。他人の痛みは所詮、他人の痛みだろう？」

それこそ、他人の死だってそうだ。何処まで行っても、死は分からないだろう？ 死んでみなければ。だから、私は死が見たいんだ。死臭のするものが大好きなんだよ」

「お前はデュラスを殺せる力があるんだろう？」

「さあてね」

水月は本当に、鬱陶しそうな顔をしていた。彼との会話に何の意味も感じていない。そういったような。

男は今にも、彼女に掴み掛かりそうだった。

「そういえば。君の名は？」

男は。はっ、とする。

「ああ……すまん。俺はジルズ。名乗り忘れた、すまない」

水月は自分の話をする。

「紅珊瑚の砂は毒殺に使われていたものらしい。分量を少し間違えるだけで。濃度次第で人を死に至らしめる。最高の薬物だ。あの緋色がまた良いらしいんだ」

男は面食らっていた。

水月の反応に困っているのだろう。

「他人の傷を見る時。私は何処までも幸福を感じられる。人間の苦痛。それって、私がもっとも愛する者の一つ。何て素敵なんだろうって思うね」

彼女は何処までも、他人の苦しみに無関心だ。

冷たい、というよりも。そこには、押し潰してくるような悪意があった。

まるで。周囲の人間、みな的心を蝕んでくるような闇のごとき言葉。

「やっぱり、この街で手に入るものは良いものが揃っていきそうだな」

紅珊瑚の瓶詰めを手に入れて。水月はとても喜んでいた。

この色彩に魅入られた、沢山の者達が死んだのだという。

市場を出ると。ジルズとその仲間達がいた。

「なあ。良い場所に連れて行ってやろうか？」

ジルズは、場所の概要を説明する。

すると、水月は喜ばしように頷いた。

十

沢山の絞首刑に処された者達が吊るされている。

それは野ざらしにされて、鴉が腐肉に集っていた。

所々から、白骨が露出して、乾いた粘液が滴り落ちている。

ぽとり、ぽとり、と。

彼らの肉体から地面に、滴り落ちた液体は。

あらゆる、呪詛を吸っているかのようだった。

「俺達の仲間だ」

ジルズは、言う。

テレサは思わず、顔を覆っていた。

木の陰に向かって、蹲っている。

「悔しいんだ。デュラスの奴……。俺の兄貴分も混ざっている。見せしめなんだよ。敢えて降ろさない事にした。眼を背けたくないから」

「なあ。ジルズ」

水月は笑顔で言う。

「どうかな？ 彼らの身体から。部品を頂戴出来ないかな？ そしたら、少しは協力してやってもいいけど？」

本気の眼だ。

ジルズは感情が洪水のように迸る。一体、それがどのような感情を喚起させたものだったのか分からない。

ただ、震えていた。全身が小刻みに。

「死体は全部で十一人か。そうだ、左から二番目の奴の頭蓋骨。その右隣の奴の腐った小腸と大腸。右から三人目の奴の右手。右から五人目の奴の胸骨が欲しいかな。どうかな？ それで、少しは手伝ってあげるよ？」

「デュラスを殺して欲しい……」

男は呻くように言った。

「分かった」

彼女はとても、嬉しそうだった。

そして。ふと、思い付いて言った。

「なあ、ジルズ」

彼女は屈託の無い笑みを浮かべて言う。

「そうだ。絞首刑にしているロープ。彼らを吊っている紐、それも全部、私に出来ないかな？ 腐敗した肉の汁が染み付いたロープ。欲しいんだよ。本当に」

若白髪の男は。……悪魔と取引しているのだと実感した。

十

いつだって。死は他人の死でしかない。自分の死は何処までも分からない。

他人によって、語られる死。自らが他人の死を参照し、考える死。

いつだって、死は他人の死でしかない。

アンサラーと呼ばれる刀剣を見つめながら、他人の死という名前に付いて、色々と想像を巡らせていた。

水月は。

テレサを連れて、今日の宿泊先へと向かっていた。

宿と大衆浴場が一緒になっている場所だ。

「水月さあーんっ！」

テレサは叫ぶ。

「凄い。宿の中もあったかい」

「……。全部、底辺労働者から搾り取って作り上げた場所だけだな」

水月はそっけなく言う。

テレサは引き攣る。

「一応、言っておくけど。私は風呂は嫌いだからな」

「そんな。綺麗にしておかないと駄目ですよ」

「充分綺麗なんだよ。別に私は臭わないだろう？」

所謂、大衆浴場と言う奴だ。

バスローブを借りる。タオルケットも。

「あのなあ。テレサ」

何処か世間知らずというべきか、どうでもいい事で気分が高揚するというべきか。

「一応、言っておくけど。私は風呂に入れぬ身体だぞ。……って、聞いていないか」

テレサはいつになく、はしゃいでいた。

十

水月は袖をまくる。

そこから、得体の知れないものが広がっていく。

彼女は崩壊する。

肉体を構成しているもの、それは人とは違うのだ。

確かに。服くらいは洗濯した方がいいかもしれない。

自分の服の臭いを嗅ぐ、特に異臭はしない。だが、少しだけ自分自身が不気味に感じた。

……服さえも、自分の肉体の一部と化していつている。

水月は心の中で自嘲する。自分は化け物だな、と。

しかしまあ、旅の相方の要望に付き合う事にした。

湯船の中に浸かる。

まるで、霧の中を進んでいるよう。

そして、熱が全身の一粒、一粒に駆け巡る。

水と混合していく肉体。まるで、自然の只中を幻視する。

「水月さん？ 水月さあーん」

テレサは彼女に呼び掛けていた。

しかし。彼女はすぐ、傍にいた。

どうしたのだろうか。あのくすんだ長髪の女性の姿が見えない。

十

水月は風呂から上がった。

脱ぎ捨てた服。その中に、白い霧のようなものが現れて、徐々に立体感を与えていく。

「捨てたものじゃないな。風呂というものも」

彼女は何の体温の変化もないまま。風呂から上がった。

それにしても。

テレサは、何処か空回りしていると思う。まあ、別にどうだっていいのだが。

十

ジルズは組織が必要だと考えている。

君主であるデュラスを倒す為の組織が。

しかし、彼女を殺す事だけが変革の勝利じゃない。

他の政府高官、資本家。そいつら全てを暗殺しなければならない。

何もかもを破壊して、殺戮していけば、未来が見えてくるのだろうと。

確かな意思はある。出来ると思っているし、可能だと信じられる。

ジルズが宗教を信じなくなったのは。彼の友達が、中流階級の間人で。小さな商売をしていた事だ。小企業だったと言ってもいい。二十歳くらい離れた友人だった。

飲み屋で、荒んだ彼に酒を奢ってくれた。いつもだ。

世話になっていた。

彼の立ち上げた企業が潰されて、彼は一気に。転落していった。

そして、そのまま。彼の生活は荒んでいった。

それを知って。

ジルズは、デュラスを殺す事に決めた。

友人を豹変させた奴。

正義感の為なのだろうか。分からない。

ジルズは此れまでの生活を、耐え忍んで生きようとしていた。しかし。

転機のようなものがあつた、それは彼にとって生きている道標を大きく変えたものだった。

何故だろう。複雑な感情。

彼にとって、生活苦は困難なものではなかった。周りの者達も、当たり前的人生を送っていたから。

十

デュラスは会議室に赴く。

彼女は羽飾りを全身に纏う。富の象徴。

彼女は言う。

「国を一定数、維持しなければならない」

机を叩いた。自分の信念を頑なに持たなければならない。決して折れないように。そうする事によって大きなものもまた、支える事が出来るのだから。

彼女は流血、惨劇の数をコントロールしたいと考えていた。

それこそが。犠牲者、弱者、苦しむ者達を最小限に抑えられる方法なのだと。

法を整備しなければ、犯罪が多発して、今以上の暴力が巻き起こる。

意図的に、階級のようなものが国民の中にあるのは必然だと思っている。そうしなければ、社会の蓋が外れてしまうから。

デュラスが何よりも警戒しているのは。

ヒースという女君主だ。

彼女は危険だ。危険過ぎる。生命原理、欲望に基づいて行動しているのだと聞く。

兵器開発。

それから。『背徳者』としての、“能力”。

それが、もっとも危険なものなのだ。

ヒースは、人間を化け物にしたがっている。それこそが至上の喜びなのだと。それは、デュラスにとってはまるで理解の出来ない事だ。正直、怖気しか湧き上がってこない。

国民を守らなければならない。

デュラスには愛国心がある。国家の維持の為には、沢山の犠牲者は付き物なのだろう。

いつか、自分もまた。暗殺者によって討伐されたり、身内に毒を盛られて殺されるかもしれない。それは覚悟しなければならない。

多くの者達を救う為に。一部の者達には苦痛を与えなければならない。それはもうどうしようもない程の、自然の摂理なのだと考えている。あるいは、現状の人間の限界なのかもしれない。

政府高官の代表であり、軍人でもあるムシュフシュ。

参謀を務めているワーロック。

彼らはデュラスによくしてくれる。

この国は、デュラスだけのものではない。この地位は、自分の力だけで獲得し続けているものではない。

しかし。

暗殺者を討伐する為。それから、ヒースとの戦いの為の戦力が不足している。

武装訓練を行っている親衛隊員、騎兵団は存在する。しかし、そんなもの、『背徳者』の前では、紙屑同然なのだ。

政府高官、親衛隊長、政治家達が悉く、殺されてもなお。国家を維持しなければならない。

デュラスは国民を愛している。愛しているが故に、独裁者を務めなければならない。

一党独裁。特務警察を用いてでも、謀反人達は処刑しなければならない。

この国家の基盤こそが、信じるに値するものだった。

それが、彼女の根底を支えている、揺るがないものだ。

下層労働者達には、まず農業や工場労働を営んで貰う必要がある。

彼らの苦痛、不満は。宗教における思想によって満たさなければならない。

これは、神々の与えた試練なのだと。デュラスは下層労働者に訴えるのだった。

迷いは無い。みな、なすべき事をなすべきなのだと彼女は考えている。

第二幕 ダーク・クルセイダー

猛吹雪だ。

ザルファは相棒のソルティアと一緒に、雪原の中を歩いていた。
一面は、白樺の樹木によって覆われている。

「ソルティ」

彼は略称で呼ぶ。ソルティアは言いにくいと。
その呼び方を、銀髪の人物は嫌っていない。

「俺は身体が弱い。ちゃんと守ってくれるよなあ？」

彼は相棒に言う。
男が纏っているのは、僧衣に似た、深緑色の服だった。
彼の瞳も、淡い緑をしている。
もう一人は。鎧を着込んだ、長い銀髪の髪の男。
二人共、眼の眩むような美女のような顔立ちの男だった。
華奢な身体だ。

「車が欲しい」

ザルファは言う。
彼の肌は雪のように、白かった。

「こんな吹雪の中じゃ、動かせないよ？」

ソルティは、呆れたように言った。

「それでも、俺は車が欲しいんだよ。運転してみてえな？」

戦乙女と。

闇の十字架。

二人の事は、そう呼ばれている。

二人は、背徳者だった。

『グール・ブレス』と。

『ダーク・クルセイダー』の二人。

彼らは、ヒースとデュラス。二人の女帝を殺しに行く途中だ。
何故。殺したいのか。理由は無い。何となく、何かを獲得したいから。

「私は太陽が欲しいなあ」

青白い肌のソルティは言う。

「お前は太陽の下でも生きられるのか？」

黒髪の男は、意外そうに言った。

「ふふっ、私は、生きられるよ？ 太陽の真下でも、私はね」

「なあ。車ってのは、太陽を模したものらしいぜ。車は地上にある自然のものを模したものじゃないからな。あれは、太陽を模したものらしい」

まあ、太陽ではなく、月とも言われているけどな。と、彼は付け加える。
日の光が欲しい。
胸の中に届く程の。……。
それにしても、いつの頃からだろうか。
二人が、闇に塗られた道を歩くようになったのは。
「それにしても。俺はこの吹雪の中、極寒の只中で。凍死するって事も在り得るわけだ。化け物なのにな？ 笑えるだろ？ なあ、ソルティ。お前は違うんだろ？」

十

ヒースの領地だ。
彼女は、自らの兵隊達を創っている。
若い女達を集めて。
自らの能力である『テンパランス・リバーズ』を注いでいる。
聞いた話によると、ヒースと対象者との接吻によって能力を浸透させる事が可能らしい。
悪趣味な話だ。
体液と体液の混合によって行われる、能力の浸透。薬物の注入のようなものなのだろう。女同士の絡み合い。自らを、獣そのものへと変えていく願望。
何故、彼女達は人間である事を止めたがるのだろうか。
理性の否定。
動物的本能。
ヒースの能力。
それは、人間が獣人へと変えていく能力だ。
彼女達は、何よりも獣性を帯びて。肉体が豊満になり、官能的になり、身体の所々が奇形的な獣の部位へと変化を遂げる。
胸の先端と。下半身の付け根を申し訳程度に黒い体毛や、鱗や甲殻で覆っているが。恥ずかしげもなく、裸体を晒して歩いている。
この能力の影響を受けた者は、理性が壊れていく。
彼女達は、手に手に、槍や斧などを持っていた。
彼女達は自身の肉体に誇りを持っているのだろう。陶醉感に酔い痴れているのだろう。
ザルファは見下げた眼で、見ていた。
卑猥な、ストリップ・ショーだな、とザルファは嘲笑った。
彼女達は、獣欲ばかりで生きている。
ザルファが嘲る女の、総体のような連中。
彼の深き、暗渠が燃える。
憎悪を込めた、深緑の眼。
「さて、俺にやらせる」

ザルファはソルティを制した。

十

ダーク・クルセイダー。

闇の十字軍、という意味だ。

ザルファが、指している闇の十字軍とはつまり。

老いていく人間の事を差している。

老いて衰えて、醜くなっていく者の事を差しているのだ。

.....。

ザルファの力とは、.....人間の肉体を老いさせる事だった。

ザルファの能力は、生命エネルギーを吸い取っていく。

皮膚が乾き、細胞が終焉へと向かっていく。

彼は老いを撒き散らせるのだ。

ザルファは他人から若さを吸い取る事によって、不老足り得る。

奪う事によって、生き長らえる生命。

相当、凶悪な能力だと、ソルティからは言われている。

しかし、大きな問題がある。

まず、何よりも身体が弱く、脆い、ザルファ自身には、肉体的な戦闘能力が皆無である事と。

老いないタイプの能力者に対しては、一切、攻撃が通じないという点だ。

従って。ヒースの兵隊達を全滅させる事は可能であっても、ヒースに対して、果たして効果があるのか。と問われると、疑問だ。

もし、効果が無かったら致命的だ。

殺す手段。倒す手段が、限られてくる。

獣の姿をした女達は、見る見るうちに、老い衰えていった。

顔が皺ばかりになり、乳房がひしゃげ、腹がたるんでいく。

そして、髪が白くなり。歯が抜け落ちていく。

その惨状を笑い転げながら、ザルファは見ていた。

本当に、無邪気な笑い。

本当に、彼はこの光景を。心の底から願っているのだろう。

やがて。全ての時間が奪われる前に、老いは停止する。

彼女達は、惨めな老後を過ごすのだ。

それにしても、特に女によく効果のある能力だ。

能力者でなくとも、男に対して効きが弱い時が多い。

しかし、女には本当に良く効く。

ザルファの持つ髑髏は姉のものらしい。

初めて殺した女。姉。醜いと思った女。

いつまでも、若く在りたいと執心した。年の離れた姉。

自分の方が美しかった為に、よく嫉妬してきた姉。

ソルティは思う。

おそらくは、彼の嗜虐性は姉に対する敵意が一つの原点になっているのかもしれない。と。何度も、何度も。夢想の中で、刺殺した姉。殺してもなお、殺し続ける姉。

姉と徹底して、違う生き方をしたい。そんな考えがある。男を渡り続けた女。

「さあ。ソルティ。死に近い場所に行こうぜ？ きっと安らかな場所なんだ」

彼は紫紺の髪の子に言う。鼓舞する。

彼の双眸からは瘴気が放たれているかのようだった。

十

破裂した爆弾。

光の輝き。

星々の煌きのようにもある。

それは、輝く群れ。運河のようにもある。その跡地。

そこは。

ヒースの作り出した、実験場の一つだ。

沢山の武器が廃棄された場所。

降り注ぐ黒い雨。

黒く染まる大地。

生命が腐っていく場所。

ザルファはその敷地内に無断で入っていく。

監視の眼は無い。

おそらく、半分、放置されているのかもしれない。

彼はまるで、ピクニック気分でこの場所に入り込んでいる。

何だか、この景観がとても気に入ったのだと言う。

本当に。変な奴だなあ、とソルティは思う。

沢山の放置された死体。

黒い白骨。炭化している墨と化した、黒髑髏。

ザルファは次々と、それらをポラロイド・カメラで撮影していく。

「楽しいな。楽しいな」

うきうきとした邪気の無い笑み。

彼は両手に持った髑髏を撫でていく。

「さてと。ソルティ。お前はやるんだ。此処を支配しようぜ？」

死者達の復活。

それが、ソルティアの能力だ。

しかし、彼は首を横に振る。此処では、使ってはいけないのではないかと。

「何だ。つまらないな」

ザルファは舌打ちする。

彼のように。非道になれない、それがソルティだ。

十

ザルファは人間の苦しんでいく惨状を見るのが好きだった。

核実験によって巻き起こった、焼け爛れた人間達の行進。

呻き声、悲鳴、啜り泣き声。苦しみが空に響き渡っている。

美しい、と。

そういった世界を、彼は美しいという。

美しいのだと、言い切る。

彼の肉体は脆い。その辺りの人間と何ら変わりはない。いや、普通の平均的な人間よりも脆いだろう。

彼は自らを戦禍の只中に置く。

自らの死を厭ってない。

あるいは、死という感覚が分からないのかもしれない。死の恐怖が何なのかも。

「戦争が早くみたいね。見たい見たい。沢山の焼け爛れた死体。焼夷弾で身体が焼けた人々が苦しみながら歩く姿が見たい。美しいんだ。あの光景は。理性なんて何処までも飛んで行くんだよなあ。人間のあるべき姿。あるべき美しさ」

彼の口調は、いつになく無邪気だ。彼は、時折、こんな感じの童子のような口調になる。

ザルファは、死体を。花や緑を愛でるように見る。

ザルファは、今にも死にそんな怪我人達を、美しい女に見惚れるかのように見る。

彼はそういう奴なのだ。

もう、どうしようもないくらいに。

ザルファは望んでいる。

たとえ、この世界の中、自分一人だけになったとしても。

平気でその世界を肯定出来る、と。

醜く老いていき、醜く腐って死んでいく人間達。

それらを嘲笑したい。

彼は。

醜く衰えていく女を眺めるのが好きだ。

彼女達は自らの価値が無価値になったのだと知って、絶望の只中へと落ちていく。その悲鳴こそが何よりも美しい。皺だらけの肉体。産む為の肉体の死。あらゆる女の持つ美しさが剥奪されていく瞬間に、もうどうしようもない美が生じていく。

うっとりとする気分。薫陶。

ザルファの哄笑が、響いていく。

ザルファは女に対して、異様なまでの敵意がある。

どろっ、としたような情念がある。

女の顔を醜く引き潰したい。その点ばかりに執着している。

彼のその時においての心は、酷く暗黒だ。表情もかもしれない。

何度も、何度も、顔の皮を剥いてやりたい、女達。

時間と美に縛られ続ける者達。可哀相な奴ら。

ザルファの、持っている。

女の顔に対する底知れない敵意。

化粧を。顔を、その表情を。相貌を引き剥がしてやりたいと思っている。反吐が出ると思っている。上っ面の顔。気味の悪い媚。赤い唇。何もかもが、嫌いだ。

女の顔を、何度も。何度も、ひき潰す夢想ばかりしている。

実際、現実においても実行に移す。

その時。彼は言い知れない程の愉悦に襲われる。

日々の倦怠が拭われるよう。

唇。醜いもの。おぞましいもの。声帯器官。抉り取りたいもの。

十

そこには、沢山の冷たい密室が並んでいた。

おそらくは、人間が沢山、収容されていたのだろう。

ザルファはカメラで、それらのものも念入りに撮影していく。彼は秘密の倉庫に、沢山のアルバムを収集している。ザルファは帽子を取る。そして、写真を帽子の中に押し込んでいく。彼の帽子は、底無しの暗黒が広がっていた。

帽子を取った彼の黒髪は、腰元まである。

ろくに、櫛を通していない髪だが。とても、質感が良い。

彼の帽子の中には。何が詰まっているのだろうか。

ソルティでさえ、分からない。無限の暗黒が広がっているのかもしれない。

.....それは、まるで彼の心の暗黒そのもので。

沢山の人間達が処刑された密室。

それが美しいと彼は言う。

その背景が。その質感が。

彼の闇に触れる時、ソルティは思う。ああ、彼に付いて行こうと。

彼の相貌。華奢な肉体。あの細い肉体の何処に、あの底知れない暗黒が詰まっているのだろうか。

彼は死面に似ている、生きた死体そのものだ。

彼が抱えているものとは、一体、何なのだろうか。ソルティは考察する。

死の先にあるもの。死後の世界ではない。何か。

ソルティは彼の撮影した写真を見た事がある。

生々しく、この世界の無情をただただ、集積されたような写真の数々なのだが。

何処か……寂しそうだと思った。

壁という壁ばかりを撮影している。

収容所や監獄など、沢山の人間の暗黙を、彼は写したがる。

ソルティは彼の写真を眺めて、気になったもの。

それは。不気味なものだった。形容し難いもの。

収容所の中。壁に書かれた文字。薄れ掛けた文字、時には鋭く尖ったもので削るように書かれた文字など。

ザルファは、そんなものを徹底して。写している。

それは、処刑された者達の怨念だ。何者でも無い、顔の見えない、その人間性も分からない人々。ザルファは、その文字こそが。この世界において、何よりも美しいものの一つだと言う。誰にも届かなかった言葉、それでも光を求め続けた。

美しいと。彼は言う。

十

実験場の奥。

ザルファは次々と、拾った道具を帽子の中へと放り込んでいく。

彼の帽子の中は、何処に通じているのか、彼自身でさえ分からない。

それが、彼の能力の一端なのかどうかさえも、よく分からないのだと言う。

とにかく、この帽子そのものが、正体不明の何かなのだと。

まるで、彼の心の暗黒そのものを実体化したような帽子だ。

「あっ」

ソルティは言う。

朽ち果てた建造物の一角に。

一人の女が立っていた。

そいつは、マントのようなものを身に纏っていた。

よく見ると、白い翼のようだった。

「お前は何だ？」

「わたしはジュゼット。お前らが何なんだ？」

ザルファは興味を持っていない。

廃墟の中の、盗掘を続けている。

「此処はヒース様の領地である事くらい分かるだろう？」

ソルティは身構えた。

辺りに、能力の要となるものがない。

ソルティ自身が戦うしかない。

彼は。周辺を見回す。困った事に、この辺りには。使えそうなものが無い。
どうするべきか。

そいつは。白い翼を広げる。

豹のような肉体をしていた。

「ねえ、どうする？ ザルファ。あいつ、明らかに強そうだよ？」

「すでに、『ダーク・クルセイダー』を発動させているが。駄目なのか？」

「うん。効果が無いみたい」

「仕方無いな」

ぺきり、ぺきり、とザルファは首を鳴らす。

そして、明言と言った。

「逃げるぞ」

彼は迷わなかった。

走って、逃げる。全力疾走。服装のせいで、巧く走れない。

そして、すぐに息切れを始めた。

そして。地面にへたり込んだ。息を切らしている。

一度、戻ってきて。ソルティにおぶさる。ソルティは彼を肩車する。まるで、馬だ。

「走れ、ソルティ」

ソルティは呆れた顔をする。というか、完全に呆れていた。

彼はさぞ、滑稽に見えるだろう。

「車になるんだ」

「……………無理だよ」

「仕方無いな」

ザルファは、彼の背中から降りて。後ろを振り返った。

「えっ？」

彼は気付く。

遠くにいる女は、追ってこない。何か、奇妙だ。

まるで、彼女はいつでも、此方を始末出来る、といったような顔だ。あるいは、さながら、彫像のように佇んでいた。まるで、此方に興味を抱いていないといったような。あるいは、彼らのやり取りを観察しているのかもしれない。

彼は、ソルティに言う。

「なあ。あいつ、今。殺さないで拙いかもな？ もしかして、俺達。ヤバイんじゃないのか？」

「とっくにそうだよ。私達は、ヒースの領地にいる。見つかって、追っ手を付けられて。迎え撃たないといけない。とっくに、知っているだろ？」

「いや。……何というか」

彼は立ち止まっていた。

「俺達が。遠くに離れる事を狙っているかのような」

「いや。違うんじゃない？ 私達は彼女にとって、どうでもいいんだよ」

「味方陣を随分、殺したのにか？」

「.....そう思う」

「どっちかは、分からないが。奴が、俺達を簡単に殺せる、ってのは、確かかもな？」

ザルファは考えていた。

女は動かない。彼らを見下ろしている。そこには、蔑みさえ感じられた。

「死の恐怖。脅威の只中にいるからこそ、立ち向かう意味がある。なあ、ソルティ。俺達は無力だ。だからこそ、あの女にも戦いを挑む必要があるな」

ザルファは武器を持たない。

いつも、何処か。死ぬ覚悟があるからなのか。あるいは。

「成る程な」

ザルファは言う。

確か、あの女。ジュゼットと言ったか。

「ソルティ.....袋は」

「ああ。とっくに開いている」

彼は服の懐に閉まっている、小さな袋を開いていた。

彼の『グール・ブレス』の攻撃。それを放っている。

「あの女も。此方を始末しかねているんだ。馬鹿じゃあない。いや、いつでも。始末出来るかもな？ あっちも同じなんだ。こっちの能力を分析してやがるんだ。攻撃し兼ねている」

くっくっ、と。ザルファは笑った。

そして、敵の方へと歩いていく。ゆっくりと。

「話し合おうじゃないか？ ああ？ 降りてこいよ」

ザルファは両手を広げる。

鳥のような姿をした女は答えない。

「いいか？ お前。答えなければ、今すぐ、始末する」

それを聞いて。

女はようやく口を開いた。

「へーえ。お前、わたしを殺せるの？ さっき逃げようとしていたじゃない。観念でもしたの？」

あんな、って何なの？」

完全に見下されているみたいだった。実際、そうなのだろう。

ザルファの行動。何処か、全てが滑稽だった。

くっくっ、と僧衣の男は笑う。

「降りてこいよ。お前を殺せる、って言ってんだよ。それとも、何だ。そこで、突っ立っていて、俺達を逃がしてくれるのか？」

「そうね。どーしようかって、今、考えている処なの」

「そうかい。じゃあ、頼まれてくれないかな？」

ザルファは女を見下げるように言う。

「俺達はヒースを殺しに行く。奴のド頭に鉄の塊を埋め込む。スパナで頭を砕いた後、奴の首をナイフで刺す。斧で頸椎を切断する。それまでの道中、邪魔しないでくれるかな。お前は何かしない。無能な部下であり続けるか、上司は気に入らないから謀反者を肯定するわけだ。どうかなあ？ 俺達がヒースの墓を建てる事を労ってくれないか？」

あはっ。ははははっ、とザルファは笑い転げた。

そして、僧衣の中に大切に仕舞っている、髑髏を取り出して。

髑髏の頭を撫で続ける。

「お前、何だったっけ？ 名前。じゃあ、俺達はヒースの処へ行くぞ。じゃあな？」

ザルファは、舌を出して。へらへら、と。肩を竦めながら言う。

ソルティはひやひやする。

「言いたい事はそれだけえ？」

女はザルファの挑発には乗らない。というか。

こいつは、きっと頭がおかしいんだろう。ジュゼットは、彼の本質をすぐに見抜いていた。だから、先ほどまでの彼の行動を。ただ、傍観していた。しかし、問題は。どのような形で頭がおかしいか。それが、分からない。だから、ジュゼットは正直、彼を不気味にも感じていた。

「わたしは、お前を。秒殺出来るけど？」

「それを待っているんだけどなあ」

くっくっ、とザルファは笑う。

ジュゼットは、ますます。彼を掴みかねていた。

彼女の能力『ザ・モード』は、いつでも彼を殺せるだろう。その自負はある。しかし、いつでも殺せるからこそ奇妙なのだ。得体が知れない。だからこそ、攻撃をしかねている。情報も入ってきていた。ヒースの部下達が、大量に老化の攻撃を食らっていると。資格好を聞いて、こいつらに間違いない。

だから、始末しなければならない。しかし……。

ソルティは遠くから二人のやり取りを見ていた。

ザルファは、何を考えているのか分からない。いつもそうだ。今回だってそうだ。いきなり、どうしたのだろうか。そして、ソルティは思うのだ。

ザルファはこの状況を楽しんでいる。底知れないくらいに。

一步、間違えれば、自分が死ぬかもしれない状況。いや、敵がその気になれば、彼を殺せるだろう。けれども、まだ彼は生きている。何故か生きている。その状況を、彼は楽しんでいる。

ソルティは彼を守らなければならない。

たとえ、自分の命を捨てても。きっと。大切なものだから。

ジュゼットは結論に至った。

こいつではなく、向こうの男を先に殺してみるか？

彼女は周囲に隠して置いてあった、武器を取り出す。自動小銃だ。

それを、鎧を着込んだ銀髪の男に向けた。発砲。

……………。

彼女の狙いは性格だ。鎧で隠れていない、首の辺りに命中した。男は倒れる。
そして、緑色の僧衣の男。試しに、彼の肩に狙いを付ける。射ち込んでみる。
すると、男は苦痛の叫び声を上げた。

「……えっ？」

ジュゼットは、少し戸惑う。

あっけない。

もう一撃、試しに帽子越しに頭に射ち込んでみる。

すると、彼はそのまま痙攣して。倒れた。硝煙が上がっている。

ジュゼットは、翼を広げて。空高く舞い上がった。

「……何なの？ こいつら？」

ジュゼットは、ふと。背筋に冷たいものが走る。

まるで、選択を間違えてしまったかのような。

「とにかく。ヒース様に報告しよう」

そう言えば、寒風が吹き抜けている。そろそろ、暖まりたい。

ジュゼットは直感的に理解している。

……彼らの死体に触れてはいけない、と。

報告の内容は、誰も見なかった、だ。

十

「あっはっはっはっ。あいつ、逃げていったぜ？」

しばらくして、ザルファは立ち上がる。

ソルティも立ち上がる。

「……ザルファ。お前は本当は死にたがっているんじゃないか？」

紫色の鎧の男は、少し悲しげに言った。

「何で？」

「あの女の判断次第で君は死んでいた。殺されていた。何で？ いきなり、逃げようとしたり。
かと思ったら、いきなり向かっていったり。何で？」

ソルティは首筋の皮膚をベリベリい、と剥がす。

防弾チョッキのように、鎧の外に出ている皮膚に貼り付けている。他人の死体で作った皮膚だ。
硬く加工してある。

「だって。どんな反応するのか気になるだろう？ 俺はてっきり、癩癩をぶつけてくると思った
んだけどな？ そんな事を女はする。しかし、あいつは割りと明晰そうだったな？ 残念だな」

彼はカメラを取り出す。こいつは。

……ジュゼット。あいつが、怒り出したら。その顔を撮影したかったのだろう。

そうだ。彼は好奇心で動いているんじゃないだろうか。しかも、どこか歪だ。

「どうするの？ ヒースの領地。此処から先、進んでいく？ 俺の『グール・ブレス』はいいと

して。君の『ダーク・クルセイダー』は、ハマらない相手にはかなり弱いんじゃないのかな？」

僧衣の男は少し考えているようだった。

「そうかあ。ヒースは無理か。じゃあ、デュラス。殺しに行こうかなあ」

ソルティは引き攣った。

突然の思い付きだろう。

いつも彼はそうなのだ。

彼に付いてきて。ずっと、振り回されっぱなしだ。

「デュラスの領地に向かおう。此処から、遠いかな？」

ソルティは大きく溜め息を吐いた。

ヒースの次は。デュラスか。……本当に、どうしようもない。

また。危険な目に合うのだろうか。

「ザルファ。君は馬鹿じゃないだろ？ 何故、そんなに死にたがる？」

「ああ？ 何だって？」

彼は本当に分からない、といった顔をする。

ソルティに言われた言葉を一通り考えて、唸る。ソルティは溜め息を吐く。……。

ソルティは苦悩している。彼は死体を愛するが。

ザルファの死体を見たくない。

何故、彼は自らの死が分からないのだろうか。

自らが死ぬという事実が分からないのだろうか。

あるいは。

死を望んでいるというよりも。むしろ。

もう、自分は死んでいるのだとでも考えているかのような。

彼の着ている僧衣は。屍衣なのだと思っている。

死人の着る服だ。

その事に対して、彼はうっとりと自分を愛でている。

「チョコレート。この前の街で買ってきた」

ザルファは彼に、チョコの束を差し出す。

ソルティは小さなブロックを口にする。

「美味しい……」

「だろう。生きているだろ？ 俺達は」

彼はけたけたと笑う。

「チョコレートってのはすげえな。色々な種類がありやがる。疲れた肉体を癒してくれるな。人類の遺産だな。これは」

彼は屈託無く、笑った。

二人は、また別の場所へと向かう事になった。

明日、デュラスを始末しようと思う。

それで、この国がどうなったって。水月にはどうだって良い事だ。

ただ。報酬が気に入った。

しかし、こうも約束している。

デュラスを必ず殺せるかどうかは分からない。

明日中に倒せなければ、依頼は断るとも。

前報酬として。犠牲者達の腐汁のこびり付いたロープを貰った。

ジルズは、もうすぐ。同胞を埋葬出来る事を喜ぶ。

デュラスの宮殿。

地図も渡されている。

大体、どの辺りで会議を行っている。

デュラスが大体、どのような生活を行っているかも。

「人殺しは、久しぶりかな？」

水月は笑った。

「少数の犠牲者で終わればいいんだけどな」

彼女には、考えがあった。

もし、可能ならば。

.....別の方法を取った方が、より自分にとって良い事になるかもしれない、と。

十

ジルズは念入りに。デュラスの宮殿の周囲を巡っていた。

デス・ウィングが失敗したならば、自分が殺しにいかなければならない。

仲間達の為に。

彼の能力『チャイルド・プレイ』で、デュラスを始末する。

問題は。どれだけ、標的に近付けるかなのだが。

周囲の地形と、行き交う人の様子を眺めながら。ふと、ジルズは気付く。

いつから、そいつはいたのだろう。

「後ろの奴。お前は？」

彼は彼の足音に合わせるように付いてくる者に訊ねた。

「トゥース・ファンガス。高官ムシュフシュ殿の直属。お前、テロリストだろ？」

「失礼だな。自由の闘士と呼んで欲しい。鎖を外さなきゃならないんだ。民のな」

「そうか」

深い緑髪の男は言った。

辺り一面に。ぼんやりとした蒸気が広がっていく。

ジルズは、咄嗟に。その場所から離れた。

蒸気。……いや、胞子を飛ばしているのか？

爆発音。

周囲には人がいない。無人の地区だ。

だからこそ、あの男は彼を始末する事を決行したのだろう。

彼は予め逃走経路として考えていた、下水道へと向かう。敵に見つかる事は、とっくに考察していた。

マンホールの蓋を開く。しかし。

周囲に。電流のものが走る。瞬間。

辺り一面が、爆破炎上する。

ジルズは、即座に下水道の奥深くに潜っていた。

ネズミの群れが、下水の通路を走ってくる。悪臭が鼻に入り込む。

この敵を始末するべきだろうか、考える。どうせ、デュラスの駒の一人に過ぎないだろう。しかし、思うのだ。ジルズの処刑された仲間達、彼らに一矢報いたい。

ならば。こんな敵くらい、返り討ちにしてやりたい。

計略を練り上げる事にした。

敵がどういう事をしているのかよく分からない。

取り敢えず、ガスのようなものを撒いているのは確かだ。

問題は。ジルズ的能力は、何処まで敵に近付けるか、だ。

敵から遠ければ、不安が強まる。しかし、近ければ、確実に殺せるという自信はあった。

下水道の中は、酷い事になっていた。

黒い虫やら、ネズミやらが。わさわさと走っている。

生活廃水の臭い。

しかし、ジルズは半ば、ホームレスもしていたので。この程度の臭いならば、耐えられる。

しかし。下水道。ガスか。

「……こんなに臭いものだったか？ 生ゴミの臭いでさえ」

違和感。

気付くと。周囲に、強い硫黄のような臭いが立ち込めている。

声が聞こえてきた。

「俺の『バイオ・ファクトリー』は。まあ、俺が特殊に開発した奴でな。特殊な菌糸類を使うんだけど。それを孢子状に飛ばせる。問題は密室である方が有効なんだ」

声が木霊している。こいつは、この辺りにいるのだろうか。

ジルズは。辺りを振り返った。

下水道。多少、広い場所に辿り着いている。

様々なパイプ。

ふと。思う。臭いがこびり付くが、汚水の中へと飛び込むか？

黒い虫の一体が。ぼんっ、と膨れ上がった。

それが、周辺。数十センチを爆破する。

黒い虫の行列。ネズミの行列。

それらが、行進していく。

そして。汚水の中。

その中でも、ドブの中を平気で泳ぎまわる気味の悪い姿の魚達が泳いでいた。

「まさか……」

こいつの能力は。

ジルズは迷わなかった。

両手から、自身の能力によって作り出したハサミを具現化させる。

そのハサミがプロペラ状に回転していき。

ジルズの身体を浮かせて、下水の中を飛んでいく。

背後では、次々と。生き物達が、爆裂していった。

黒緑の髪をした男は。ガスマスクを身に付けて。大きなパイプの一つの中に入っていた。彼はそのまま、パイプの奥深くに潜り込む。

ジルズは咄嗟に、後を追おうとして気付いた。

……畏だ。

手に持った巨大なプロペラの一部が変形していく。

プロペラの一部から、更に刃物が飛び出して。それが回転しながら、敵が逃げたパイプの中へと追跡していった。途端。

パイプから、勢いよく。炎が上がる。

火花が肌に散る。

「発火する胞子を撒き散らすのかな？ そして、その胞子は。生き物に寄生させる事が出来るのか……」

やっかいな敵だ。

このまま、追撃を行いたい処だが。

此処は。一先ず、引く事にした。

引きながら、敵が追ってきたら。返り討ちにしてやろう。

十

ザルファは、女を食べ物にし、女に食べ物にされる人生を送ってきた。

……………。

ザルファは、沢山の乳香と花のエキスを溶かした湯船の中に浸かる。

今度の客は金持ちだ。

ザルファは行為を最後まで行わない。

行うのは、もう少し下の商売。下賤の者達。彼は行為を途中で終わらせる事によって、客達に神格化されていく。

風呂を出たら。顔に、万遍にクリームを塗れと言われている。

赤い口紅。眼の周りも、アイメイクで縁取っていく。

紅いドレスを着せられる。

彼は女の話聞くだけでいいと言われた。商売をする上で、取り仕切っている者は、ザルファの容姿を見て。彼を高級品だと言ったからだ。

彼は自分の価値が何なのか分からない。

この仕事をする事が何なのかも。

天蓋の付いたベッドの上に寝かされる。

ずっと、女に話を語って聞かせる。

ザルファは絵本や神話を多く読んでいたので、そのエピソードを語る。

女は喜ぶ。

ザルファはきっと、少女人形の代わりなのだ。生きている人形で、語り掛けると語り返してくれるから。女達に好かれるのだ。

女達は寂しいのだろう。だから。彼は、喋る人形になる。

彼は彼女達の、お人形。

彼女達に合わせて、振舞ってればいい。

雪原の中で。二人、同じ毛布に包まる。

「体温。体臭、やはり。女のそれとは違うな。お前がどんなに女に見えて、肌の質、顔立ち。それらがどれ程、女のそれに近くてもな」

黒髪の美形は言う。彼は、相棒の首筋に触れていた。

「そうなんだ」

「男はやはり駄目だな。女も駄目だったが。そうだ、お前は恋愛感情とか誰かに持つのか？」

ソルティは答えない。

それにしても、寒い。凍えるようだ。

両手がかじかんでいる。

そっと、ザルファはソルティの頬に触れる。生命の温もり。

「それにしても。女装者ってのは、女の眼からどう映るのか知らんが。やっぱり、男なんだって思うな？ 俺のこの感性。やっぱり、男の物だ。自分では男か女か分からない、って部分もあるんだが。何だろうな？ この感性。やっぱり男のソレだ、って思うな」

十

書斎にて、デュラスは書類を整理していた。

企業から送られてくるものだ。

冷たい感触。

ひやりとしたもの。それは。

嗅いだ事がある。

たとえば、幼い頃に熱病に罹った時期。

戦争の最中に、凱旋として出向いた日。

あるいは、……そう、これは。拳銃暗殺を執行しようとした者達。その気配。

知っている。この感覚を。

そう。これは、死の気配だった。

背後に、死の気配が充満している。自分の死の可能性が立っている。

全身が、凍り付いた気分になった。

ああ。自分もまた、死ぬのだろうか。そう感じる。余りにも、死は近過ぎるものだ。

この敵は。本当に簡単に、彼女を殺せるのだろうか。と……。

「お前を殺して欲しいと言われてな」

悪寒が、走る。

死は笑っていた。強い気配が充満している。一体、いつから背後に立っていたのだろうか。分からない。余りにも、当たり前のように。そいつはいた。

「貴方は……？」

「私はデス・ウィング」

冷たい死は名乗った。

返答を間違えれば。簡単に殺されるだろう。そうだ。噂を聞いた事がある、最悪の能力者の一人である。『背徳者』の中で、死の翼、死の風と呼ばれる者がいる事を。

観念するしかないのかもしれない。

返答を間違えれば、デュラスだけでなく。この国そのものを滅ぼされるかもしれない。

「もしかして」

デュラスは覚悟を決めて、屹然として言う。

「最近。うろつき回っている、この男からの依頼か？」

デュラスは写真を、デス・ウィングに見せる。

そこには。遠くから撮影された、ジルズの顔が写されていた。

「そうだな」

「ムシュフシュに言っておく。始末しろと」

そして。デュラスは彼女に、踏み込む事にした。

発想の逆転。こいつは、本当にヤバイ。しかし、逆に考えるならば。……。

「何で取引している？」

「死んだ人間の。人体のパーツと。彼らを縛っている首括りの縄」

デス・ウィングは、くっくつと微笑んだ。

「どうしても欲しい。だから、お前を殺したい」

「そうねえ」

デュラスは、慎重に言葉を選んでいく。一步、間違えれば死ぬ。殺される。

彼女は今はまだ死ねない。だから、選択を間違えてはならない。

「貴方って。裏切りとかは駄目？」

「ん。どうだっていいかな」

すすけた長い金髪の女は、肩を竦めた。

「依頼の内容は？」

「明日の夜までに。お前の首を差し出せと言われている」

「分かったわ。ほほほっ。こんな時の為に替え玉を用意していて。下層上がりの者なんだけど。いつでも、私に首を差し出すわ」

デュラスは少し陰鬱な顔をするが。すぐに、首を横に振った。

同情心など、振り払わなくてはならない。

「それで。私に付いて欲しいの。私のボディガードになって欲しい」

強い信念。

デュラスはそれを持っている。

だから、折れるわけにはいかない。

恐怖など抱えている暇など、無い。

少し、悩むが。少し、偽善的に。言う。

「ヒースと戦争がしたい。そして、彼女の領土を奪って。下層階級を無くす。デス・ウィング。私は富と快楽の為に独裁をしているわけじゃないの。私は誰よりも国土と民を思っているつもり。ねえ、どう？ 戦争は行わなければならない。でも、なるべく兵士達にも死んで欲しくない。彼らにも人生があり、家族がいるから」

少し、誤りがあるが。仕方が無い。意図的に普段の思考とはズレた事を話す。

攻め込もうとしているのは、ヒースの方。しかし、デュラスは敢えて嘘を付く事を選んだ。下層階級なんて無くせるわけが無いと思っている。

しかし、敢えて嘘を付く。

「私を悪だと断罪するのは簡単。けれども、私は正義の為に一党独裁し。ヴァーゲンを守ろうと考えている。祖国を。だから、テロリストに殺されている暇なんて無い。特に、ヒースの側も戦争を仕掛けたいと思っている。だから、あなたの御力が必要なの」

彼女は窓を開いた。

月がよく見える。

「お願い。デス・ウィング。ヒースの民は異常者ばかり。彼らの国家は駆逐しなければならない。そして、領土。食糧。産業を奪って、私の国民に与えないといけない。『背徳者』の力がある」

彼女は使命感に満ちた強い瞳をしている。

曲げられないものがあるのだから。

「ヒースの異常者の兵団を私の国民に差し向けさせるわけにはいけない。私は国を、民を愛しているから。奴らは殲滅しなければならない」

少し、ヒステリックな口調で言う。

デス・ウィングは、そんな彼女を楽しそうに見ていた。

「この世界は誰かが支配者に。誰かが奴隷にならなければならない。残念だけど。歴史も証明している。だから、貧困も戦争も無くせない。ならば、受け入れるべき」

彼女は自分の理念を信じている。

デス・ウィングは、何だかとても可笑しそうだった。

「いいよ。お前に付こう。私はジルズの方は裏切る。何故なら、お前に付いた方が面白そうだから」

死の翼は、本当に楽しそうに言った。

デュラスは、肩の力が抜ける。

説得し切った。

十

デュラスは祖国の為に生きなければならないと考えている。

広がる領土。領地。

美しき国。ヴァーゲンからは、広い大地が見える。山河。深緑。全てが美しい。それらもまた、守らなければならない。

自分は頂点という立場にいる。

勿論、国民が一定数、虐げられる状態を作っているのも彼女だ。

しかし。テロリスト達は何になるのだろうか。

経済は無限ではない。

この世界にあるものは、決して無限ではない。有限なのだ。

だからこそ。必要悪として。

酷い国家は、何処までも酷いのだろう。

やはり、自然には勝てないのだと思い知らされる。

物質が不足している。

どんどん。貧困街の方で死んでいく人間が増えていると聞いている。

デュラスは苦悩していた。

下層階級の者達を、救済する手段は存在するだろう。しかし、それは戦争によって。他国から搾取するという手段の強行だ。しかしそれもまた、国民は望んでいないだろう。

だが、それ以外では在り得ない。この世界とは誰かが幸福になり、誰かが不幸にならなければならないからなのだ。みなが幸福な世界とは在り得ない。

少なくとも、デュラスの眼からはそう映っている。

「デュラス様。パーティーに行きましょう」

親衛隊の一人である、アルバトスが言った。

彼は目深く、軍帽を被った。軍人だ。

「私は。今日はいいかな。そういう気分じゃない」

少し、一人で考えたい。それに、余り贅沢をしてよい立場なのかも悩むものだ。

「随分と。善人氣取りじゃないか？」

デス・ウィングは、くっくつと笑う。

「沢山の人間の死体の製造。お前は一体、何を視ているのかな？」

「分からない。あなたの言う通りだ。私は何を視ているのだろうか」

デュラスは顎に手を置く。

そして、くすんだ髪の人を見つめた。

「報酬。欲しいだろうか？」

羽飾りを付けた、豪華な衣服の女君主は言う。

「どんなものが欲しいんだ？」

「闇に塗られたもの。たとえば、邪悪なもの」

デス・ウィングは、自分の好みを延々と。デュラスに教えていく。それを聞いて、デュラスは呆れたような顔になった。

「分かった。手配出来る。本当に、私が依頼主になっていいんだな？」

「いいよ。何なら、テロリストも皆殺しにしようか？」

「……いや。テロリスト共はいい。それよりも、ヒースだ……」

彼女に余計な仕事を与えたくない。代償が怖いからだ。

解決出来るものは、自分達で解決しよう。そう、デュラスは判断した。

「了解」

不吉な風が、部屋の中に吹き抜けている。

十

デス・ウィングは。地下牢へと案内された。

ワーロックが彼女を連れてきたのだった。

一つのダンジョンみたいになっている場所だ。

地下牢の奥底。独房。

ひんやりとした感触が広がっている。

「デュラス様はおっしゃられるのですが。テロリスト共はこの際、どうでもよい。しかし、ですのう。ヒースの諜報員、あれは放っておけない。どうにかせねばなりません」

老人はねっとりとした、陰湿な声で告げた。

地下牢の中、老人が案内した場所。

そこには。両腕を鎖に吊るされた女がいた。

年の頃、二十代前後だろうか。幼さが残る。栗色の髪。二つのお下げにしている。

美少女と言っていい。

彼女は胸元と腰元のみを布で覆った、下着だけの姿になっていた。

「見ていて欲しいのです。そして、出来れば。あなたも手伝って欲しい」

デス・ウィングは了承する。

顔を布で覆った刑吏が立っている。彼らの一人が、荷車を引いて牢の中に入ってきた。

ワーロックは冷たく、無感情な視線を辺りに送っている。

「ヒースのヴァーゲンに対する見解は？」

刑吏の一人が彼女に訊ねる。彼女は首を横に振る。

すると。刑吏は、鉄の爪で彼女の脚の皮膚をなぞる。ペリいペリい、と皮膚が裂かれていく。

美少女は苦悶の表情を浮かべながらも、力強く睨み付けた。

「お前らの部隊は何名いる？」

荷車の中から。ペンチと頭蓋骨圧縮機を取り出す。

十

夜が昼になり。夕刻を過ぎた頃だ。

「やっと。口を割らせる事が出来ました。しかし、時間が掛かった」

ワーロックは、ほっと一息付く。

顔を砕かれ。焼きゴテを当てられ。大量の水を飲まされ。爪を剥がされ、手足の指を切断され。目玉を穿られ。鼻を削がれ。歯を抜かれ。腹を裂かれ。両足の骨を砕かれ。両足を切断され。

拷問は、十何時間にも及んだ。

その間、デス・ウィングはずっと、その光景を眺め続けていた。

ありとあらゆる、体液と排出物によって床が濡れていた。

苦痛に次ぐ、苦痛。

どろどろの混合物が、床にこびり付いている。掃除夫が鼻を顰めていた。

他の囚人達が、歌い、喜んでいる。

そして、自分達の排泄物を投げ付けて喜んでいて。彼らの何名かは実際、完全に発狂しているのだろう。

ワーロックはかつて美少女だった物の死体を前にして言った。

「プレゼントです。デュラス様からの」

デス・ウィングは喜ぶ。

「ありがとう。デュラスに言っておいてくれ。私に出来る事ならば、何でも手伝おうと。気に入った」

可能な限りの情報は得られたのだと言う。最後の辺りには、虚偽の情報も沢山、混ざっていただろう。ワーロックは経験上、何が嘘で、何が真実の事なのか判別出来るという。

陰気な老人は、職人の相貌をしていた。

棺桶が用意される。

その中に、死体と。切り離れたパーツなどが入れられていく。

デス・ウィングは鼻歌を歌っていた。とても、幸せそう。

「他にも。くれるの？」

「勿論」

「ああ。早く、宿に戻りたいなあ。ホルマリンに漬けて、鑑賞したい。彼女の言葉、悲鳴。抵抗。苦痛。哀願。全部、記録させて貰ったよ。ありがとう。本当に」

彼女は紙に書いて、終始記録していた。

後で、書いた文章をデュラスにもコピーして渡すという。

そして、掃除夫に言う。

「ああ。そうだ。液体とかも、嘔吐物とかも。出来ればくれないかな？ それも瓶に詰める」
中年を過ぎて、髭が白味掛かった掃除夫は愕然としたような顔になる。

掃除夫は。しばらくの間、奥歯をかたかた、と鳴らす。

刑吏の一人は覆面を取った。率先して、拷問を行っていた男だ。

その顔は、悲しみに歪んでいた。

「なあ。俺に娘がいて。もう、その女くらいでな。結婚相手を探してるんだ」

彼は震えていた。どうしようもないくらいに、辛そうだった。

「俺はどうやって、娘に会えばいい？ 仕事の為とはいえ。俺は娘みたいな女を凌辱し続けた。
なあ、俺はどうやって、娘に会えばいい？」

「花を買って贈ればいい。花は全てを忘れさせてくれる。睡蓮がいい。あれは美しい」

デス・ウィングは優しげに言った。

五十代くらいの男は、涙を流し続けた。

そして、祈りの言葉を唱え続ける。

「ワーロック殿。お願いします。仕事を変えさせてください……」

「駄目じゃ。祖国の為じゃ」

「ワーロック殿……」

男はただ、ひたすらに泣き続けた。そして、懇願を続ける。

霊廟の臭いが漂っている。

此処で、沢山の者達が処刑されたのだろう。牢獄の壁には、じっとりと。血の汚泥がこびり付いていた。

「主よ。娘が結婚相手を見つけたら。私は自害します。私をどうか、地獄に落としてください。
私の魂は汚れている。どうか、私が苦しめた者達に安らぎを……」

冷たい牢獄の中に、男の声は反響していく。

啜り泣き声が止まない。

やがて、男は。他の刑吏に手を貸されて。地下牢の外へと出ていく。

「駄目じゃのう。やはり、みな。途中で、意志が折れる。彼らを糾弾するわけにもいかないからのう」

「そうなんだ。お前は私と同じように、平気なのかい？」

「私には、祖国への愛があるからの。愛の為ならば、他人を苦しめる苦痛もまた、赦されるのじゃ」

「ふーん」

デス・ウィングは。自分のぼさぼさの髪を撫でた。指で解していく。

バルコニーに向かう。

宮殿からは、街の景色が一望出来た。

風が吹き抜ける。寒空だ。

十

テレサは幼年時代。この世界が綺麗なものばかりで包まれていると思っていた。

彼女は器量が良かったし。大抵の者達とは仲良くなれた。多くの者達に好かれもした。友達と喧嘩したり、アルバイト先で上司に怒られたりしても。彼女は一晩立てば、すぐに友達と仲直り出来たし、上司の方も、昨日は言い過ぎたと謝ったりした。

彼女は要領が良く。大抵の事は、何でもそつなくこなせた。

顔立ちも良いせいもあってか、異性からはとてもモテた。しかし、彼女はこれだという男性はいなかったし。何だか、恋愛感情というものがよく分からなかった為、付き合っても、深く踏み込む事は無かった。キスもした事が無い。

そんな純朴な生き方。だからこそ、此処では無い感覚に憧れているのだろうか。

何というか。……背徳感。

彼女がデス・ウィングと呼ばれている女と一緒に、旅をしようと思ったのは。何だか、そんな自分に何処か違和感を感じていたのかもしれない。非日常に対する憧れというか。

街の外を見てみたい。そう思っていた。

本の中でしか知らない世界。

めくる、めくる、絵本。写真集。怖いもの、不気味なもの、おぞましいもの。

知ってしまった後で、少しずつ後悔を始めている。

何故、この世界にはこんなに酷いものが蔓延っているのだろうか。

更に言えば。

水月。……デス・ウィング。

彼女の底知れない程の暗黒。言うならば、邪悪さに惹かれている。

禁断の知恵に触れていくかのような感覚。

怖いものほど、見てみたい。

街の者達は、きっとこんな世界など知らないのだろう。夜のバザールでさえ、一部の者しか近寄らなかった。テレサは固く、近寄るなと言われていた。

踏み込んではいけない領域に向かっているのだろう。それだけは分かる。

世界の汚れ。生命の汚れ、そのもののような。

十

水月は何処かへと行ってしまった。

テレサは今日も、同じ温泉に向かう事にした。

今日は、一人で街を回った。

此処に来て、三日くらいか。

もうすぐ、水月と初めて会って、一週間が経とうとしている。

旅が此れほど、疲れるものだとは思わなかった。

見るもの全てが、真新しく思える。

こんなに世界は広がったのだと実感する。これからも、色々なものを体験として記憶していくのだろう。心がずっと躍っている。

彼女は部屋着に着替えて、温泉へと向かう。温かい湯気が辺りに満ちている。

何だか、この旅館はとても居心地が良い。一日中、街を歩き回った後に浸かる湯船はとても最高のものだ。

湯の中に行く途中に。

二人の美人と出会った。

テレサは旅の高揚のせいか、思わず。二人に話し掛ける。

「あ、あのっ。ちょっと、お話しませんか？ わ、私。旅、初めてで。宜しければ」

二人は。

「女同士、大変かなって」

二人は顔を見合わせる。

そして、お互いに言った。

「俺は男だが……」

「んん。私は女じゃないんだよねえ」

十

ソルティアとザルファ。この二人の名は、そう名乗った。

ソルティアは、長いと思うのなら。ソルティと呼んでと言う。

「テレサって言うんだね」

ソルティは笑った。

ザルファは、面倒臭そうとも。興味が無さそうとも、曖昧な顔をしていた。

ソファーの上に座る、三名。

テレサはまじまじと、二人を眺める。

どちらとも。美人だ。

ただ。

ソルティの方が、話し掛けやすそうではあった。

そして。もう一人の。

ザルファの方は、何処か不気味だ。何だか、底無しにその双眸が、暗く感じる。

テレサは。彼のような人間を見た事が無い。

デス・ウィングの何処か、狂った陽気さ。それから、昨日会った。ジルズの憎悪と敵意に満ちた意思とも違う。どう表せばいいか分からない。

テレサは、ソルティとザルファの二人と一緒に。風呂の中に入る事になった。お互いに、胸や腰に幾重にもバスタオルを巻いている。

湯気。

「友人が。一緒に。お風呂に入ってくれないんですよお」

「それはどうしてだろうね」

ソルティが不思議そうに言う。

「んーん、不潔なのかなあ？」

「只の変人なのかもね」

「そうなんですよ。変人なんです、それも。今まで見た事無いくらいに」

黒髪の方は、ずっと黙っていた。

何だか、彼の方は。冷たく、何と言うか。他人が嫌いな感じがする。けれども、テレサはいつもの癖で。彼にも笑顔を振り撒く。

どんな人間にも、優しい部分はあるのだと彼女は信じているから。

「一緒に。お風呂にか……」

ザルファは呟く。

「面倒臭いなあ。なあ、ソルティ。この女、気味悪いなあ？ こいつの、顔の皮。剥いでいいかなあ？ なんつーか、笑顔が凄くムカ付く」

「ザ、ザルファ。止めなよ。怯えたら、どうするのさ」

「なんてか。こいつの顔、鼻とか削ぎたくなる。果物の皮剥くみたいにさあ、くるくる、と弄くり回したくなるんだよなあ。幸せそうな顔しやがって。俺、ナイフ取ってきていいかなあ？」

「本当に、止めな。ほら、怯えているよっ」

銀髪の男は、何とか黒髪の男の発言を止めさせようとする。

テレサは、ぼんやりとした頭で二人を見ていた。

「で、でもさ。私も確かに、どうなんだろうね？ 男女一緒にお風呂に入るって」

「私は別にあなた達なら、大丈夫です。だって、美人だもの」

「やっぱ、俺。ナイフ取ってきたい」

ザルファは悪態を付く。

何だか、ちぐはぐだ。確かに、テレサ自身も変だと思う。

男二人と、女一人。

普通。女の方は、恥ずかしがるものなのだ。しかし。何だか、彼らは男とは思えなかった。かといっても、同性とも違うのだが。

思い切って。テレサは二人と一緒に湯船の中に浸かった。

テレサは裸体をひた隠しにした。

そして。男二人の裸体をまじまじと見る。

とても、綺麗だ。

ソルティは絵画の天使のような、身体付きをしていた。

ザルファは幽霊のよう。

二人共、美しいな。と思う。

「ふん」

ザルファは、少し嫌そうに。ソルティとテレサから離れた。

そして。彼は、背中と胸元を隠して、二人から距離を置く。とても恥ずかしそうだった。

「ご、ごめんね？」

テレサは思わず、はにかむ。

怒らせてしまったみたいだと、焦る。他人を怒らせてしまうのは、いつだって自分が悪い。その時は謝ればいい。そう、彼女は自分に言い聞かせている。

湯船は。薔薇の香りが立ち込めていた。他に客もいない為に。三名でオーダーしたのだ。

薄桃色の湯の中に、花が浮かんでいる。

しっとり。肌に触れる湯気。

お互いの顔が、薄らぼんやりとしている。

十

ザルファは深く、暗い夢の中にいる。

彼は姉の弟。

姉は友達を連れてくる。沢山の嬌声。

ザルファは同じベッドの上で、女達と一緒に眠る。

女達の体温。体臭。肉の膨らみ。

彼女達は、次々に彼を抱き締める。可愛いね、と詠うように言う。

彼は、彼女達の愛玩物。

女は、髪を梳くのが大好き。ザルファは髪を伸ばし続けるように言われた。

彼の美貌は。女を迷わせる。特に、色香に咽ぶ女を。

翠の瞳がとても綺麗らしい。エメラルドのようだ。

ザルファは自分の容姿が分からない。みんな、綺麗だ、可愛いと言う。

肌が綺麗と彼女達は言う。指が細いね、と。睫毛も長いと褒め称える。

褒められれば褒められる程。彼は酷い喪失感に襲われた。

自分の存在とは一体、何なのだろうか。自分は只の愛玩物でしかない事が分かっている。すぐに飽きられてしまう存在なのだ。そうやって屈辱に耐えていくしかないのだろう。

全てが空っぽだった。

「ねえ。あなたの奴隷にして？」

「はあ？」

ザルファは声が裏返る。

彼女は未亡人だった。ザルファよりも、二回りも年が上だった。男の肉に溺れている。美貌の

少年、美貌の青年に虐げられたいのだと言う。その倒錯的な願望を満たす為に、彼は選ばれた。

「最後までやらねえぞ？ 俺は服を脱がないからな？」

そう言って、彼はその女を拒絶する。けれども、女は彼を離さない。

暗い寝室の中で。

女は彼の剥き出しの足に、舌を這わせている。彼は足を組んでいる。

彼はいつものように。姉から貰った異国の服を着る。赤い女物の装束。着物というものらしい。彼の足は乳白のよう。真っ白だ。産毛さえ生えていない。

彼は、女の言うように。罵りの言葉を吐く。そして、女の顔を足蹴にする。体重を掛ける。この女は、前の夫を溢れんばかりの情欲で追い詰めたらしい。

「うう、ご主人様……」

彼女は一人で、奴隷になりきる。彼を使って、一人の世界に入っていく。

「気持ちが悪いんだよ。ドブスが」

込み上げてくる吐き気を抑えながら、彼は言う。

ご主人様、愛してください、愛してください、愛してください。女は叫び続ける。

「気持ち悪いっ、って言っているだろうが。蛆虫が」

ザルファは、冷笑を込めて言う。彼が蔑めば蔑む程、女は喜ぶ。

もっと罵倒しろ、と女は言う。彼は疲れる。

女は一人で歓喜し続ける。彼は、ただただ心の中で蔑みが生まれるのだが、その感情がまた、女にとっては心地の良いものらしかった。

最後に、女は一人で絶頂に至る。

ザルファは、女と別れた後。一人、涙を零す。

しばらくして、三ヶ月程、経った後。ザルファは、その女から捨てられた。どうも、新しい美少年を見つけたらしい。黒髪よりも、金髪で健康そうな男子が今は好み、とその女は手紙を寄越した。この子は、ちゃんと最後までやってくれと書いていた。

自分は一体、何なんだ。とザルファは暗い部屋で、一人、へたり込んだ。

そして、一ヶ月近く、食が喉を通らなかった。心身共に疲弊していた。

二度と、この手の女には関わるか、と思った。酷い自己嫌悪と他者嫌悪に陥った。

自分自身が、何故、此れ程までに醜いのだろうか。

鏡を殴り付けたくなる。自分自身の顔面にナイフを入れたい衝動。

自分の顔は、醜いと思う。

しばらくして。数ヶ月後、またその女から手紙を貰う。

夫と、連絡が取れた。と。

「俺はお前のご主人様じゃねえし。お前なんて好きじゃねえ……」

その未亡人は、愛されたかったんだな、と理解した。

彼の心は沈む。自分は誰かを愛せるのか？

そもそも、自分が底無しに嫌いだ。

病弱な肉体。すぐに、風邪をこじらせる。

そもそも。この身体は生きる事に向いていないのかもしれない。

筋骨逞しい男がいて。男らしい男がいて。健康な男がいる。

ザルファに男らしさなんて無かったし、暗い感情は強かったが。いつも、妙に癖の強い女ばかりが彼の下に寄ってくる。彼を好きだと言う。気味が悪い。

自分の肉体の欠陥。彼はそれを沢山、知っている。けれども、女達からはそれが見えないのか、見えても気にならないのか。見たいものしか、見ていないのか。

十

ザルファは身体が弱い。おそらく、彼以上に。

だからこそ、ザルファに強い好意があるのかもしれない。

ソルティアも、病弱な子供として生まれた。

よく、風邪らしき者に掛かって、何故か血を吐いた。

その時の苦痛が、忘れられない。

ずっと、死体になりたいと思っていた。

もう、自分の生は終わっているのだろうと。

死体を見ていると安心する。たとえそれが、動物の死体でも、写真に写った死体でもだ。

ある種の安息さえ覚えるのだ。生命の抜け殻に触れると、彼らと友達になれるかのようだった

。

ソルティアが成りたいもの。それは。

魂を運ぶ者。

たとえば、蝶。

彼は蝶が好きだったし、粉雪や木の葉が好きだった。

舞い散るもの。

何だか、人の魂のように思った。

懐かしい景色のよう。

前世など、あるのかどうか分からないが。何処かで嗅いだ景色みたい。

人間は、生まれる前は何をしていたのだろう。

彼は、そんな空想にばかり耽る。幼年時代は、ずっとそうだった。

綺麗な景色の中に、耽溺していたい。

感受性の強い、少年時代を送った。今もそうだ。

真っ赤な血。自分の色だ。自分の中から吐き出される生命。

自分は、長く生きられないんだと。ずっと思った。

強い肉体。生命力の証。何だか、それは歪なものに思えた。

自分の肉体の中で、違和感を感じるものだ。

自分は死者なんじゃないのか。生きながらにして。

紫が、冥界の色だろうと思って。よく紫色を好んだ。

死に触れる瞬間に。生の弱さを感じ取れる。

その時に。自分の心臓が動いているのだと確信する。

死の先の事を考える。死は永遠に届かないものだ。分からないもの。だからこそ、ソルティは死に惹かれる。それは甘い憧憬で。どうしようもないくらいに、彼の心を揺らす。

彼は死んだ者達を強く、深く、愛している。

それは彼の生まれ持った気質だった。

死体が好きだ。

何時間も。何日でも、死体を観察していた。

死体を鉛筆で、異様に。異様に書き写す。腐乱していく狐の身体。蟲が集る。その光景が何処までも美しい。匂いもだ。人は、死体の匂いを嫌う。けれども、ソルティはその腐敗の匂いこそ好ましいものだと考えている。

言わば、死人の姿を。永遠に刻印し、残し続けたいのだと。

生きた証として、刻みたいのだと。

死体と共に生きたい。彼はそう思っている。死体を集る蟲。白い蟲。蛆虫。可愛いと思う、黒い蠅もだ。彼らは、ソルティと。とても、分かち合える友のように思えた。

ふと。この景色が、永遠なのだと思う。

永遠と溶け合うような感覚。彼は死体が好きだ。

何故、みんな生きた人間ばかり見ているのだろう。そんな事ばかり考えて、幼年時代を過ごした。青年になってからも変わらない。

死にたいとは思わない。自殺願望が強いとか、世界に絶望しているとか、そういった感覚じゃない。むしろ、ソルティは世界という存在を信じていた。

むしろ、死後こそが生きているんじゃないかと思ってしまう。

死の先には、何があるのだろうか。

自分自身の願望が。……。

他人を壊すものだと知ってしまった時に。

ああ、自分は生まれてきたのが間違いだったのだろうかなあと思った。

それでも、良かった事だってある。生まれてきて良かったと思ったもの。

彼にとっての救済は、ザルファだった。

彼の異常なまでの自己肯定。

彼の持つ、邪悪さに惹かれた。

いっそ、彼のように他人に対しての痛みが分からないような人間になれば、と。そんな事を思った事が何度もある。

彼は、人を人と思っていない。

「人間の苦痛が沢山見てみたい」

そう言いながら、旅を続けている。

何故、そんな彼に惹かれたのか。ソルティとしても分からない。

彼の言い分が本当ならば、ソルティも悪徳の道へと向かっている。

彼はいつも、宝物のように髑髏を抱えている。占い師の水晶球のように。

それは何か、と訊ねたら。初めて俺が殺した相手だ、と答えられた。

そう言った時の彼の顔。何とも言えない。どう言葉に現せばいいか分からない。

命の価値が分からない。

永遠に生きなければいけないものの定め。

背徳者とは、そういったものを背負っているのだろうか。

あるいは、死の否定へと向かう者達。

背徳者なるものは、何処へ行くのだろうか。

生が無限ならば。

たとえ、この世界の全てが無くなった後も、その瞬間から別の世界に移動して、生き続ける事になるとするのならば。

そんな空想を抱えながら、ソルティは生きてきた。

死ねない、というのは恐怖以外の何物でもないのだ。

生きた死体。

彼は、自分の事をそう思っているし。思い込んでいる。

この二重な矛盾に満ちた感情は何処から来るのだろうか。

死に対する憧憬と。死への強い不安。

その相反する矛盾律こそが、ソルティの心を形作っているのだ。

ザルファ。

彼は人間の命を嘲笑している。嘲笑し続けている。

人間の残虐行為。人間の苦痛、それらを最前列で眺めたい。

その衝動ばかりに突き動かされている。

なので、彼は普遍的な人間にとって、おぞましく悲しい事象は、彼にとってはエンター・テイメントなのだ。

初めて彼に出会ったのは、火刑台の前だった。

未だ残る魔女狩りの余韻によって、生きながらに焼かれていく女。

それを見ながら、観衆達は嬉々とした視線を浴びせている。

観衆達は、蔓延る疫病などの為に、苦しんでいた。

だから、疫病の元凶となる存在を作り出す事が必要だった。

所謂、スケープゴートという奴だ。

観客達の憎悪の眼が、火刑台には集まっている。

しかし、一番、前列で見ていた美少女。

そいつには、憎悪ではなく。嘲笑と歓喜しかなかった。

それが、彼だった。

彼はうっとりと、その女を見上げていた。

火の粉が舞う。女は悲鳴を上げ、神や処刑人に赦しを乞い続ける。

それを見て、腹を抱えて彼は笑っていた。本当に、本当に心から楽しそうだった。

彼は住民達のような、敵意が無かった。

ただ純粋な歓喜。それだけがあった。

やがて女は生皮が落ち、顔が溶け、黒髑髏が剥き出しになっていく。

住民達の一部では、顔を覆う者、嘔吐を催す者まで現れている。

けれども、まるで食い入るように、ますます彼はその光景を眺めていた。

第三幕 儀式

ヒース。彼の国を占領しようとしている女。

彼の民族を。決して、ヒースは良いものと思っていないのだろう。

プルシュの住んでいる国家は、ヒースの軍隊によって領土の半分以上が侵略されていた。もはや、この国家が彼女の奴隷と化していくのは間違い無いだろう。

何故ならば、ヒースの国家の調和を乱す存在だからだ。

プルシュは、彼女を始末する事にした。

ヒースは、つねに大量の親衛隊によって囲まれている。

彼は、大きな剣を手にしていて。古き騎士のような剣だ。

これで、暗い絶望を断ち切らなければならない。

月の無い日だ。

凱旋車に乗るヒース。夜半だ。

河の畔に差し掛かった場所にて。

彼は復讐という概念そのものと一体化したいと思っている。

プルシュは自身の能力『オルビガード』を発動させた。

足元の鉄のブーツが浮く。そしてそのまま。

ヒースの元へと跳躍する。

凱旋車は炎上していく。

十

二人は湖畔の辺りに立っていた。

辺りは、森が生い茂っている。

ヒースはマントを脱ぎ捨てる。

その姿は、まるで冒瀆的で悪魔的なものだった。

「あれ。お前は何？」

彼女は余裕の表情を浮かべていた。

彼女は一見、只の童女に見える。しかし、実年齢は分からない。

「ボクに何の用かなあ？ これから、会議があるんだけどなあ？」

プルシュは剣を構えていた。鉄鋼に包まれた左腕も突き出す。

蒸気が剣から噴出されていく。

ヒース。

胸元と下半身の恥部を。甲殻類のような鎧だけで覆っている。

露になった肉体。およそ、防御というものをまるで考えていない。

豊満な肉体だ。引き締まった腰に、膨らんだ胸。丸まった腰。成熟した肉体とは、ちぐはぐな、童女のような顔立ち。美少女と言えるだろう。

彼女の髪の毛は、桃色と水色が混ざり合っている。シャギーに切られた肩までの髪。

「お前を殺す」

プルシュは静かに告げた。

自身の呼吸器、循環器が揺れ動いている。肉体が膨張していきそうだ。

自分自身の力が可動しているという証拠。

戦いは既に開始していた。

刹那の刻限によって、勝敗は決められる。だから、強い集中力がいる。

自分自身を一つの破壊そのものへと変貌させていくようなイメージが必要だ。

プルシュは距離を詰める。

そして、ヒースの背中へと切り掛かる。ヒースは。

左手を掲げた。すると。

彼女の掌にぷつり、ぷつり、と孔が開き。砲身が現れる。

咄嗟に、金髪の男はそれを避けていた。

バルカン砲の攻撃が、プルシュがいた場所へと撃ち込まれる。

「お前の名は？」

無邪気な笑顔を浮かべた、童女は問う。

「プルシュ」

「能力の名は？」

「『オルビダード』だ。背徳者ヒース。お前の首を落とす者だ。お前に殺された者達の仇を討つ者だ」

「ふうん。きゃはは、僕の力は『テンパランス・リバーズ』。そう名付けている。国民に明かしてないよ？ 覚えておいてね」

ひひひひっ、と怪奇な声で女は笑う。

プルシュは再び、距離を詰めた。

そして、今度は左腕の鉄鋼で彼女の顔に掴み掛かろうとする。

ヒースの左目が一回転する。すると。

小さな、マグナムの銃口へと変わる。プルシュは構わず、彼女の顔面へと拳を振るった。

鉄鋼に幾つもの弾丸が撃ち込まれる。しかし、その後に。彼の拳は童女の顔面へと沈んでいく

。

ヒースは、数メートル程、吹っ飛ばされる。

顔面がぐしゃぐしゃだ。しかし。

「きゃはは。ひひっ。こんなんじゃ、僕は殺せないなあ？」

彼女は折れた歯を、口の中ですくすく、と転がしていた。がりがりい、がりがりい、と噛み砕いている。

プルシュは逃走に移るしかなかった。
彼女の親衛隊達がやってきた。時間が掛かり過ぎたのだ。
今回は敵の戦力分析だ。彼の身元を明かしてはならない。
それにしても、あの女。
やはり、おぞましく恐ろしい。
得体の知れない、怖さを持っている。
まるで、彼は弄ばれているかのようだった。実際、そうなのだろう。
彼女を殺す事が出来るのだろうか。分からない。

十

プルシュは友人のゲシューダと一緒に共同墓地へと向かう。
墓地の中には、プルシュの土地があった。彼が買い取った場所だ。
地下塹壕のような場所。
冷たい墓石を通り過ぎた場所だ。
彼はポケットから、鍵を取り出す。
洞窟のような場所に、木で作られた扉があった。扉に掛けられた錠前に、鍵を差し込む。
地下へと降りる階段があった。
まるで、怪物の口腔のような気配を漂わせている。
プルシュの隣にいる友人。
ゲシューダも、此処に入るのは初めてだ。
彼は、陰気な老人だった。まだ、四十代ぐらいなのだが。どう見ても、六十に届くような容姿をしている。顔はやつれている。病気のせいもある。
二人は階段の下まで、降りていく。階段は螺旋を描いていた。
まるで、渦巻きのように。少しだけ、眩暈がする。
プルシュの精悍な顔が、ランプの明かりによって照らし出されている。
しばらくして、やっと辿り着く。
冷たい墳墓。
此処には、大量の死体が並んでいた。
みな。保存する為に、ミイラや剥製にしてある。
全て、子供の死体だ。
それぞれ、丁寧に。綺麗に薬品に漬けられて、可能な限り、生前の状態に近付けられている。
彼らは街中などで。遺棄された子供達だ。
プルシュは拾って、集めている。服飾品で飾り立てて。死化粧も施している。
損壊の酷い死体も、丁寧に治していった。
強い愛しさが、自分の中に溢れてくる。
ピラミッドを作りたいと彼は言う。

王族の墓のようなものを。絢爛豪華な装飾品で、子供達を飾り立てたいと。

いつか、魂がまた甦り。彼らの生きた証が報われんが為に。

彼らの死を無駄にしない為に。

ゲシューダは上着を脱ぐ。最初、ひんやりとした冷気に包まれ、凍えるような静けさを伴っていたが。プルシュの顔を見ていると、熱気を帯びてきた。

この初老の男の皮膚。ゲシューダの皮膚は、酷く爛れて、沢山の腫れ物が無数に浮かび上がっている。彼の女房は、彼の姿を見て。彼の下から逃げ出した。

薬物の散布。此処は、ヒースの領地の中だ。兵器実験場。そこで使われた薬物が、生活水の中に流れ込んでいるのだ。確実に、沢山の者達が。皮膚病などによって、苦しめられている。

十

兵器実験場。そこで、働く人々。

彼らもまた、不安に襲われている。

自らが徐々に、人では無くなっていくのではないのかと。そして、おそらくそれは、事実であるのだろうと。

ヒースは。人間は自然と一体化するべきだと言っている。

どういう事なのか。まるで、分からない。理解が出来ない。理解したいとも思わない。

きっと、彼女は何かの信仰を持っているのだろう。人々はそのような解釈をしていた。

少しずつ。少しずつ、肉体が汚染されていくのではないかと。

そんな恐怖に蝕まれながらも。

兵器工場働く人々は、情報を遮断されている。

情報統制によって、街はコントロールされているのだ。

この前、会ってきた限り。力強い、笑顔を見せてくれた。

プルシュの頭の中に、イメージが広がる。

頭蓋を切り開かれて、大脳の中に電極を刺し込まれるイメージ。

プルシュは、兵器工場の人間達に対して。そのようなイメージを持っている。彼らは洗脳されているのだ。見えない電極によって。そんな妄想を抱いてしまう。

そして。

がりがりっ、と。プルシュは、死んだ幼児の頭を切り開く。そして、腐った大脳を取り出していく。これから、綿を詰めるのだ。幼児の剥製。

可愛いな、と彼は思った。

この子もずっと、大切にしよう。

十

気付いていた。この世界に神はいない。

正しい価値は無い。

死後の世界は無く。

生きる規範なんて、何も無い。

ただ、空ろに死へと向かっていくという事実。

暗い夜空。何処にも届かない。只、独り。

この世界は、絶望によって閉ざされているのだ。

作り上げられた国家というものによって、支配されて、従属されていく。

この地域では。

沢山の、肉体が変形する者達が生まれていく。

手足が二つに分かれるもの。指が二つに分かれるもの。頭が肥大化した幼児。

全身に、無数の水腫れのようなものが生まれるもの。頭が二つに分かれて、生まれてくるもの

。

彼はそんなものを眼の辺りにして、胸が痛く、苦しんでいる。

薬物の散布のせいなのか。しかし、兵器開発部門は安全だと宣伝する。

明らかに、情報操作が行われている。体よく、国民を道具にしたらしい。

プルシュはこの国の女王である、ヒースを赦す事が出来ない。

始末しなければならない。

デュラスとは違い。ヒースの場合は、彼女が死ぬ事によって。間違いなく、人民達に安らぎが齎されるのだろう。

デュラスは秩序を維持し。ヒースは人間を改造し続けている。プルシュは後者を望まない。人間の進化を望まない。たとえ、その進化にしても。余りにも、ヒースのそれは受け入れ難かった

。

適者生存と遺伝子の促進を繰り返し続けて、更なる栄光を模索している女。

デュラスは調停を。

ヒースは進化を望んでいる。

少なくとも。プルシュの見解はそうだ。それが何処まで正しいのかは分からないが。

何か、救いがあるのだろうか。

ひょっとすると。デュラスの人民達に救いを求めるという手もいいかもしれない。

デュラスの世界がどれ程、酷いものだとしても。プルシュにとっては、ヒース以上に冒瀆的な奴なんていないのだから。

腐っていく人々、未来の無い子供達。

ヒースの国家、グローリィは。

極めて皮肉なものから、成り立っている。

自然との調和。動物との調和。

その行き着く先。

創り出された、科学兵器。それさえも、自然の一部だと言ひ。科学と自然が融合している。

一体、何の為に科学を発展させたいのだろうか。

人間を超えようとしている意思の介在。全てはコントロール出来ないのに。
それなのにも関わらず、ヒースはそれを押し進めようとしている。彼女は自身が力があるのだと信じて疑わないから。
誰も何も救えないんじゃないだろうか。
行き着く未来に絶望する。
一体、どうすればいいのかわからない、苦悩の果てにも何も無いのではないのかと。
生まれてくる、子供を祝福出来ない。
何故、こんな世界に生み落ちたのか、憐れみばかりが募る。
自分が、無償の子供好きだからだろう。だから、とても辛い。
大きな墓を作りたい。
これまで、生まれてきた、報われなかった子供達と。
これから生まれてくるであろう、報われない子供達の為に。
彼らを殺す者を、プルシュは殺さなければならない。
善とか悪とか関係が無い。
苦しむ子供達の為に、戦いたい。そればかりを願っている。
心は、いつも傷付いている。
生まれてくる子供とは、きっと希望の象徴なのだろう。未来の象徴。
それを信じられない。
この世界を、何とかしなければならぬ。

十

ヒースが生きているという事実によって。苦しむ者達がいる。
差別された民族の者。
今日も。工場の中で、爆弾が爆発したと聞いた。
巻き添えもあって。数名の者達が死んで、十名近くの者達が。怪我を負ったのだと。
労働者の友人は多い。
プルシュは、よく彼らと酒を飲む。
彼らの愚痴は辛いものが多い。
プルシュは出来るのならば。その者達も、埋葬したいのだと工場へと赴いた。
しかし、拒否される。
自分達の事は自分達で行うのだと言われる。
彼のオルビガードで。ヒースを殺害出来るのだろうか。
先日の襲撃もしくじっている。
対峙してみて分かった。底知れない強さを有している。
このままだと、勝てるのだろうか。勝算が浮かばない。
正直。仲間が欲しかったが。やはり、駄目だとも思った。巻き込むわけにはいかない。もし、

多くの者達を巻き込めば。失敗した際に。仲間達だけではなく、彼らの家族も処刑されるだろう。それだけは避けなければならない。

「ゲシューダ。もう、俺に関わるのは止めた方がいい」

彼は。自分の武器である、『レムレース』を丁寧に整備しながら。言う。

プルシュの友人の男は悲しそうな顔をするが、顔かざるを得なかった。

彼を止める術は無いのだから。

プルシュは思い悩み始める。

このままでは駄目だろう。

ヴァーゲンに行ってみようかどうか考えた。

十

ザルファは、かつて。『青い悪魔』と出会った事がある。

自らの、姉に付いて。彼とは話した。

青色の少女服を纏った男。とても端正で、美少女の人形のような顔立ち。

ああ、似ているな。と、ザルファは思った。

自分自身の相貌との類似。いや、顔立ちこそ似ていない。けれど、何処か表情が似ている。

死の只中で、生きていたような感じ。それが類似しているのだ。

一面は死骸だ。沢山の死者が横たわっている。

ザルファと青い悪魔の二人だけだ。

戦争を終わらせようと思った、と青い悪魔は言った。

「なあ。お前は何か？」

ザルファは訊ねる。

「ブラッド……。青い悪魔って呼ばれている。『背徳者』とも」

「そうかよ」

黒髪の男は。何だか、楽しそう。翳りのある笑い。

ブラッドとザルファは、二人でしばらく、話をした。

姉の事に関して。

ブラッドは、ずっと姉の幻影を追い続けている。あるいは、追い掛けられている。

何度も。何度も、反復するように考えているのだと、彼は言う。

四歳の頃。彼の姉は死んだ。姉の記憶の面影。青い少女服を着ていたのだと。

ブラッドが、姉の着ている服を着たい、と言って。着せてくれたんだと。その時、彼女は黄色い太陽のような服を着ていた。青い服を着てね、と姉は言った。

それから、ブラッドが五歳の誕生日を迎える前に、姉は交通事故で死んだ。

ザルファはその話を熱心に聞いていた。

二人だけの、死体ばかりの荒野で。

とても、優しい歌のようだった。

ザルファは姉の事を思い出す。

ブラッドに打ち明けた。

「俺にも姉がいて。俺が殺したんだ、これが姉だ」

彼は、青い悪魔に、髑髏を見せる。

「そう。それが、君のお姉さんなんだね」

彼は、笑ったような気がした。

「何で、殺したんだい？」

「嫌いだったから。死ぬ程」

「そうなんだ。僕は。今でも、姉の事が好きで」

「俺達は全然、違うんだな」

「ああ。弟と妹もいたんだ。死んじゃったけど」

「そうか。俺には姉しかいなかった」

静まりかえった。

虚空の空だ。

静まり返った地。空漠の空の下にいる。

二人は此の地が美しいと思っている。

現在の只中に並んでいる、死の群れ。

青い悪魔が創り出した、一つの絵画。芸術品。

この海のように深い、殺戮の香りの中で。ザルファは深い安らぎに襲われる。何処までも冷たく、失われていった体温が愛しい。

不可思議で魔術的な空間。

体温を感じない、人間の群れ。その肉の裂け目さえも、とても愛しい。早くも、虫が集っている。あらゆる粘液、分泌物を肉体から吐き出している。

何て。綺麗なのだろう。二人は、うっとり。それらの景色に見惚れている。

ザルファは美醜の感覚が壊れている。

きっと、彼の成育体験に根差しているのだろう。

「また会おう」

ザルファは、青い悪魔に言う。

青い悪魔は頷いた。

「うん。またね」

空は。桃色に蒼が混ざっている。徐々に、光明に満ちていった。異界の景色のよう。

無残に転がる死体が、より鮮明に映っている。

ザルファは思う。この光景が美しくて仕方が無いと。

膜のような、冷気が肌を過ぎる。朝靄。

一歩先に死があるのだ。

彼が青い悪魔と会話していた場所。

そこは、深い渓谷だった。

沢山の死体の中。見晴らしのよい岩山に登って。彼は地面を眺めている。此処からは、深い谷底が見える。歩いて行って、飛び降りる事は可能だ。

生きている自分と。周りにある死体。その境界線は、変わらなくなる。彼が一步踏み出せば。けれども、彼は死なない。自殺願望があるわけじゃない。

ただ、死が目の前に広がっているという事を理解する事。

彼はまるで、自らに課せられた使命のように。その事に関して、考えている。

十

ソルティの場合は、男からよく口説かれるらしい。

その違いは何なのだろう、とザルファは考える。難しい。

言ってしまうえば、外見は。ソルティは美人。美女に見える。

ザルファは美少年、美少女に見える。

どうも、その違いは大きいらしい。

女は、同性愛的思考として、美少女も好むらしい。よく分からないが。

女は可愛いものが大好き。それが、物である事も、人である事も同じなのだ。

ザルファは右足を差し出す。足の指の間を、舐める女。

足の裏の皮膚も。唾液塗れになる。

女の舌は這い上がっていく。

彼の身体は。飴のようだと言う。甘いのだと。

女が喜ばば、喜ぶ程。彼の心は冷え切っていく。

体温は、とても極寒の雪のよう。

全てが、冷たく凍っている。

自分の心象も、破壊されていく。徐々に、徐々に。

色々な服に着替えさせられる。

その時、ザルファは人形を演じている。

自分は、その時。只の物体なのだと思う。

顔にべたべたと、メイクを施される。

そして、ウィッグを付けさせられる。

彼は終始無言でいる。

人形として扱われる時、自分は心が死んでいるのだと思った。考える事を止めた先に、一体、何があるのだろうか。ザルファは女の言葉に対して、返答する。

顔が小さいね。と言われる。肩幅も狭いね、と。

自分が標本になっていくような気分。

自分自身、一体、彼女達に何を語り。どのように行動しているのか分からなくなってくる。

ザルファは自分が、男か女なのか分からない。

肉体の性は男らしい。けれども、心は……？

女王のようなザルファに。召使のようなソルティィ。

二人は、対極のような姿。形。

ソルティィは男娼になる筈だった。

褥においての作法を教えられる前に。街から飛び出した。

ずっと、籠の鳥として生きる筈だった。

彼は自らを、戦乙女として規定している。

戦場の死に惹かれて、外の世界に飛び出した。

死が目の前にあるという事実を、知りたかったのだ。

ザルファも男娼紛いの事をしていたと言っていた。もっとも、相手は女に限り、肉体の交渉は行わなく。行ったとしても、軽いものだったと。

ソルティィの体験。生まれ故郷。

十代の頃。

純白の服の中に、薔薇を詰め込まれる。

そして、薔薇の縫われた桂冠を被せられる。

立派な商品になる、と褒められた。

自分は動く道具なのだと、知らされた。

食事は規定されたもの。まるで、籠の中の小鳥のように扱われていく。

それは、きっと幸福なのだろうか。その籠の中で過ごす事は一生を保障されている。しかし、ソルティィはその人生を捨てていった。

魂の双生児。誰が言い出した言葉なのか。

いや、そんな概念なんてまやかさに過ぎないのだが。

ソルティィは、何処か。ザルファという男に惹かれている。

彼の言葉に。彼の容姿に。彼の意志に。

彼の敵愾心にもだ。

ザルファの持っている心の中の暗黒に触れてみたい。それはきっと、綺麗な結晶なのだろう。そうなのだ。

きっと。分かっている。

自分自身の持つ。負の感情を肯定したいからなのだろうか。

彼は、負の塊だ。だからこそ、癒されていく。

ザルファは人間の苦しんでいく惨状を見るのが好きだった。

核実験によって巻き起こった、焼け爛れた人間達の行進。

呻き声、悲鳴、啜り泣き声。苦しみが空に響き渡っている。

美しい、と。

そういった世界を、彼は美しいという。

美しいのだと、言い切る。

彼の肉体は脆い。その辺りの人間と何ら変わりはない。いや、普通の平均的な人間よりも脆いだろう。

彼は自らを戦禍の只中に置く。

自らの死を厭ってない。

あるいは、死という感覚が分からないのかもしれない。死の恐怖が何なのかも。

「戦争が早くみたいね。見たい見たい。沢山の焼け爛れた死体。焼夷弾で身体が焼けた人々が苦しみながら歩く姿見たい。美しいんだ。あの光景は。理性なんて何処までも飛んで行くんだよなあ。人間のあるべき姿。あるべき美しさ」

彼の口調は、いつになく無邪気だ。彼は、時折、こんな感じの童子のような口調になる。

ザルファは、死体を。花や緑を愛でるように見る。

ザルファは、今にも死にそうな怪我人達を、美しい女に見惚れるかのように見る。

彼はそういう奴なのだ。

だからこそ、彼はある種の敵かさえ持っているのだ。

ザルファは望んでいる。

たとえ、この世界の中、自分一人だけになったとしても。

平気でその世界を肯定出来る、と。

醜く老いていき、醜く腐って死んでいく人間達。

それらを嘲笑したい。

反転した聖なる存在のようなザルファ、ソルティが惹かれて止まない狂気。

醜く衰えていく女を眺めるのが好きだ。

彼女達は自らの価値が無価値になったのだと知って、絶望の只中へと落ちていく。その悲鳴こそが何よりも美しい。皺だらけの肉体。産む為の肉体の死。あらゆる女の持つ美しさが剥奪されていく瞬間に、もうどうしようもない美が生じていく。

うっとりとする気分。薫陶。

彼の眼は、緑色。それは何処までも澄んでいる。

ザルファは女に対して、異様なまでの敵意がある。

どろっ、としたような情念がある。

女の顔を醜く引き潰したい。その点ばかりに執着している。

彼のその時においての心は、酷く暗黒だ。表情もかもしれない。

何度も、何度も、顔の皮を剥いてやりたい、女達。

時間と美に縛られ続ける者達。可哀相な奴ら。

反吐が出るような虚飾ばかりを身に纏った弱弱しい者達。

女の顔に対する底知れない敵意。

化粧を。顔を、その表情を。相貌を引き剥がしてやりたいと思っている。反吐が出ると思っている。上っ面の顔。気味の悪い媚。赤い唇。何もかもが、嫌いだ。

女の顔を、何度も。何度も、ひき潰す夢想ばかりしている。

実際、現実においても実行に移す。

彼は、女を殺す度に恍惚の表情になる。

自分の全てを肯定出来るかのような感じ。

唇。醜いもの。おぞましいもの。声帯器官。抉り取りたいもの。

十

ザルファは異国の服を身に纏う。

それは、着物と呼ばれるもの。

赤い。花の描かれた着物だ。

彼は唇に紅を差す。

姉に対する、敵愾心。

自らが、彼女よりも美しいのだと思う自負。

鏡に映る、見知らぬ顔。姉の相貌に近い。永遠の美しさを欲した姉。年の離れた姉。

自らの双眸は歪んでいる。

あるいは、腐っているのだろう。

何度も、何度も。刺殺してやりたい、姉。顔の皮を剥がしてやった姉。

こうして、手に持っているだけで。安心する。

美しさも。醜さも。皮を剥がされ、無残な髑髏になってしまえば。みな、同じ。

綺麗なものと醜いもの、それらが混ざり合って。分からなくなってしまうといい。

彼は折鶴を愛でていた。巧く鶴が折れない。

十

テレサはソルティと一緒に、街を歩いた。

ザルファは、部屋の中に引き籠もり。

水月は、相変わらず。戻ってこない。

何処かへと行ってしまったのだろうか、まあ、ふらりとまだ戻って来るに違いない。

それよりも、何だか、ソルティと一緒にいると楽しい。テレサは不思議な感情に襲われる。

「焼き玉蜀黍というものを食べようよ」

銀髪に赤紫が混ざる男は言う。

テレサは頷く。

不思議と。何故か、女友達と一緒に遊んでいるような感覚。

ソルティはドレスのような服を着ている。厳密には、ローブに近いのだが。何処となく、女物の服を思わせる。

彼はとても美形だ。顔も小さい。眼もぱっちりとしている。

十

テレサはソルティと一緒にベッドで眠った。

彼の体温。息遣い。

頬を撫でてみる。

彼は、すやすや、と眠りに付いている。

彼の顔は小さい。男のものとは思えない。身体付きも華奢。

優しく、髪を撫でる。

唇が赤い。睫毛が長い。

全身から、花のような匂いが漂ってくるかのよう。

太腿をちらり、と見る。

ロング・スカートのようなローブから伸びる、白い足。その上に、白いストッキングのようなタイツが付けられている。

彼を所有したい。

テレサは思わず、頬を赤らめる。

あの長い髪。ずっと、撫でていたい。

実際に撫でてみて、まるで水草の中に手を入れたかのようなだった。水の中に触れているかのような感触。

ふと。思った。何かに気付いた。

男性の視点。その眼で、彼女は彼を眺めているのだろうか。見られる性と見る性の反転。

ぞわりっ、と異様な感覚に襲われていく。

「ねえ。テレサ。このアイス・クリーム。熱く溶かして飲むらしいよ」

屋台で買ったものを見せて。ソルティは優しく微笑む。

テレサも笑う。

この時間が。ずっと、続けばいい。

十

姉は。ザルファの背中に刺青を入れた。

それは。さかしまの十字架だ。黒い長剣が彫られている。

べったりと、掘り込まれたそれは。彼が永遠に姉を忘れない刻印となって、塗られているのだ。彼女の彼に対する独占欲の集積物。

ザルファは姉のオブジェだった。言われるまま、何でもする。

彼女は何者なのだろう？ ひょっとすると、本当の姉ではないのかもしれない。

顔形がどんなに似ていても。それすら、何らかの手段で加工されたのかもしれないから。

ブラッド・フォースと話した事。

お互いの姉について。

姉という存在に押し潰されていった事。ブラッドは多くは語らないが、彼は姉に対する恐怖心があるのだと告げる。

同じ理由だった。

異性の装束を纏う理由。お互いに、姉が原因だ、と。

ブラッドは。姉に憧れて。

ザルファは、姉を憎んでいた。

それは、どうしようもない程に。押されてしまった烙印なのだ。

性別とは何なのだろう。分からない。何も、分からない。

十

姉からの屈折した愛情を受けた経験を。あの青い悪魔も持っているのだろうなあ。と、ザルファは考えた。だから、ソリが合ったのかもしれない。

青い悪魔は、彼の姉について多くは語らなかった。語らなかったからこそ、ザルファの想像力は増してくる。

ザルファもまた、自分の記憶を辿っていく。

ザルファは布団の中で、寝込んでいる。

また、今日も風邪を引いた。これから、数日間はまともに立てないだろう。

食事が喉を通らない。自分自身に本当に嫌気が差してくる。

本来ならば、すぐに死ぬ筈だった人生。

それでも、生かされているのは姉のせい。

何故、これ程までに自分は弱いのだろうか。どうしようもない程に。

死の匂いを感じ取っている。

このまま、肉体が無くなれば。どんなに楽だろう。そんな希望。

自己破壊衝動。

自分は意図的に、病気になりたがっているようにも思える。勿論、肉体はとても弱い。だからこそ、早く死にたいような気分。生は苦しみ以外の何物でも無い。

姉は優しい言葉を掛ける。

彼女の表情が気に入らない。何処までも、ザルファを彼女の中に閉じ込めたがる。

姉は檻を作りたがる。彼はそこから抜け出せない。

咳が何ヶ月も止まらない。これは、不治の病なんじゃないだろうか。そういう恐怖に駆り立てられる。不安と焦燥感。

やはり、自分は死にたくないのだろうか。

死にたい、と思う気持ち。所詮、それは苦しみから逃れたい、というだけに過ぎない。

しかし、けれども。姉はザルファを殺しはしない。ゆっくりと、手足を挽いでいくかのよう。まるで、蝶の翅を一枚、一枚、挽いでいくかのよう。

姉はザルファの身繕いまでしてくれる。

もう十をとうに過ぎている。同年代の者達は、女遊びまでしていると聞く。

姉は彼を可愛がる。

姉は彼の胸元に口付けする。

その後、綺麗に髪を整える。とても、長い黒髪。

綺麗だね、と彼女は告げる。可愛いね、とも口にする。

姉は、よく家事を教えてくれた。ザルファに男としての力が備わっていないからだろう。

歯磨きの仕方。身繕いの大切さ。事細かくに教え、やってくれる。

姉がいなければ何も出来ない、自分。

自分は何処までも無力で、弱過ぎる。自尊心など、作りようもない。

姉は。

母親の代わりがしたいのだろう。

父親と喧嘩して家から出て行った母親。二人の姉弟に無関心で、家に金だけ入れて。殆ど顔を見せようともしない、父親。閉ざされた世界。

一度、彼女は両足を切断したいと言った。彼は震える。冗談よ、と言われた。

ザルファは。同年代からも、よく虐めにあっていた。

容姿の事をからかわれたり。時には、肉体的暴力を受けたり。人格の否定をされたり。

その度に、家で姉がザルファの事を庇った。

姉に優しくされれば、される程。彼は自分が嫌いになっていった。

同時に、自分一人では生きられない事も分かっていた。

内に、内に、自分の心は閉じられていく。

世界からの疎外感。

家庭環境と、それにも増す、自分の生まれ持ったの病弱性。

何度も、医者には掛かっている。

しかし、治りようが無かった。ひょっとすると、治させないように仕向けられているのかもしれない。

急に、原因不明の湿疹が全身に浮かんだ事もあった。

死神が隣にいるような気がする。

毛布の中で震えながら、彼は熱に魘されていた。

自分が小さな小動物のように思える。

そういった弱きものから見た世界は黒く塗り潰してしまいたくなるくらいに、怖気がするのだ

。

人間が醜く見える。みな美しいと言うものが汚く見える。

肉体の強弱の違いは、これ程までに違う世界を見せてしまうらしい。

何故、此れ程までに自分は脆いのか。こんなに華奢な存在に生まれてしまったのは、きっと呪いなのだろう。何も出来ずに朽ちていく、そういった想念が重圧として押し掛かってくる。

ちょっとだけ、環境が違っただけでも。ザルファは熱を出したり、奇病に侵されたりする。この適応力の弱さは何なのだろうか。

だからこそ、それを克服する意味も込めて、ザルファは旅に出た。

十

未来が怖い。それはもう、どうしようもなく。

目の前には。死ばかりが広がっているようなイメージしか湧いてこない。

どうしようもない、不安感。

ザルファは。

憎しみばかりを募らせていた。

世界に対する、呪詛。自分と相容れない世界に対しての。

呪いとなればいい。自分の肉体が呪われて、自分が呪いを生める力を使う事が出来るならば。どれ程、幸福に生きられるのだろうか。

生きられないのだろう、分かっている。

姉の前で。

無理に。明るく糊塗しても、その恐怖から逃れる事は出来ない。

それは、夢が教えてくれた。

脳を無理矢理に、高揚させて。明るく物事を見ようとする。けれども、そこには空虚さしか現れない。

何かを。次第に破壊されていく。

それが、何なのかは分からない。けれども、とても屈辱的。

彼は、自分の顔を眺め続ける。

合わせ鏡で。背中の黒い逆十字を見る。

自分の傷を確認する。深い、深い刻まれた傷。

掻き篋りたい、自分の顔。

弱さの中で生きてきた、自分。

他人を呪わずにはいられない、自分。

太陽を見る事は、決して出来なく。寒さと暗黒の中に生きている。

明るい日差しは、辛過ぎる。

心がズタズタにされて。真っ黒な景色しか見えなく、真っ黒な感情しか向けられない。

この心は、呪詛ばかりを抱えている。

どうすれば、悪を為せるのだろうか。そればかりを考えて生きていたりする。

きっと、自分は善なる者。正義を掲げる者。正しさの中で生きる者によって、惨めに敗北し、殺されていくのだろう。

ザルファは、罪に塗れている自分に陶醉を見出す事にした。

十

ジルズ達の仲間はパーティーを開いていた。

こんな時に、とジルズは思うのだが。友人達は、こんな時だからこそ行おう、と言っていた。この時期は、豊穰祭が近付いている。

作物の実り、生命の誕生に感謝する日。

ホームレスをしていた頃、ジルズは御馳走が並んでいると。奪って食べてやろう、という事ばかり考えていた。しかし、それが今では明るい家庭の輪の中に入っている。

不思議なものだ。

ジルズは、余り笑ってられない。

沢山の仲間が絞首刑にされた。祝いの日を楽しめる余裕など無い。

みんなが、幸せでいてくれる事を願う。

けれども、それはきっと長く続かないのだろう。

貧しいながらも、貯めていた金を使って。仲間達は。チキンや野菜を買って、安いワインを片手に。盛り上がっていた。

ケーキもある。

電飾が灯っている。

蝋燭の光も、煌々と燃えていた。

幸せが、いつまでも続かない。だから、今だけでも楽しめたら、と。

デス・ウィングは、きっと依頼通りに動いてくれないだろう。それは、今日になって確信に変わっている。

ジルズは、自分が手を汚すしか無いと思っている。

兄のように慕っていた男。彼が殺されてから。

ジルズが、デュラスを殺すしかないのだと。

両手は、血塗れになるのだろう。

情念を募らせていけば、きっと目的は達せられる。そればかりを信じて、殺す事を誓っている。

。周りの仲間達は。みんな、笑い合っている。

自分は、いつか。彼らから離れていかなければならないのだ。

殺人を犯してしまった先には。彼らと時間を共有する資格が無いのだと。

闇へと降下したい。

そればかりを求めている。

自分は。もう、死の向こう側を生きるしかないのだと。

決意は揺るがない。

只、情念の炎を燃やしていこう。

苦悩を刃に変えるべきなのだ。

ザルファは奇妙な感覚で、その光景を眺めていた。

ソルティは。あのテレサという女と一緒に遊んでいる。

何故、二人共、楽しそうなのか分からない。ソルティに対する不信感も強まっていく。

彼は。何だか、ソルティもあの女も。

そして、幸せそうにパーティーに耽っている彼らも何もかも、憎たらしくなっていた。

この席を彼の能力で、ぶち壊してやろうか。

幸せそうな奴らの全てに、反吐が出た。

他人の命の重さに無自覚だ。

自分の命の尊厳を、散々、踏み躪られてきたような気分でいっぱいだった。

彼は。ダーク・クルセイダーの能力を発動し始めた。

.....運命というものは、唐突に訪れるものなのだろう。

本当は、何もかもをぶち壊してしまおうと彼は考えていた。

しかし。

「お前は何だ？」

若白髪の少年が、後ろに立っていた。

「そんな処にいずに。パーティーに参加しなよ。俺はいい、しかし、お前。見ない顔だな」

何故か、彼は柔和な笑みを浮かべている。

「なんつーの？ お前、デュラスの手先じゃないよな？」

彼の眼は陰しくなる。

「デュラス.....。ああ？ この国の支配者かよ？」

「.....違うみたいだな。まるで、此処にたまたま紛れ込んできたみたいだし。そうだ、お前、何者か知らないけれども。パーティーに参加しなよ。みんな良い奴らばかりだぜ」

「.....俺は。.....悪人だぞ？」

ザルファは、本当に困惑した顔になる。

「俺も悪人だ。てか、もう言うか。テロリストって奴なんだ。デュラス暗殺と、彼女の周りにいる政府高官全員の殺害を目論んでいる。まあ、大量殺人犯志望って奴だな」

そう言って、この青年は。屈託無く、笑う。

調子を完全に、狂わされてしまった。

ザルファは。ダーク・クルセイダーの発動を止めた。

幸い、女は周囲にはいないみたいだった。

十

「デュラスを殺す？ そいつは、楽しそうだな？」

ザルファは笑った。

ジルズは、思い詰めたように言う。

「俺が兄のように慕っている奴が殺されたんだ。もう、俺はあいつを殺すしかない」

彼は思い詰めていた。

「俺には、復讐に生きるしか無いんだよ」

仲間達に打ち明けられない心情。

結局、出てきた言葉がこれだ。体制の犠牲者達の為だとか。そういったものは、建前で。

ジルズ自身、破壊衝動というものが強過ぎるのだ。

ザルファは善人じゃない。話していて分かった。

だからこそ、自分の中にある闇を打ち明ける事にした。

そうすれば、少しは重荷が軽くなるのではないのだろうか。

仲間達の温もり。人間でいられる温かみ。

ジルズは、そういったものを捨てていくのだろうか。

「俺も混ぜろよ。ふふふっ。あははっ、丁度。俺も、デュラスを殺したいと思っていた処なんだ。楽しそうだから」

「お前も……？ 何故？」

「楽しそうだから。何か、偉そうにしている奴、殺したら。面白いかなって」

ザルファは暗い笑みを浮かべる。

彼の底無しの暗黒。それを見ていると、少しだけ。蝕まれそうになる。

あらゆる負の感情を肯定しているかのような。

あるいは、何一つとして善を信仰していないかのような。

彼の意思は、他の者とは違っている。それはもう、少し会話するだけでも伝わってくる。

「俺は命を支配したい。生命の秘密を知る為に。俺自身の存在理由の為に」

ザルファはよく分からない事を言う。

分からな過ぎて、戸惑わざるを得ない。

「暗殺の為の準備を整えようぜ？ お前の戦略じゃ駄目だ。俺と一緒に考えてやる。デュラスの野郎をぶち殺すんだらう？ 感動的な死体に変えてやろうぜ？ 虫ケラみたいに、羽をもいで、脚を千切って、殺したいな？ 生きてきた事を後悔させてやるんだ、見下すようにみなを眺めていた事実をな。お前がやるんだらう？ 俺は手伝うだけだ」

無邪気な笑みを浮かべていた。

エメラルドに輝く双眸。

その瞳を見つめていると、此方まで暗闇の中へと落下していく感覚に陥る。

「デュラスの死体を写真にしたいな？ 彼女の側近、全員の死体も写真にしたい。可能な限り、屈辱的な死体を製作しよう。展示品にしやすいように」

暗闇が溢れ出してくるかのようだった。

ザルファは。

ジルズに。

自分のコレクションを見せていく。

ポラロイド・カメラで現像した写真が入った、アルバム・ケース。

死体が大量に映っている。

それは美しく撮っている、といくよりも。不気味なまでに、ありのままを撮影している、といったように見えた。

強く伝わってくるのは。ザルファ、彼には。

生命の温もりが理解出来ない。

蛆に食い散らかされる死体。

それを、嬉々として彼は眺めている。

死体以外には、処刑場や墓石などが写っていた。

彼はそれを、花や美術品でも眺めるように見つめている。

ジルズは。少し、冷や汗を流し始めた。こいつは。

あの、デス・ウィングと似た匂いがする……。

善悪の概念が、完全に壊れている感じ。

「これなんか、どうかなあ？ 猟奇殺人犯の部屋の中を撮影した奴なんだけど。踏み込んでさあ。ほら、冷蔵庫の中とか最高だよ？」

ジルズは、悪人になる、という事がどういう事なのか悩んだ。

在りのまま歪んだ状態。歪みに歪んだ状態。

冷蔵庫に写し出されたもの。何かの料理だ。

スープの中に溶かした、物体。

眼球や鼻。耳は、確かに人間のものだ。

そんなオブジェばかりが、次々と写し出されていく。

「ああ、こいつさあ。四十二名、殺した後。捕まって処刑された。こいつの死体も写したよ。あっけなく、絞首刑にされて。犠牲者の家族が憤っていた」

彼の話を知っていると、頭がおかしくなってくる。

だが、ジルズは不思議な魅力を彼から感じ取っている。

そして、安心感もだ。

目的を達成する事が出来るのではあるまいか。

ジルズはそう考える。

ザルファは自分の力を、ジルズに対して、色々と話してくれた。

それはとてつもなく、強力なものだ。ジルズが待ち望んでいたもの。

それでも、強い覚悟で決意がいる。

復讐する事の恐ろしさ。

そして、行為を実行する事によって待ち受ける状況。

ザルファはそんなジルズの思惑とは関係無しに、自身のコレクションの写真を捲り続けていた

。

彼にとって、他人の死は。他人の不幸は。被写体以外の何物でも無いのだろう。

ジルズは、この背徳感。悪徳感を敢えて飲み込みたい。

そうでなければ、自分は目的を達せられない。

非人間的な意志。

それはとてつもなく、自身の覚悟を軽くしていつてくれる。
ジルズの頬に、黒髪の男の指が触れる。とてつもなく、冷たい。
まるで、死体に触れられているよう。

十

テロリズムの中で。自分は必ず死ななければならない、ジルズはそう考えている。
自分の血によって。正義が行われるのだ。
自分は正しくなんかない。結局の処、自分のエゴで。他人を守りたがっている。
みんなが幸福に生きられる世界。それが実現しない事も、何処かで分かっている。
人間の弱さ……どうしようもない。
しかし、分からないのは彼らの存在だ。彼らは一体、何者なのだろうか。
デス・ウィング。
ザルファ。
彼らは、悪意と共に生きている。自分達の悪意に忠実なのだ。
彼らは、背徳の十字架を物ともしない。
ジルズは、世界に反逆する事に対して苦悩している。
貧困の生活も、そう悪いものじゃない。仲間がいるから。
歌があり、詩があり、絵だって描ける。
貧しいながらも、強い連帯感を持っている。
このコミュニティを守る為ならば、何でもしよう。そう、彼は誓っている。
そして、現われたのだ。突破口が。
ジルズはザルファの横顔を見る。
ザルファの瞳。あれに魅入られると、おかしくなってくる。
けれども、何処か強い憧れもある。
ジルズは踏み込んでではない、理解不可能な領域。
その領域に、あの二人はいる。

第四幕 供犠

デュラスは先代の君主の事を考えていた。

何よりも重要なのは。国家の維持だ。

たとえ、狂信的でさえあったとしても、国家というものは維持されなければならない。彼女はそう教えられている。

侵略される事の悲惨さ。

それを、何度も聞かされたし。ヴァーゲンの歴史の重みも、何度も教育された。

病床に伏せている、老人。

彼はもうじき、死ぬ。その跡継ぎが必要だった。

デュラスは国民の選挙によって、選ばれた。

彼女が女という事もあって、それも波に乗ったのだろう。

老人は、デュラスに語った。数十年前のヴァーゲンの悲惨さを。

ヴァーゲンが他国家から、完全に領地を取り戻したのは十五年程前だ。

それまでは、なかば植民地に近かった。それは、戦争に敗北したからだ。

街中では、他国家の車が押しかけてくる。

そして、好き放題に。国が弄ばれていく。

戦争の悲惨さ。

弱い女子供、老人が沢山、殺された。病人も障害者も。子供達まで、戦場に駆り出される。突撃兵だ。

老人は、そう、デュラスに語った。

戦争だけは、決して起こしてはならない。

国家の維持を、強く託された。

たとえ、多くの民が死ぬ事になろうとも希望はある。病気の蔓延、穀物の不作。天災。あらゆるものによって、民は死ぬ。

階級が、何故、必要なのか。

物質が有限だからだ。

自然の前では、人間は余りにも無力だ。だから、奪う者と奪われる者を一定数、コントロールしなければならない。

そうする事によって、この世界は機能せざるを得ないのだから。

デュラスは上流階級の資本家達が嫌いだ。

彼らもそれなりに苦勞して生きているのだろう。企業を回す上で彼らは必要なのだ。

けれども、贅沢を享受したいという意味が見え隠れしている。

デュラスも同じなのだ。

一度、権力というぬるま湯に浸かってしまえば。思考し続ける事を忘れる。

デュラスの感性。それは、国王に為り切れない感性だ。

どちらかという、詩人のそれに近いものがある。それは、彼女の本質は、やはり女性である

かなのだろう。

だから、先代は。女であるデュラスに任せたのかもしれない。

だから、国民達はデュラスに希望を持って彼女に投票したのかもしれない。

分からない。結局は。

十

「お前の名前は何か？」

看守と拷問吏をしている男。

彼は、マスクを取った。

陰鬱な双眸。白い髭。頬張った骨格。

「ルセン。……それが、俺の名だ」

男は暗く、陰気な顔をしていた。まるで、この世界の不条理に全て絶望しているかのよう。

「娘は元気か？」

「ああ。俺に似ずに良かった。驕の行き届いた。良い子だ。俺の仕事は、宮殿の近衛兵であると言っている。デュラス様を守ると」

「そうか」

デス・ウィングは、無感情で返す。

「私は。お前の苦悩と苦痛が聞きたい。どんな気分だった？ どんな気分で、捕虜を拷問し、処刑した？」

唇だけは歪んでいる。それはルセンには見えない。

「……………相手が。人間と思っていたら、やってられねえ。牛や豚、家畜と思うようにしている。俺達はマスクを被るだろう。あれは囚人側の恐怖を煽る為に被るもんなんじゃあない。俺達が、彼らの視線、表情から身を守る為に身に付けるものなんだ……。たまに、囚人の方にも、マスクを被せる。動物のマスクだったり。装飾も何も無い、拷問用のマスクだったり。それも、実用性の為じゃなくて。恐怖心を煽る為だとか、羞恥心を植え付ける為なんかじゃあない。……辛くなるんだ、人間だと思うと。やってられない……」

「ほう。他には？」

「……………最初。最初は……楽しい。嘸し立てる者もいた。自分に、こんな一面があったのか、と。歓喜が込み上げてくるんだ。相手に対しての。絶対的強者になった錯覚を覚える。……でも、途中から。辛くなる。信じてくれよ。処刑が終わった後、家族の手紙を読んだ時の乖離感が酷くて。俺がやった事って、何だったんだって。自分自身が恐ろしくなって。悪夢に魘されるんだ。夢では、縛られているのは俺で。看守の顔は見えなくて。……たまに、色々な人物の顔に変わる。俺が拷問した相手だったり、俺自身だったり。友人だったり。……俺は、俺は……………」

彼は嗚咽を漏らし続ける。

デス・ウィングは、彼の告白を真剣に聞き続ける。

そして、何だか高揚しているかのようにも見えた。

「デュラス様は兵隊を募っている。親衛隊の兵団に加わって、俺は死にたい。国を守る為に必要な事なんだ。ヒースの奴らは、ヴァーゲンを占領したがつている。俺達は迫害されるだろうな」
彼は頭を抱えていた。

「何故。戦争が起きるのか、俺には分からない。何故、苦しむ者がいるのか。人間が人間を傷付けなければならないって事」

「物質の不足からだろ？ 生き方、思想。美学。どうしようもないな、物質の前ではどうにもならない」

デス・ウィングは無感情に言う。

彼女は知っている。この世界の理を。

彼女が傍観者でいる事を望んだ理由。

十

雪崩により。大量の人間が死んだ。この時期、起こる確率が高いのだ。

雪の中に沈んでいった者達。冷たい牢獄だ。

それを意図的に使って。ヒースは、デュラスの兵団達を。雪崩により大量に虐殺した。

ヒースの城砦に仕掛けられたものだ。

ヒースの城は。冷たい雪原の山脈の頂にあると言われている。

ヒースは、頻繁に。麓の先遣隊の停留所などに降りてきたりする。

そして、他国の者達を悪戯に殺していく。

彼女には、生命が全てゴミのように映っているのだろう。

プルシュはヴァーゲンへと向かっていた。

ヒースの世界にこれ以上いたくない、というのもある。

ヴァーゲンには、反ヒース派が多くいると聞いている。

君主であるデュラス自身も、そうらしい。

何とか、変革を起こさなければならない。

ヒースの作り出した世界を、ひっくり返さなければならない。

十

青い悪魔が舞う。

ナイフが回転していく。

大量のナイフが、空中に浮き上がり。それが、大渦のように回っていた。

メイルシュトロームの渦のようだ。もはや、それは天からの災厄に模していた。

肉が。骨が。臓物が。削がれ、削がれ、削がれていく。

指が飛び。腕が切断され。足がもがれ。首が落ちる。胴体は細切れ。

しゅんしゅん、しゅんしゅん、と。吹雪のように音が鳴る。あるいはそれは、笛の音のよう。

彼を傷付けようとした兵士達。

彼らの肉体が。細切れにされていく。

白い雪原の上に。赤い花が舞っていく。

それは、次第に白に染み渡って、不思議なオブジェへと変わっていく。

青い悪魔は。死体達に目もくれない。

只。彼の創り上げた現象。

まるで、地面が抽象絵画のようになっていた。

それは見事なまでに、芸術の様式を取っていた。

殺すという事を徹底して、体現し、異界の美を創り上げていた。

細切れにされた死体が散らばっていく。

それは。灰色の地面に並んでいった。

沈黙ばかりが漂っている。

無情なる死の情景。

それは、見るものは、どうしようもない程に、魅了されていくのだろう。たとえ、自分が次の瞬間に死ぬ事となってもなお、彼の芸術作品を見てみたいと願わざるを得なくなるのかもしれない。

やがて、この肉塊は。虫達の餌へと変わっていくのだろう。

蠅の群生が集まってきている。

死体の匂いに彼らは、惹かれている。

死は綺麗なのだろうか。青い悪魔は、よく分からない。

あるいは、彼には何も分からなかった。自分がやっている事の何もかもが。

戦場は総動員だ。

女も子供も。兵士達の救援の為に頑張っていた。

弱い彼らの命さえも、奪い取ってしまった。

蒼い死でしかない自分。

彼は思考を途中で止めている。もう、考えるという事が辛過ぎて、どうしようも無いからだ。

死んだ者達に生きた証なんてあったのだろうか。

過去、現在、未来。人々は個々の人生を持って、生きて死んだ。ブラッドの能力によって、殺されていった。

ブラッドは、その事実を実感出来ない。感覚として、どうしても乖離していく。

道端の花を踏み潰すように。

その程度の存在価値しか与えられない命。

どうしようもない、無情なる死。

十

ザルファの姉は。

彼を生きた人形にしたかった。外での恋愛で嫌な事がある度に、病弱な彼を責め立てる。
ひょっとすると、姉よりも彼の美貌は秀でていた。肉付きも、骨格も。姉よりもずっと、ずっと美しい。華奢な肉体。

姉の眼は、どんよりと曇っていた。

ザルファの姉は、彼の服を脱がす。

そして、彼が抵抗出来ないのを良い事に。彼を欲情の対象にした。

彼の冷たい肌を、姉は存分に貪る。

彼にとって、性とは。支配される側でしかなかった。

食い潰されているような感覚。

屈辱なんてものじゃなかった。全てが.....闇の中へと閉ざされていくような感覚。

愛するという事を。壊し尽くされたかのような。

だからこそ、自分は歪んでいるのだろうか。ザルファの自分自身に対する嫌悪感は、とてつもなく強いものだ。

女達から、姉の幻影を垣間見る。殺してやりたい。それはもう、どうしようもない衝動だ。

近親相姦.....

そういった単語を知った時。心が崩壊しそうになった。

世界中でタブー視されている概念らしい。

初めての相手は姉で。接吻も何もかも、奪われてしまった。

一番、屈辱だったのは。ザルファ自身もまた.....姉を求めていたという事。

肉体と精神が分離していく。

自分の思考、理性が破壊されていく。

消えてしまえば、どれ程、楽なのだろう。それでも自分は消えてはくれない。

後に残ったのは、女に対する呪詛ばかりだった。それだけを糧に彼は生きながらえている。

ブラッド・フォースと交わした会話。

姉の幻影について。

ブラッドもきっと、幼い頃に。姉に精神的な虐待のようなものを受けて育ったのだろう。

ザルファ程みたいな関係性ではなかったにしろ、苦しみの共通項は姉だ。

十

テレサは異形を視る事が出来る。

異形達はテレサに危害を加えない。彼女の命を奪わない。

只、みんなとても恨めしそうだ。

.....お前は、いつまで綺麗な顔でいるの？

そんな囁き声が聞こえてくるよう。

今回は。

顔の潰れた人達が、沢山、並んでいた。

とても高い場所から、飛び降りたのだろうか。

顔から地面に落ちて、顔が無くなってしまった人達。

テレサは、水月に言われた。

.....お前の視ているものは、私にも、よく分からないし。私にも視えない。

彼女自身の世界に対する不安が、実体化して現れているのだろうか。

普段は、蓋をして見ないようにしているもの。

ザルファに言われた言葉を思い出す。

.....お前の顔を引っぺがしてやりたい。

憎しみを込めた声音。

重く、深く押し掛かってくる。結局の処、テレサはこの世界を何も知らないのだから。

十

世界を覆っているのは、終わらない闇だ。

繰り返される権力争い。階級の螺旋。

結局、人間は幸福になれないのだ。どのような、階層にあっても。

資本家達は、下層階級に宛がう為の食事を、残飯にしている。

その事実は、どうにもならない。救える筈の者も救えない。

デュラスは、国家とは、何なのだろうかと考えている。

階級は生まれる。資本主義国家にしる、共産主義国家にしる。それは同じ事なのだ。

必ず。階級が生まれる。

そして、自分はその頂点にいる。多少、コントロールする事も出来るのだ。

だが、傲慢さは捨てるべきだと思った。強欲さもだ。

デュラスは、着飾ったドレスに。羽飾りで覆われた王冠を身に付けて現れる。顔は、一流のメイク・アーティストによって化粧が施されている。

彼女は言わば、この国の顔だ。外見に置いて、手を抜くわけにはいけない。

だが、同時に。見てくれなど、如何に下らないかも知っている。

資本家達は、豚のようだ。

デュラスは社交界に行って、顔見せし。

各種の資本家、企業家達と歓談する。

彼女は、彼らを蔑んでいる。正直、反吐も出る。

けれども、デュラスは下層の者達もまた、救わない。誰かが犠牲にならなければ、この世界が回っていかない事を知っているからだ。

物質。それは無限ではない、有限なのだ。

物質の問題はどうにもならない。それにまた、人間の欲も、だ。

そして。一番の問題は。

下層階級からも、搾取しなければならない理由。それは。

戦争の為だった。

隣国。特に、ヒース。

ヴァーゲンは、いつ襲撃されてもおかしくない。

多くの者達を救う為には、一部の者達を苦しませなくてはならない。そして、彼らには憐れみとして、同時に。希望も 与えなければならない。

デス・ウィングとまた、話してみたい。

彼女は何処までも、この生の世界から自由そうだからだ。

もしかしたら。もっと、多くの者を救えるかもしれない。

きっと、その希望だけは決して忘れてはいけないのだ。

十

死者を弔いたい。けれども、ソルティの能力は死人を冒瀆するものでしかない。自分自身に与えられた力。何故、このような使い方しか出来ないのだろうか。分からない。

自分はどうしようもない、邪悪な存在でしかないのかもしれない。

死人に対する、冒瀆。

生きた証明を踏み躪る行為。

彼らは、ソルティの前では。只のオブジェと化す。

かつては、人間だったものだが。もう、只の物体でしかないのだと。それを幾ら、弄くり回そうと。どうでもいいのだと。

だからこそ。邪悪さの塊のようなザルファに惹かれているのか。それとも。

彼の別の可能性に触れているのだろうか。

生きた証を与えてあげるといふ事、そういう祝福をどうか授ける事が出来ないのだろうか。

今。何の為に背徳的な事に生きているのか分からない。けれども。

きっと、それは正しい事なのだろう。自分自身の人生にとって。

十

いつもの事だ。

夜、眠れない。悪夢に襲われる。身体中が倦怠を帯びる。まるで、肉体が休まらない。他の者から見て、どうなのだろうか。魘されて見えるのだろうか。それとも、静かに死体のように横たわっているのだろうか。

悪夢の内容は様々だ。

自分自身の身体が、沢山の得体の知れない虫達によって食われていくような内容だとか。

沢山の視線に晒されながら、此方の身体が腐っていくような内容だとか。

少しずつ。悪夢が現実を浸食していくんじゃないか、と。

未来への不安。死ぬ事への不安からなのだろうか。

自分が死んだ先は分からない。意識や精神の消失。

しかし、それが一体、何なのだろうか。自分は生まれてきたのが間違いだったような気さえしている。

どうしようもない。肉体の弱さ。

一度、疎外されていくと。沢山の人間と分かり合えなくなる、見える世界がズレ。思考が渦を巻き続ける。ザルファの肉体の弱さ。見える世界のズレ。

覆った世界が見える。

ザルファにとって。

同性である男の感覚が異常なまでに理解不可能なものだった。

女に対する認識の在り方だとか。

彼にとって女というものは、つねに自分に暴行を加える存在のように思えて仕方が無かった。

姉の幻影が今も離れない。

何度も姉の幻影を刺し殺している。

夜中にやってくるのだから。

握り締めた姉の頭蓋骨。

叩き割って、壊す事も出来るのだが。離せない。

何故だか。全てが醜くて。

この身体は、醜過ぎる。腐っていきそうな、肉体。今にも、溶解しそうな狂気へと蝕まれていく。

この身体は枷だ。

自分の全てが嘘みたい。

星空を見上げる。

全部、黒い深淵だったらいいのにと。

闇の底の底に、自分はいるのではないのかと。

憎むしかないのだろう。世界の全てを。

この肌は汚されていく。

この顔が何なのかすらも分からない。

崩壊しそうな自分自身の存在の意味。

あるいは、最初から何も無かったのかもしれない。

ソルティと一緒に食べるお菓子。

パンケーキにカステラ。クッキーにドーナッツ。

少しだけ、自分がまだ存在している事を確認出来る。

十

ザルファとジルズはデュラスの宮殿へと突入する事にした。

下調べはある程度、済んでいる。地図もこしらえてある。問題は、兵隊達を殺害するだけの力

と覚悟だった。

ザルファは余りにも、頼りになった。

彼と一緒にいるだけで、全てに勝利出来るのだろうと。妙な確信があった。

そこは官僚達の住まう場所だ。

ジルズは簡単に作った爆弾と、自身の力のみを信じている。

チャイルド・プレイ、与えられた力。

あの宮殿には、どんな能力者達がいるのか分からない。

そうでなくても、兵隊全てを全滅させるには心許ない力だ。それは経験上知っている。

ジルズは何本もの剣を手にしていて。

これは天から与えられた力だ。この力がある事によって、彼は自分は革命を起こす為に生まれてきたのだと確信する事となった。

ザルファは『ダーク・クルセイダー』によって何もかも壊してやると言った。

情念そのもののような存在感を放っている。

彼の憎しみの深さをジルズは知らない。

ただ、吐き出してしまいたい何かに押し潰されそうなかもしれない。

自分達は、憎悪と共に生きるのだ。そればかりが目的を達するための手段なのだ。

ただ、とにかく。今、やるべき事は一つだ。

チャイルド・プレイでデュラスを暗殺する、それだけだ。

一つの目的の為に、自分自身を一つの凶器に変えなければならない。

何度も何度も、頭の中でシュミレートしたデュラスの暗殺。

宮殿の地図は手に入っている。デュラスは大体、決まって書斎の中にいる筈だ。それは仲間から得た情報だ。

何も問題は無い。このまま行くと、一時間以内に勝利は収められる。それは確実の事だろう。

彼は建物に触れていく。

すると、見る見るうちに老朽化が始まっていく。

やがて、建物は崩れていくだろう。これを繰り返していけば、宮殿そのものを崩落させる事が出来る。一種の爆弾のようなものだ。

「こんなもんだ？ 凄いだろ？」

ザルファはにたにたと笑っていた。

十

宮殿の女達が見る見るうちに老化していく。

ザルファは今にも高らかな笑いを浮かべそうだった。

何もかもが楽しくて、それから壊したくて仕方が無いといった様子だ。

泣き叫び声と対比して、ザルファの哄笑は続いていく。

女達はやがて、よぼよぼの老婆へと変わっていった。腰が曲がり、まともに立ってられない

みたいだった。

ザルファは骸骨を手にしていた。

そこに何か黒い靄のようなものが吸い込まれていく。

生命エネルギーを吸っているのだろう、とジルズは思った。

兵隊が現われる。

目にも止まらない速さで、ザルファは持っていた短剣を、兵隊の喉下に突き刺した。呻き声一つ上げずに、その兵隊は死んだ。

そして、彼はじいっと、兵隊の死体を眺めていた。何かとても楽しそうだ。

十数秒後、彼は何度も何度も、兵隊の喉に刃物を突き立てていく。やがて、その兵隊の首は切断されていく。

ジルズは息を呑む。彼の狂気に魅入られていく。

ザルファは頼もしかった。

あっという間に、宮殿を制圧していく。

たった二人で、革命に勝利出来るのではないかと。

どうしようもなく、胸が高揚していく。

十

簡単に、何もかもが突き崩されてしまうという事実。

羽冠を被った女だった。

何処かで見た事があるなあ、と。何処だったか。

両目は強い意志を称えている、気丈な振る舞いをしていた。

あまり見た事が無いような印象の女だ。

此方を見下しているのか、あるいは哀れんでいるのか。

何処か慈愛さえも持ち合わせているかのようだ。

その女は微笑むでもなく、嘲るでもなく。

ただただ、大きな何かの位置から見下ろしているような。

二人は足が竦んでいた。

動こうにも、動けなくなる。

現実感が酷く無い。

理解するのに、十数秒くらいは掛かってしまった。

そう、今、目の前にいるのは、此処、ヴァーゲンの天頂にいる君主だ。

その存在感を目の前にして、かなりの強大さをジルズは感じ取っていた。

遠目から見ていたものとは違う。その女はあまりにも、恐ろしく、神々しささえ感じ取ってしまう。

デュラスは冷たい眼差しを二人に浮かべていた。

決して、その信念は揺らぐ事など無く。

この大地そのものを崇敬しているかのような。そんな真っ直ぐで愚直な程の瞳。

一体、何が彼女を支えているのだろうか。

ザルファやジルズのような屈折している人間には分からない存在。

女は衣を翻した。

「私は自分の力の名前を『エアデ・ウント・ゲルト』と呼んでいる。地と金という意味だ。お前達の名前なんて知らない。お前達が何者かも。しかし、私が使う力はこの国を守護するためのものだ。お前達が思っている以上に、この国は今、悲惨な状態だ。お前達はきっと苦痛と苦悩の中にいるのだろうが。それでも国家には犠牲が必要だ、それは代償でしかない。いいか？ 幸福と不幸は平等じゃないの。幸福があって、不幸がある、それはもうどうしようも無い事、私は多くの者達に幸福を与えて。不幸な者達は最大限に抑えなくてはならない、分かるか？」

その言葉には、何の迷いが無かった。

彼女は自信の言葉を信じている。疑うという事を知らない。

そうやって、彼女は人生を生きてきたのだろう。

「お前達は生まれた瞬間から犠牲。私の力は運命や幸運、幸福の天秤をコントロールする事が出来る。何をやっていると思うかしら？」

ザルファは嘲る。全てが馬鹿馬鹿しいといった感じだ。

デュラスはただ冷たく微笑する。

それはまるで、何処か慈愛さえも含まれていた。

このような存在感を放っている者を、二人は見た事が無い。

ザルファは戸惑い、ジルズは折れそうになる。

「敗北者、絶望する者を作り出さなければならない。それが私の能力。神に背く行為ね。聖書においては人は平等。どの宗教も大概、平等だと伝えている。来世だとか天の国だとか、そんなものを持ち出してね。でも、私はそれらから背いている。私は神のように、世界に訪れる災厄をコントロールする事が出来る。私は守護しなければならない、この国を。愛国心が強いから、民を、この国の文化を深く愛しているのだから」

彼女は何を言っているのだろうか。

理解がまるで、追い付かない。

それは、まるであつという間の出来事だった。

老朽化していく天井が崩れていく。

ジルズはチャイルド・プレイを使っていた。

「何が行われたのか私には分からない、ただきっと私は死なないのだと思う。此処で貴方達には殺されない。私は領地を守り、民を守らなければならない。私を殺すのは楽な解決なのだろう？」

しかし、私が死ぬ事によって更に多くの者達の犠牲が強いられる。お前達ごときがこの国家を守護するための礎とはなれないだろう？ 私は基盤だ。私は支柱なんだ。それが分からない奴にこの国を憂う資格など無いと思うわね？」

その女は羽飾りに触れる。

そして、凜然とした佇まいで二人を見据えていた。

「処で幸福な時間というものとは過ぎ去ってしまった時に、あの瞬間の素晴らしさを理解する事が出来るの。私は学問を学び、地位を獲得するまでの間がとても幸福だった。少女時代は勉学付けたけれども、それでもあの時期が何よりも素晴らしい。何だか感傷的なよね。少しだけ、社交界に生きる麗人達が羨ましいと思うわ」

彼女は意味ありげな事を言う。何を言っているのか分からない。

ジルズはチャイルド・プレイの鍔を飛ばす。

鍔はくるくると回転して行って、デュラスの首を落とそうとする。

しかし、何かがおかしい、何かがおかしいのか分からない程に。

鍔は、デュラスの下まで近付いていく。

だが。

天井に掛けられている石像がデュラスの前に落ちてきて、ジルズの鍔を防ぐ。

ジルズは気付く。

ザルファはぼかんとしていた。

大理石の一部が、ザルファの背中に落ちていた。

彼は倒れている。そして、気を失っている。

ジルズは茫然自失としていた。一体、何が起こってしまったのだろうか。

直感的なものが働く、思わずジルズはポケットの中にあつたそれを投げ捨てる。間に合わない

。

持っていた爆弾が、爆裂する。

ジルズは咄嗟に、自分の身を庇う。

だが、少々、遅かった。

全身が焼け爛れていくかのようだった。肉体が動かない。

衝撃で、骨の何本かは折れている。

確かに分かった事は、自分は敗北してしまったのだという事だ。

「私達。結婚しようよ」

テレサはソルティに告げる。

銀髪的美青年は、少し困ったような顔になった。

「うーん。うーん。えと……」

テレサは少し、妄想的な事を頭の中で思い描き続ける。

現実に実行出来るかどうか分からないけれども。

それでも、希望のようなものは必要なのだから。

気付けば、好きだった。それはまるで水が注ぎ込まれていくかのように。

お互いが存在しているという事が何だか、楽しい。

テレサは彼に惹かれている、彼の持っている魅力が染み渡ってくるかのよう。

ずっと、会話していたいと思った。彼の持つ雰囲気、香り、顔立ち、全てが好きだ。

テレサはソルティの儚さが好きだ。

彼の色気も。顔形も。髪の毛も。強く魅了されてしまう。

二人で同じベッドの中、寄り添い合う。

相手の体温が伝わってくる。

ソルティはぞっとするような死人のような肌をしている。

テレサとはまるで、反対のような様相。だからこそ、惹かれるのだろう。テレサは太陽のようだと友人から言われた事があるのだから。

対極だからこそ、惹かれるものがある。

彼からは、何故か。強い、死の耽溺のようなものが漂っている。

夢物語を信じているテレサ。

ソルティは彼女に合わせて、微笑みかけてくれる。

強い戸惑いの中で。何処か風のようなものを感じている。それは希望なのか、それとも空虚なのかまるで分からない。

それでも、この感触がどうしようもなく安心を覚えるのだ。

不可思議な距離感がある。

何故、彼の眼はこれほどまでに澄んでいるのだろう。

指先をなぞる、とても繊細で綺麗だ。

産毛が並んだ肌。陶器のような感じ。

自分の肌なんかよりも、よっぽど綺麗だ。

テレサはソルティの上半身に触れる。

彼とずっと一緒にいたい。凍えそうな零度の体温が、テレサの全身へと伝わってくる。

まるで、死神と抱擁しているみたい。それにしても、彼の本質は男なのだろうか？ それとも、ひょっとすると女なのかもしれない。只、分かっているのは。テレサは彼を強く欲している事だ。

優しく髪を撫でる。同時に、自分の髪も撫でて貰う。

気付いた。

そう、これは初恋なのだと。もう、どうしようもないくらいに。全身が熱を帯びている。テレサはふと思った、自分は彼に出会う為に生まれて、今日まで生きてきたのだと。

どんどん、彼の心と一体化していくような感じ。

心と心が混ざって、溶け合っていけばいいと思えてしまう。

沢山、読んできた恋愛小説の内容を思い出していく。

どのように辿ればいいのか。何だか空白の世界を埋めていくかのよう。

十

二人は婚約指輪を買う事になった。

ずっと、テレサが引っ張っていつている。

ソルティの全てが愛しくて堪らない。

毎日がどうしようもなく、優しい日々に思える。

幸福ってこういう事なんだと、実感している。

今、自分は生きているのだと。それだけで、自分が生まれてきた意味があるのだと強く思えて仕方が無い。

この旅がいつまで続くのか分からない。けれども、彼とはずっといたいと思っている。片時も離れたくない。離れてしまった時、自分がどんな心境になるのか想像する事も出来ない。

二人の時間、これから、二人で旅路を続けていたい。そんな感覚。

今、強い思い込みに支配されているのが分かる。色々な妄想が膨らんでいく。幸せな生活。幸せな人生。頭の中でどんどん妄想が肥大化していく。

そして、ふと、自分でも何だか馬鹿馬鹿しくなる。飛躍し過ぎではないだろうか。

指輪を買う事だって、ソルティの優しさからだ。テレサの好意に彼が付き合っていてあげているだけ。

けれども、テレサは願うのだ。

いつか幸せが訪れるのだろうか。

ソルティの悲しみを全て飲み干してしまいたい。きっと、彼は生きている事がずっと辛過ぎたから。

少しでも、彼の支えになって上げたい。

多分、この先、こんなに人を好きになる事なんて在り得ないのだから。ずっとずっと、一緒にいたいという気持ちが重過ぎて。彼の事を正確に見る事なんて出来ない、盲目が自分の心を支配していく、けれども、それで良いのだと思う。

テレサは温かな感情を胸に秘める。どうしようもない気分。

「僕の『グール・ブレス』は君を……ザルファを。守れるかな？」

彼は儚げに微笑む。とてつもなく、優しい微笑。彼に会う為に、今日まで生きてきたのだ。彼

に会う為に、自分は生まれてきたのだろう。

そんな風に、強い空想が広がっていく。

「僕はちゃんと君を愛せるのかな？」

「分からない？」

「未来の事なんて分からないよ」

「そう」

ぽつりぽつりと雪が降り注いでいく。握り締めた掌が温かい。

十

デス・ウィングは山頂の上を歩いていた。

高く険しい場所だった。猛吹雪が吹き荒れているが、何故か彼女の周囲には吹雪が当たらない。

人間の持っている悪意。それは彼女にとってとても、神聖なもの。

恋愛など出来なく、人の温もりも感じる事の出来ない彼女は、ただただ人間を観察する事だけに意味を見い出している。本来ならば、存在してはならない者なのかもしれない。

この肉体は、人の身体をしていない。そして、この心も、人の心など持ち合わせてはいない。

みな、何を信じ、何に生きるのか。そして、どうすれば彼らが縋っていくものが壊れていくのか、それをただただ、眺めていたい。

戦争が始まる。いや、もう始まっている。

デス・ウィングは全てに喜びを見い出している。

彼女は、背徳を生きる。この世界の道理に背いて、世界を俯瞰する。

人間だった頃の事を微かに思い出す。ずっと、怠惰な生活を送り続けていた。今もそうだ。貴族の出身故、大切に育てられたのだろう。

沢山の人間の闇が記された書物を読み漁った。それらを恐怖する事無く、好んでいった。

そして、書物に記されている世界観をこの両目に焼き付けたくて、旅をする事となった。

人間の持っている総体的な負、それは彼女にとってはとてつもなく好ましいものなのだ。

そういうものと触れ合っている時に、強く生きている実感というものが湧き上がってくる。とてつもなく楽しくて仕方が無い瞬間がやってくる。

強く嗜好している反転した世界。それが彼女が見ている世界なのだ。

それにしても、両親がいなくなって、どのくらいの月日が流れていったのだろう。いや、そもそも、自分は本当に人間だった時間が在ったのだろうか。もはや、あまり思い出せない。

ただ、この世界は無常だと考えている。その中で、自分はどのような位置を占めているのか。あるいはその事をずっと思索してきた。

「さて、貴方はどうするんですか？」

後ろに、性別不明の存在が立っていた。

他人の死と名乗る者。

デス・ウィングは少しだけ、笑った。

「見届けたいな？ さて、テレサやデュラスがどう動いていくのか。興味がある」

自分は孤独なのだろう。その孤独は持て余してしまう程のもので。

何もかもが凍り付いていく中、二人の周りには風や雪がすり抜けていくかのようだった。

まるで、二人は切り絵のようにその場所に佇んでいた。

この世界が抱えている重力。

十

誰でも幸福になる資格があるのだと思う。

ソルティはザルファを幸せにするにはどうすればいいのだろうと悩んでいた。彼はずっと、苦悩し、過去のトラウマと戦い続けている。

いつになれば、ザルファは解放されるのだろう。彼を縛っている鎖とは、一体。何なのだろう。過去を変える事は出来ない。でも、未来の彼は心の底から笑っていればといいと願っている。流れていく時間。ザルファの傷は深く、深く、掘り込まれていく。

ソルティはザルファの背中に彫られた逆十字の刺青を知っている。

姉によって、彫られたもの。

死ぬその瞬間までに、刻印された悪徳そのもの。

精神錯乱の果てに、ザルファを慰め物にした姉。

そして、ザルファはいつも、明滅するような姉の幻影のフラッシュバックに襲われ続けている。

.....自分を信じれば、テレサは不幸になるだろう。それは間違いない。

夢は叶わない。

何処かで知っている。

この凍えそうな空間の中で、ソルティは一人悩む。

戦争寸前のヴァーゲン。グローリー。

全ては神の掌のようで。

自分の生き立ちを考えて、何処か幸せになる事を拒んでいる。

人々は熱心に新聞に読み耽っている。

みな、不安によって彩られている。

他国の脅威、テロリスト達による内乱。新聞記事には不安を煽るような文字ばかりが並んでいる。人々は愚痴り合い、そして溜め息を強く吐き出す。

祝祭日の日に向けて、みな。祈りを捧げている。それは祖国に神が存在して、信仰があった事の証なのだから。

今や、誰も。この大地に神が存在するという事を信じていない。確かに教会は存在する。大聖堂に布施も集まる。けれども、何処かで、みな、神の存在を疑っている。

信仰が次第に死んでいっている。

ソルティは思う、一体、信仰とは何なのだろうか。彼が信じるものは死体だ。彼は死体を愛している、亡骸を。

いつから死に耽溺し始めたのだろうか。生の中で生きて幸せになるヴィジョンを思い描けない。本当は酷く、諦めも知っている。

自分はまともな幸福を思い描いた事が無い。だからなのか、死という媒体そのものが美しいのだと考えている。

この街は二極化している。

貴族達の一部。官僚達は酒やトランプ遊びに耽っている。

その一方で、スラム街は増えていっている。

ソルティの育った国も、そのような場所だった。

ソルティは娼夫として生きる運命にあった。けれども、その運命を投げ捨てて今がある。

その筋の男達に身を捧げる事を教えられて育った。

思う事は、女性を愛する事は出来るのだろうか。

不安ばかりが募っている。でも、まずはとても好きになってみるのもいいかもしれない。これから長い時間を二人、重ねていくのだろうか。

もしかすると、幸福という解答が得られるのかもしれない。信じる事が出来れば、それは未来へと繋がっていくのかもしれないから。悪い思念ばかりを抱えていても、仕方が無い事なのだから。

ソルティはテレサとザルファの事を考え続ける。

この先、未来は何が待っているのだろうか。

何十年後かにも、同じように。テレサと一緒に手を繋いでいられるのだろうか。

十

テレサは亡霊を見る。彼女は物心付いた頃から、亡霊と対話していた。

彼女は元々の性格が天真爛漫なため。それらの存在が怖いとは思わなかった。彼女が見えている世界は美しく幸福なものだった。

生きている人間よりも、彼らの方が優しいのだろうか。テレサはぼんやりと直感していた。寂しさを紛らわせてくれるのはいつだって、彼らなのだから。

孤独という感覚が彼女にはよく分からない、愛されて育ったのだから。

とてつもなく怖い存在ではあるのだが、それでも何だか違うんじゃないかと思う時がある。

彼らは何者なのだろうか。でも、やっぱり優しい。

非現実の狭間の中を漂っている者達、時折、彼女に助言を与えてくれる。

自分は幸せになれるんだと確信している。全てが、巧く巡っているのだから。故郷を出て、本当によかったと思った。

現実とこれから直面していくのだろうか、見なければならぬもの、言わば、直視しなければならぬもの、対決しなければならぬもの。

幽霊達はざわざわと戦慄している。テレサは彼らを見ないようにする。

何故、自分には幽霊の姿が見えるのか分からない。

様々な亡霊達の幻覚が浮かんでは消えていく。果たして本当に実体として、彼らは存在しているのだろうか。ひょっとすると、テレサの根源にある何かが見せる不安が、彼女に幽霊を視せているのかもしれない。

一体、未来はどうなるのか分からない。けれども、今だけでいい。今だけでも、幸福の中を生きていたい。ソルティは自分の事をどう想っているのだろうか？ 想い続けて欲しい。

自分は幸せになるために、生まれてきたのだと確信したいから。

今、どうしようもなく愛されたいのだと知った。

自分こそが、世界の中心にいるのではないかと思った。

導いてくれたのは、デス・ウィング。

此処まで来たのは、テレサ。

運命の歯車が回転していく。

他の誰かが、導きの証なんかじゃない。自分の道筋は自分で決めたいのだから。

ソルティはとても優しい。同じように世界を視られたら、とても嬉しい。

この空間を、ずっと共有していたい。

テレサはミルクとシュガーを沢山入れた、コーヒーを口にする。

この前、ソルティと行ったコーヒー・ショップのコーヒーの味が忘れられない。とても芳醇で、それでいて、身体の中に染み渡っていく感じ。

また、あのコーヒー・ショップには行ってみよう。巡ったパフェの店にもだ。

そういえば、人生というものはいつ終わるか分からない。

だからこそ、今を楽しもうと思っている。

今という瞬間はきっと、とても大切なものなのだから。

人はいつか死ぬんだと彼女は思った。

この街ではもうすぐ、戦争が始まる。テレサはソルティと共に逃げ出そうと思っている。けれども、何故かソルティはこの街に留まりたがっている。

十

プルシュは子供達の笑い声が見たい。

民族や国家を超えて、彼は子供を愛しく思っているから。

子供は未来の希望の象徴だ。明日へと託すべきもの。

希望は神聖さを生み出す、今よりも正しい未来を築き上げていくだろう者達、彼らの存在を守らなければならない。

その為に、彼はつねに命を捨てる覚悟がある。しかし、覚悟とは本当にどれ程のものなのだろうかとも思ってしまう。自分の持っている覚悟など、矮小なものでしかないのではないのかとも

。

彼は異国の宗教に縋り付いている。

ヒースを殺せば、間違いなく救われる者達が出てくるのだ。

彼女は人類の進化を促進させようとしている。

遺伝の構造を破壊し続けて、新たなる地点へと向かおうとしている。

プルシュー人の力ではどうにもならない。

自分はあまりにも、無力なのだと知る。

それだけ、自分とヒース、それから彼女の兵団の力の差は開き過ぎているのだから。

施される人体改造。人と機械、動物の区別が付かなくなっていく。

ヒースの力『テンパランス・リバーズ』を止められるものなどいないのだから。

人が人で無くなっていくという事。

背信、背徳。それは一体、何に対してなのだろうか。

神なのか、自然なのか。あるいは万物の理なのだろうか。

プルシュは重く潰れそう。泣き叫ぶ子供達の声によって、毎晩、毎晩、魘される。終わりの無いような悪夢。夢は叶わないまま、このまま朽ちていくのだろうか。けれども、まだ戦いたい。

自分はあまりにも無力過ぎる。あの兵団達に立ち向かう力なんて無い。

けれども、屈する事など出来はしないのだ。

子供達の笑顔を失いたくない。

それにしても、彼にとって子供とは一体、何なのだろうか。

やはり、彼自身が神聖なものだと思っている何かなのだろうか。

十

何が幻想で何が真実なのか分からない。

ただ、状況の変革を望んでいるだけなのだ。

どうにもならない閉塞感。その中から抜け出す事が出来ない。

生きる意味だとか、生きる価値だとか。一つも見当たらないもの。

ザルファは戸惑いながら、この世界に対して苦しんでいる。

何の為に生まれてきたのか、何の為に存在しているのか。それがまるで理解出来ずに。空しくて、悲しい日々を送り続けている。何も見当たらないのだから。この世界に与えられたもの。

背中に刻印された闇色の十字架。

それは生涯、背負い続けるものなのだから。

自分は一体、何故、存在しているのだろうか。それをずっと背負い続けなければならない。何の為に生きて、何の為に死ぬのか。

それでも、ただ真実なのは呪詛があるという事だ。

この世界に毒を撒きたいと願っているという事だ。

女に対する憎しみばかりが増大して行って、その支配から抜け出せそうにないから。こんなにも苦しむのはきっと、自分は生きてはいけないのだと何処かで知っているのだから。

運命は分かれていくのだろうか。

死体ばかりしか愛せなかった自分が、生きた人間を愛している。

けれども何故か、違う人生に進む事が怖過ぎて。自分の人生の形が分からなくなってしまうている。これまで積み上げてきた自分の感覚、感性。それはきっと、テレサとは相容れないものなのだろうと分かっている。

だからこそ、幸福になる事が怖過ぎるのだろう。

遠い国から旅をしてきた。

故郷においては、娼夫という仕事に就くしか無かった。それがとてつもなく、嫌だった。運命を捻じ曲げようとしたのだ。

ザルファの事ばかりが、亡霊のように湧き上がる。

これまで、ザルファと共に生きてきた。生きようとした。

自分は一体、どうなるのだろう。

これまでの自分の全てを捨てる事になるのだろうか。

それもいいかもしれない。もし、これまでの自分を否定するだけの価値に巡り合えるのならば。

自分の力『グール・ブレス』。

それは、死人を弄ぶ力でしかない。

死んでいる者は美しいと思う。きっと、ザルファに惹かれたのは。彼が生きながらの死人のように映ったからなのだろう。けれども、今はほんの少しだけでいい。テレサの温もりに触れていたい。死者の世界の中でしか生きられなかった自分。ずっと、その中で生きていくのだろうと考えていた。それが当たり前なのだ。太陽の光など、欲しいと思った事さえ無かった。

自分の胸に触れる、命の鼓動が鳴り響いている。

そう、自分はまだ死体ではないのだ。生きた存在として、精神を有している。

生者の自分は、死体を本当に理解出来るのだろうか。分からない。

加工している死体がとてつもなく好きだ。

ネズミや蛇、トカゲや虫、それらは彼の力であるグール・ブレスによって動き出していく。動き始めると、まるでパーティーのようになっていく。

生きているものよりも、死んでいるものの方が好きだ。

それは歪な感覚なのだろうか。

しかし、何処か奇妙なまでの不可思議さ、あるいは自分自身の死の先が分からないからこそ。理解するものが不可能なものとして、彼は死を愛でたがる。

戦争が始まろうとしている。

テロリスト達も横行している。

けれども、二人の世界には関係が無い。犠牲者は積み上げられていくだろう。でも、せめて自

分達だけでも幸福になってもいいんじゃないのか。そう思えて仕方が無い。

何に生きて、何に祈るのか。

それは大きな命題なのだ。二人自身の問題としても。

どちらもきっと、不器用なのだろう。お互いの事は分かり合えないのかもしれない。

不安定に揺れ動いていく感情は、着地地点が見えてこない。

今、どちらに転ぼうか迷って悩んでいる。

テレサとザルファ。

どちらの见えている世界が正しいのだろうか。

きっと、二人共、正しいのだろう。それは彼らの生き方人生が全然、別のものだ。そうやって刻まれていった道標となって、今という自己を作っていたのだから。

闇と光という概念では単純に分ける事が出来ず。ただ、頑なに必死で二人共生きているのだとソルティは思っている。

不器用だな、と自分でも思う。

そういえば、女性に対する接し方なんて分からない。どういう風に、関わっていけばいいのか、本当に分からないのだ。

それにしても、婚礼か。そんな事、出来るのだろうか。

まったく現実感が無い。テレサは大きな意味では世の中の事を何も知らない。

育ちが良いのだろう。愛されて生きてきた事がよく分かる。

ソルティの中にある闇が消える日が来るのだろうか。

もし、消す事が出来るのなら。幸せの形を模索してもいいと思う。

十

ムシュフシュは軍人達を厳しく睨める。

彼は国家の領土拡大も考えていた、グローリィ以外との国家と戦争する事も念頭に入れている。しかし、デュラスは傳かない。

国をより良いものにしていかなければならない。

旗を振り翳す。

ヴァーゲンの国旗が翻る。

旗印の男が喇叭を吹く、騎兵隊は歓声を上げる。

楽器隊が笛を吹き、ドラムを鳴らす。

レコンキスタが必要なのだ。

腐敗していく国家を立ち上がらせたのは、つねに愛国心だった。

この国の歴史を終わらせるわけにはいかない。

民は国とあるべきであり、国が滅ぶ時には、また民も滅ぶからだ。

そう、彼は信じている。

軍人である、という事は。使命を果たすという事なのだ。彼もまた、デュラス以上の愛国主義

者でなければならないのだ。

デュラスには頑張って貰わなければならない。

この国の主として君臨して貰わなければならない。

十

ジルズは暗い牢獄の中を見る。

鉄格子から、星の明かりが入り込んでくる。

一体、自分の為すべき事とは何だったのだろう。

湿った地下牢。

時折、芥虫などが入り込んでくる。天井ではネズミが騒ぎまわっている。

床をよくよく見ると、長年、こびり付いた血液が残っている。

バケツの中にある汚物の臭いが漂ってきている。

ホームレスをしていたため、慣れたものだ。しかし慣れないのは、どうしようもない程の孤独感だ。この世界において、自分は一人きりなんじゃないのかと。

彼は望んでいる、たとえ達成されなくても。デュラスを始末しなければならないのだと。

デュラスを殺す事、その事によって、一体、何の意味があるのか分からない。それ自体がもはや、目的化している。しかし、それを行わなければならない。

それはもう、どうしようもない程の衝動なのだ。

自分は革命家として生まれてきたのだと思っている。

この国家を破壊する為に、新しい秩序を取り戻す為に。その為に自分は生まれてきたのだと。

人民を自分は愛しているだろうか。仲間達は愛していると思う。

自分が死ねば、どれ程の人間が悲しむのだろうか。

ホームレスの仲間達、彼を慕っている弟分、みんな悲しむ。苦しむだろう。

ザルファの事を考える。彼はどうしたいのだろうか。

自分はただ、処刑される期日ばかりを待っている。何か楽しかった記憶など無いのだろうか。脱獄するだけの体力が失われてきている。この牢屋、どうやっても抜け出せそうにない。日々、段々と、此れまで培ってきた自分の自信というものが崩壊していく。

自分は此れだけ、弱かったのだろうか。とても不思議でならない。

此処からは日の光があまり当たらない。そういう風に設計されているのだろう。昼になると、鉄格子は何故か閉じられる。けれども、夜空を見上げる祝福は与えられている。贈り物のつもりなのかもしれない。昼と夜では看守が違うから。

ただ、自身の死を待つばかりの中で。それでも、自分の生きた理由と死ぬ理由と対話させるために、星空を見せてあげようと。そんな配慮なのかもしれない。

そういえば、何冊かの聖書や聖典を渡された。ヴァーゲンに伝わる伝記なども。

それを開くと、宗教的な言葉がずっと並んでいる。学の無いジルズにはよく分からない。

しかし、行間から伝わってくるものもある。自分自身の生きた目的を、せめて終わりの瞬間

には、赦してしまおう。そう、感じ取れる。

本を開いていくと、所々に文字が記されていた。

床にこびり付いた血液やカビなどで記していったのだろう。

色々な人間の心情などが書かれている。

この国の未来に対する嘆き、家族への手紙、恨み言、様々だった。けれども、みな、処刑台へと上っていく。ひょっとすると、拷問台へ向かって、何時間にも渡って殺されていくのかもしれない。

ジルズは今、判決を待っている。自分は敗北者なのだ、それは間違いない。

負けてしまった瞬間に、自分の全てが否定されていく。これまで信じていたもの、これまでの闘争、全てが無意味なものなのだ。

自分の人生の中で、幸福だった頃の記憶を思い出す。

子供時代、父と母の笑い声を聞いた気がする。彼らはどんな言葉で、ジルズに語り掛けたのだろうか。

記憶というものを辿っていく、幸せだった時間はもう二度と来ない。今は、その時の温もりが蘇ってきて、戻りたいと願っている。けれども、現実には牢獄の中なのだ。

友人達の笑顔が思い浮かぶ。明滅しながら、消えていく。

自分の人生、大層、幸福だったんじゃないかと思えてしまう。

叶うならば、今、死んでもいい。どうせ殺されるのならば、自らが自らの命を絶ちたい。けれども、自分の力はこの牢獄の中では効果が無い。封印のようなものが施されているらしいからだ。

自分の才能の全てを否定していく、災厄。

自尊心の何もかもが、崩壊していく。

鉄格子を握り締める。当然、硬い。何度目かの脱獄の発想。街の景色も見えた、ぽつりぽつりと屋根に付随した煙突の上から煙が上がっている。今頃、パンを焼いているのだろうか。ケーキかもしれない。そういえば、食卓の時間だ。

喉元に唾液が溜まっていく。

肉の味、野菜の味、香辛料の味、お菓子の味。色々と口の中へと運んだ。ひょっとすると、自分は幸福だったのかもしれない。それを忘れていただけなのだ。

可能ならば戻りたいと願っている。生きる意味なんて見出せなかったけれども、ロマンがあり、情熱があった。今はそれが失われてしまっている。

十

デュラスは落ち込んでいた。

今、ヒースに攻められたら。どれくらいの者達が殺されるのか分からない。彼女には愛国心があるから、何百年と続いてきたヴァーゲンの街を守る義務があるから。

国家を維持して行かなければならない。未来においては、貧困の差異が無くなっていくのかも

しれない。しかし、それはヒースの国家を倒してからだ。

物質が明らかに不足し、権力者や資産家達は腐っている。

此処には、自殺者も絶えない。

つまり、自分自身の政策は問題ばかりだという事になる。

デュラスは自身が暴力を行使する立場にいる。

けれども、女性的な感性からか。それが男のようにとても割り切れそうにない。

これまでのヴァーゲンの主達は、ただひたすらに国家を維持する事に信念を抱いてきた。

彼女は、何とかして。彼女なりに、そういったものを変えていこうと考えていた。

やはり、女は駄目なのだろうか。デュラスは落ち込む。

まるで、ザルファが耳元で悪意的に囁き掛けてくるかのよう。

彼の瞳に狂いそうだ、悪魔の囁きのよう。

実態として、ムシュフシュやワーロックなどに支えられて、独裁者の地位にいる。独裁を維持していかなければ、国家が壊れてしまう。それは伝統なのだ。

革命の歴史の本を開く、革命家達は、みな敗北していつている。彼らは此方に届かないのだ。

それ程までに、国家というものは強く、巨大なものなのだ。

デュラスは身につまされる、人事では無い。

今、グローリィとの戦争が目前に控えている。兵糧が不足していると、戦争には敗北する。明らかに、ヴァーゲンでは分が悪い。自分自身は、テロリスト達と、一体、何が違うというのだろうか。

けれども、デス・ウィング。

あの存在。あの得体の知れない化け物が来てからが、何か歯車が壊れてしまうような気がした。秩序の全てが破壊されていくんじゃないのかと。

あれはどう考えても、悪魔そのものだ。

話して分かった。

あの女は、.....ひよっとすると、姿形こそ女の形状をしているが。女ではないかもしれない、あの異形は。こんな国家なんて、簡単に捻り潰せる力を有しているのだ。

デス・ウィングの気まぐれ次第で、ヴァーゲンなんて滅んでしまう。

歴史というものが、徹底されて破壊されていく。

他の国の文献を読み漁る。五十年しか続かなかった国家、革命家達に権力を取って変わられた国家。共産主義や社会主義が確立していった国家、様々だ。

分からないのは。

ヒースの思想とは一体、何なのだろうか。

それは、究極のアナーキズムなのではないのかとデュラスは推測している。

人間という存在を止める事。進化への過程。

人間が人間で無くなれば、この世界のシステムの変革が巻き起こる。

それはとても、魅力的なのかもしれない。

しかし、万物に対しての大いなる冒涇も行っているのも事実だ。

デュラスはヒースの世界を受け入れる事なんて出来ない。

このヴァーゲンがヴァーゲンとして存続する意味、それは歴史に根拠性や宗教性を求めるしかない。この大地にだ。あるいは、何十年、何百年もの間、この地を照らし出した太陽と月に。星々に。

苦しみとは一体、何なのだろうか。

やはり、デュラス自身。今、苦しんでいるのだと知る。

十

ザルファを見た瞬間から、デス・ウィングは決して信用してはいけない存在なのだと思います。彼女は希望なんかじゃない。ただ、死を振り撒きに来た疫病のようなものだ。

あの二人からは同じ臭いがする。

何というか、死の向こう側を超えた存在とでも言うべきか。

とてつもなく、この世界に対して呪詛のようなものを抱いている。そんな処、なのだろうか。

ザルファは本当に恐ろしい。

デュラスは彼に近付きたくない。けれども、彼が切り札になる可能性は高い。

どんなに危険な武器も、使い方次第だ。それは勇気を持って使わなければならない。

勇敢さを失う事、覚悟を失う事は、何にも耐え難い敗北でしかないのだから。

情報によると、武力では。とうにヒースとグローリィに勝てない事も知っている。どうにもならない。どんな戦略を立てようが、圧倒的な物量戦と理不尽な暴力、強力な近代兵器の前では無力なのだ。

金がいる、土地がいる、人民がいる。あらゆるものがある。

そして、ヴァーゲンにおいてはそれらのものが足りているのかどうか分からない。

戦争にとって犠牲は付き物だ。それはもう、どうしようもない事なのだ。

この世界は誰もが幸福になれるわけではない。犠牲は必要な事なのだ。その事に無自覚なのは、足元を掬われる。そして敗北していく。

デュラスは理想も現実も獲得しなければならない、この国を深く愛しているからだ。

官僚や政治に生きる人間というものは、実は深く孤独なのだ。

人は万能ではない、だから最善を尽くす他、無いのだから。

ヒースの兵器工場の設計図が、今。テーブルの上に広げられている。

デュラスは頭を抱えていた。

人体改造、幼少期からの戦闘訓練。

彼女は人の命を何とも思っていない。全ては進化のための過程でしかないのだと考えている。

しかし、それでも敗北する事が分かっている、戦い続けなければならない。

デュラスには愛国心があるから、人民を守らなければならないのだから。

多くの者達の犠牲によって築き上げられた都市を、守らなければならないのだから。

自分には力はあるのだろうか。

決断しなければならない。

「私自身もまた、命を賭すか？」

答えは出ない。

十

ヴァーゲンの街に着いた。

街は活気付いている。

プルシュは此処の通貨も用意してある。まずは宿泊場所を探そうと思う。

落ちていた新聞を拾う。どうやらテロの話や税金の引き上げの話で持ちきりだ。それから、新たに出版された作家の本や観光所におけるトナカイの増加。新しいジャンク・フードの紹介、最近の裁判の記事などが記されていた。

街の人間は何処か余所余所しい。もしかすると、外から来た人間が嫌いなのかもしれない。戦争が始まろうとしている事が分かる。みな、不安によって彩られているのだ。それにしても、自分は本当に目的を果たせるのだろうか。

戦わなければならない、ヒースを討伐する為に。

やるべき事は沢山、並んでいる。どうしようもない程に。

成し遂げる事が出来るのだろうか、分からない。

しかし、どれ程、辛い現実と対面したとしても戦い続けるつもりだ。

子供達の未来、希望、それらを守らなければならないのだから。

ヒースの国家は腐っている。きっと、この国家もかもしれない。

ただ、まだ此処はマシだ。階級によっては幸福な者達も多いのだから。

幸福とは何だろうか、とふと思う。自由を謳歌出来る事。それは、思考して、自らの意思で行動する自由なんじゃないのだろうか。

それでも、息の絶えるまでは戦い続けようと考えている。

粉雪が舞い落ちてくる。

空を見上げる、何処までも青い。

肌寒く、胸の奥まで凍えそうだ。それでも鬭争は終わらない。きっと、自分も敗北するのではないのか。勝てる見込みの無い戦いを続けている。それでも、終われないのだから。

此処にも、社会の裏側がある筈なのだ。

それを探し当てようと考えている。

テロリスト……。もし、彼らに会えるのならば、協力を願いたい。

デュラスもヒースも倒してしまえばいい、プルシュはそう考えている。

十

希望とは世迷いごとなのだろうか。

這い回るハツカネズミ達、鶏達。全て、死体だ。

ソルティは動き回る生き物達を愛している。

白いネズミの方は、部分部分が腐り。市場で買ってきた鶏は羽根が耷られ、首を切り落とされているものもいる。

彼らは動き回る。まるで、生きていた時と同じように。

それを見ながら、彼は何か安心感を覚えるのだ。自分でもおかしいと思っている。

ソルティは死体と対話し続けている。ずっと、死人と一緒にだった。

自分は神話の戦死者の魂を駆り立てる女神なんじゃないのかと思い続けている。

女のような顔、身体。その上に甲冑を纏っている。

ソルティは彼らの声を聴いている。彼らは語り掛けてくる。それは、とても安らかな響きを持っている。

彼はもしかすると、生者を愛していないんじゃないのかと、自分を責める。

ザルファに死者の影を見ている。彼は生きながらにして死人なのだ。

十

プルシュは街中を徘徊していた。

主に路地裏を巡っていく。路地裏は入り組んでおり、明らかにスラム街のようなものが作られている。

ゴミ捨て場を漁っている子供。彼らは顔色が悪そうだった。

明らかに病原菌に侵されている、長くは無いだろう。顔には腫瘍のようなものも出来ていた。

プルシュは彼に、今日の食事代を与えようとする。

すると、子供は食って掛かって、財布ごと奪おうとした。

プルシュは溜め息を吐く。子供は彼を罵りながら、何処かへと去っていった。

「どうしようもないな、俺は」

少し、その子に本気で腹を立てた自分が嫌になる。

問題は、子供にあるわけではないのに。

この辺りでは、ホームレス達が台車を引いていた。彼らは古新聞や拾った家具などを売っていた。

この街の法律がどうなっているのか気になる。少なくとも、グローリィよりはマシな筈だ。けれども、何だかやるせない。

彼はスラム街の広場に行った。

すると、そこには晒し台が置かれていた。
沢山の者達が、吊り下げられている。
デュラスによって、処刑された者達らしい。
人々がその光景を遠巻きに見ながら、祈りを捧げている。
圧倒的な暴政を感じた。
最近では、謀反人は問答無用で処刑しているらしい。
感情が渦巻いていく。
その光景を目の当たりにして、プルシュはデュラスも始末しようと思った。
二人の独裁者、生かしておくべきではない。
何が秩序なのかと思う、そんなものに一体、何か意味があるのだろうかとも。
子供達の未来。自分もまた、テロリストなのだ。
グローリィにおいての、たった一人のテロリスト。
だから、同じように革命を望む者達を探している。
自分と同じ目的を有したもの。この秩序に反抗したいと望んでいるもの。必ずいる筈なのだ。
ジルズが捕まると、誰かが叫んでいた。
プルシュは振り返る。ジルズが捕まった、と。その話ばかりが聞こえてくる。
ジルズとは一体、何者なのだろうか。訊ねてみたい。
直観が告げている、何か重要な事なのだろうと。
何かが言っている。ひょっとすると、自分と近い者なのかもしれない。
咆哮のような叫び声が聞こえてきた。
更に遠くでは、労働者達のストライキが起きていた。彼らは口々に日々の鬱憤を叫んでいる。
兵隊達は適当に彼らをあしらっていた。

十

国家は巨人のようなものだ。戦争もまた、巨人のようなものだ。
人間の手に負えなく、簡単に踏み潰されてしまうもの。
暗黒の画廊を、デス・ウィングは歩いている。
巨大な巨人の絵が描かれた絵を凝視する。それは都市の上を、巨大な巨人が覆い尽くそうとしていた。
この邪悪な画廊の中で、人々は何か恐ろしいものを見出すのだろうか。
そんな事を、うっとり空想するのは好きだ。
残酷な情景程、好ましいものは無い。
美術館を出る。それにしても、空がとてつもなく澄んでいる。
足元には雪が広がっていた。雪かきをしている者達も多い。
まるで、その情景、それ自体が不可思議なまでに絵画的だった。
美術館の中から出ると、あらゆるものに美的なものが宿っているように視えてくる。

デス・ウィングは人間の持っている闇を、悪意を嗜好する。

それは生まれ持った特質なのだろう。

この世界が嘘偽りだと、何処かで考えていた。

十

計画は練りに練っている。

まず、何よりもザルファをヒースの下へと送り込むべきなのだ。

ムシュフシュとその部下達をその警護に任せようと考えている。

ザルファの『ダーク・クルセイダー』の力さえあれば、ヒースを壊滅状態に陥れられる可能性がある。

問題は如何に、グローリィの領地の中に進入していけるかという事だ。

それは、諜報員達が練りに練っている。数部隊派遣して、一部は此方に戻ってきている。それで、ヒースの領地のルートはある程度、掴めている。

暗殺だったら、出来るぜ。と、ザルファは言う。彼の言葉は信用ならない。

彼は破滅的だからだ。自分の命を余り、何とも思っていない。それでは駄目なのだ。

信頼し合える仲ではない。

ザルファの恐ろしさは、自分がいつ死んだって構わないと思っている事にある。

処刑も拷問も、彼には通じないのだろう。

そういう眼をしているし、むしろ、拷問吏の方が彼に狂わされる恐れがある。それでも彼を手元に置いておきたいのは、戦力として多大に評価しているからだ。

彼の能力のヤバさは、皆がよく知っている。

女を老いさせていく力。

これによって、ヒースの部隊の中樞をなしている女達は、片っ端から駆逐する事が出来るだろう。

それにしても、やはり彼からは何とも言い難い異端とも呼べるべきオーラのようなものが漂っている。まるで底なしの邪悪さを帯びているかのような。

生命というものを憎悪しているかのような。

異質そのものであるかのような。笑む、その笑顔の裏には凶り得ないばかりの邪気が潜んでいるのだろう。

それすらも、デュラスは買っている。目的を果たす為には、人ならざる力が必要なことから。

デュラスは馬車の窓から外を見る。

どれくらいの犠牲者が出るのか、予測しなければならない。

国の存続の為に、国の栄光の為に。

十

きっと、この世界にずっと裏切られ続けられるのだろう。

それでも、ザルファは憎悪を糧に生きている。

心の中から湧き上がってくる、女に対する敵意を消す事を出来はしないのだから。

沢山の女達を殺害する事が出来る。

だから、デュラスの意見には賛同した。

デュラスは奇妙にも、珍しく不快にならない女なのだが。やはり、不信感は拭い去れない。

何を糧に自分は生きてきたのか分からない。ただ、姉の幻影を振り払いたくて生きてきたとしか言えない。それ以外に、自分には何も無かったのだろうか。

デュラスも含めて、女達の言葉が全て嘘ばかりに思える。いや、他人全てが嘘ばかりに思えるのかもしれない。

自分自身の心を、鏡で覗き込むように思考した時に。

やはり、自分には憎悪しか無いのだと知る。

まともに生きている者達に対しても、強く嫉妬している。

他人の人生が崩れ去ってしまえばいい。

そんな事ばかりを考えていたりする。

何度も何度も、反復していく過去の記憶を拭い去る事が出来ない。過去の事を消し去る事が出来るのなら。違った人生を生きられたのかもしれない。自分の人生は間違っている、それだけは理解しているつもりだ。

しかし、自分は何処まで行っても自分でしかない、呪詛に塗れながら、普通の人間を深く憎んでいる。

普通になれるという事実を憎んでいる。

自分が酷く踏み躪られている気分になってくるからだ。

裏切りによる不信感。他者を傷付けずにはいられない自分。

どうしようもなく、憎悪の刃を向けるしかない者達ばかりだ。

何もかも、老いて朽ちていってしまえばいい。

権力も資本も何もかも。女達も皆殺しにしてみたい。

ザルファは暗い夜を見上げる。ソルティは彼を救う事など出来ないのだろう。

青い悪魔の凄惨な虐殺を目の当たりして、彼をとて好きになった。

あの光景をまた、再び、見てみたい。

ひょっとすると、そればかりを今は生きる糧にしているのかもしれない。

十

ジルズの友人である少年がいた。

彼はまだ十五にも満たないのだろう。

プルシュは彼の頭を撫でる。とても柔らかい、少し癖のある毛だ。

彼は話してみると、早熟で。世の中に対しての色々な疑問を呈してくれた。

こんな少年が社交界にいたのなら、どんなに良かったのだろうか、プルシュは思って仕方が無い。此処の領地も腐っている。

才能が沢山、潰えていく。未来に対する可能性が。

ジルズは思い詰めていたと言う。彼の兄貴分が処刑されて以来、ずっと復讐を企てようとしていたのだと。

プルシュは子供達が可愛い。だから、彼らのためにこの世界を赦したくはない。どうやっても彼らの無情な死は賄えないと思うのだから。だからこそ、この世界に復讐が必要なのだと思っている。独裁者達を倒す事、それにプルシュは未来を賭けている。

倒した後の次の時代を考えるだけの余裕は無い。プルシュには情念ばかりがある。

その情念をこの辺りの者達も共有している。

国家、体制の破壊。それによって何かが変わるのではないのかと。

少なくとも、今よりも良いものが誕生する筈なのだ。希望を持つ事というのは、そういう事なのだから。

何故、この世界は弱き者が暴力に晒されていくのだろうか。

体制という存在。

もし、体制の裏側にもう一つの世界を作る事が出来るのなら。

プルシュはこれ以上は思考出来ない。感性がそれ程、優れているわけではないから。ただ、子供達の辛さが苦しい。いつもいつも苦しく思っている。

きっと、酷く幼い頃の自分と重ねているのだろう。

ぼんやりと強い疎外感のようなものを覚えている。

子供の頃の記憶が薄い、彼はネグレクトされて生きてきたような記憶を覚えている。それは仕方が無かった。彼の住んだ地域では、子供というものは親の所有物みたいなものだった。そういう環境だった、みな、同じように育った。

しかし、プルシュには、そういった環境が苦しかった。

それはきっと、幼い頃に読んだ他国の絵本を開いてからだ。

そこには、親や仲間達に愛される黒い肌の子供の絵が並んでいた。不思議な感触を覚えた。

ああ、自分の生きている体制のルールはおかしいのではないのかと。

それから、彼はこの社会に対して、あるいは世界に対して、疑問を持ち始めた。

そして、彼は子供というものを神聖視するようになった。

墮胎児さえも愛しく思えるプルシュ。決して、彼らは生まれなかったわけではないのだから。

国家の存続、未来の軌跡は。何によって賄われるのだろうか。

可能性が死んでいく。どんな才能を死んでしまえばそれで終わりなのだ。

十

ヒースの全貌が見えてこない、明らかに情報が不足している。

それでも、倒さなければならない。

デュラスは悩みに悩んでいた。

自分一人の存在が、何万名、何十万名、何百万名以上もの国民の運命を左右するのだ。

国家の頂点に立つという事は、重荷以外の何物でもない。

自分にはどれだけの力量があるのだろうか。しかし、意志を保ち続けるしかないのだ。

どんな犠牲を伴ってでも、国家を守り抜かなければならない。

感情を鉄のようにしなければならぬ。

そうでなければ、闘争は不可能だろう。

情報によれば、近代兵器を作り出していつているという。

それには相応の奴隷を使っているのだと。

無数にある兵器工場。

メタリックな世界。

人間は進化の過程で、いらぬものを排除していかなければならぬ。少なくとも、ヒースはそう考えているのだと聞く。創造する為には、此れまで培ってきた人間の遺伝子や文明などを再構築していく必要があるのだと。

しかし、それ以上の情報が不足している。どうすればいいのかわからない。相手がどれだけの力を有していて、どれだけの威力のある兵器を持っているのか。

そして、此方側の戦力は。どれだけの犠牲者が出るのか。

権謀術数をどれだけ練り込んでも、限界は見えてくる。

物量戦において、此方の数が幾ら多くても敗北するかもしれない。明らかに情報が足りていない。デス・ウィングに頼りたくなる。あの化け物に。

時間というものは暴力そのものだと思う。日々、刻々と迫ってくる。

終焉の日が近付いてくるかのようだ。このままでは、グローリィによって占領されてしまうのだろう。このままでは、ヴァーゲンは滅びてしまう。

どれだけの者達を救えるのだろうか、今や貴族達は退廃している。そんな者達を守る理由などあるのだろうか。違うのだ。大切なのは、祖国そのものの維持だ。

過去の同胞、未来の同胞の為に、ヴァーゲンを維持しなければならない。

既に数え切れない同胞達が死んでいる。

抱え込んでいる問題が、あまりにも多い。思考を整理するだけでおかしくなりそうだ。

十

みな苦しんでいるという現実。生きるってのはそういう事なのかもしれない。

全てが滑稽で、道化みみたいなものだ。

ジルズは経過していく時間の下で、ただ処刑される事を待っている。

自分の人生を振り返ってみる。後悔する事が余りにも多過ぎる。しかし、自分という命そのものによって何かが報われるのなら、それでもいいんじゃないのかと思ってしまう。

生きる事は滑稽だ。窓の外は雪が降っている。そういえば、自分の年齢は幾つなのだろう。

幸せな時間はもう永遠にこない。この世界との別れが、これから待っている。

牢獄の中にいると、色々なものを夢想してしまう。

全てはネガティブなもので、全ては突き付けられた現実だ。

処刑台の事、拷問の事、沢山の妄想が広がっていく。それは妄想ではなくて、直面している現実なのだ。これから訪れるであろう破滅、胸を掻き毟られそうだ。

今、死というものが目の前に迫っているのだ。それを受け入れるのは時間が掛かるのだろう。

あのザルファという男、彼とはもう少しだけ会話をしてみたかった。だが、それも叶わない。彼はデュラスの下で、どうするのだろうか。

どうにもならないのかもしれない。

どうせ未来には何も無いのだが、それでも足掻いてみるべきだろうか？

しかし、強い無力感ばかりに襲われている。どのようにしても、現実是不変なものだから。

ジルズはジンクスを信じていた。あの時にああやっておけば、ああなるだろうとか。

幸運の印みたいなのは、あるものだ。そして、今はそれが見つからない。当然だ、もう牢獄の中で終わりの鐘は鳴り響く運命にあるのだから。

どうにもならないのだと、覚悟している。

だから、今はただ、自分が何故、生きてきたのかを思索しなければならない。

大切な仲間達の顔が浮かんで消えていく。

それは孤児の頃からそうだった。野垂れ死んでいく仲間達を見ながら、彼は一人、物思いに耽った事がある。

階層の頂点にいる連中は、どんな奴らなのだろう。もう、妬ましいとかそんな感情を超えてしまっている。今はもう折り潰す事ばかり考えていたいなのだから。

殺意と敵意と憎悪と呪詛を、自分の中に溜め込んでいこう。

もしかすると、そうすれば、自分以外の誰かに怨念が憑依して、目的が達せられるのかもしれないから。

だが、つねに挫けそうになる。もう、何もかも終わってしまっているという事実は変わらない

牢獄の中にいると、少しずつ自分が弱くなっていくのが分かる。これまでの人生に対する後悔ばかりが湧き上がってくる。しかし、それはどうしようも無い事なのだ。

全ては彼自身が選んだ道なのだから。

そういう結末に向かって、此れまで歩んできたのだから。

食事は美味しくも不味くも無い。

残飯ではなく、それなりの味をしたコッペパンにジャクサンド、ミルクティーを与えられる。城の者達からしてみれば、貧しい食事なのだろう。しかし、ジルズは残飯を貪って暮らしてきた。腐った魚を食べる事にも慣れているし、物乞いをして生きる事も当たり前だ。拾った道具だけで生活していくのが日常だった。

皮肉にも、以前よりも良い物が与えられている。それは死刑執行人のせめてもの、手向けなのかもしれない。

冷たい風が吹き抜ける。

他人の人生を今、羨ましく思う。何故、此れ程までに弱ってしまったのだろうか。

理想は崩れていく、国家を破壊しようとする理想がだ。

あの美少女のような美青年は、これからどう生きるのだろうか。

彼のその後が見れない事が、一番の悔恨なのかもしれない。

幸福にとって必要なものは小石だ。角の無い丸い小石を探す事、そうすれば大抵、生き残れる。見つからなければ死ばかりだ。

運命というものは、ジンクスのようなものが存在する。それはたしか事なのだ。しかし、彼は、今回、幸運の小石を見つけられなかった。だから、今、この状況にいる。

未来には果たして届くのだろうか。

どうすれば、理想を獲得出来るのか分からない。決断する前は、自分にはどうにでも出来ると思っていた。しかし、いざ動いてみると、無情な現実には晒されている。

未来が閉ざされていく中で、過去をどう肯定すればいいのか分からない。

崩壊していく精神を繋ぎ止める為に、自分の右脚を引っ搔いて、傷を付けていく。

しかし、ストレスで遮断されているのか、感覚がよく分からない。

冷たい壁の苔が、酷く此方の心を陰鬱にさせる。

一番、辛い拷問は希望が叶わない事なのかもしれない。夢見ていたものが全て崩れていきそうだ。ただ、死を待つばかりの今は何を考えればいいのかだろうか。

それにしても、いつか何かに届くのだろうか。

彼は気を紛らわせるために、音を聞いていた。風の音、雨の音、雪の音、雷鳴、それから夜の景色。牢獄の中において、自由を感じるものは窓だった。

十

ザルファはナイフを研いでいた。

ダーク・クルセイダーだけでは心許ない。

どうせなら、毒を塗ったナイフを突き立ててやりたい。

感情の全てを込めて、敵を殺してやりたい。

デュラスから、ヒースという存在の概要は聞かされている。

あのヒースの兵団とは以前、戦っている。ザルファにとってはとてつもない、楽しみだった。帽子の中には、無数のナイフが入っている。

この帽子は、異空間になっているのか。無限に物が入っていく、ひょっとすると、肉体という時間を操る彼の力と何か関係しているのかもしれない。

「楽しめるんだよね？」

ザルファはムシュフシュに囁く。

筋骨逞しい男はとても嫌そうな顔になる。

何というか、彼からは血の臭いを感じる。血が好きで仕方が無いといった者の臭いだ。それは

本当に毒々しく、少しずつ辺りの者達の心を蝕んでいくようだった。嫌でも、自分の業を突き付けられていくような感じ。その狂気を理解してしまうと、此方側まで闇の底を引き摺り出されてしまうかのような。

そう、言うならば。

彼からは。まるで、民話の森に住まう悪魔や魔女のような印象を受ける。

死の向こう側に生きている存在であるかのような。

言うならば、この世界の者ではないのだ。異質的な空気ばかりが漂い、そのような禍々しさを周囲に振り撒いている。見る者は、ぞっとするような怖気に襲われる。

親衛隊は集まっている。

計画としては、ヒースのいる本拠地に潜り込んで。ザルファがダーク・クルセイダーを使った後、ムシュフシュ達が突入して。ヒースを殺害するという事になっている。

十

プルシュは息を飲んだ。

見慣れてこそいるが、見慣れない光景だ。

あるいは、何度も、見ているからこそ。過去の記憶が映像となって反復して、此れまでの記憶も重なって、この光景がより重々しいものとなっているのかもしれない。

一人のテロリストが、今日、処刑されたらしい。

それは白髪の少年だった。

プルシュは自分と同じものを感じていた。

彼は“力”のようなものを持っていたのだろう。

そして、その力を巧く活用出来ずに敗北していったのだろう。

もし、生きているうちに会う事が出来れば、良い友人になれたのではないのかと。悔やんで仕方が無い。

胸が張り裂けそうだった、まるで同胞の死のような。

来るのが遅かった。もっと早く出会っていればと惜しんで仕方が無い。

まるで、未来の自分自身と重なるかのようなようだった。

此処は死臭が漂っている、いつも見ているプルシュの世界。

死は存在するのだろうか、少なくとも、子供達は彼の中では生きている。生きているものとして、肉体を再生させている。

何がこの世界にとって苦しみなのか分からない。

どうすれば、解答が得られるのかも分からない。

連鎖し続ける悲嘆を賄う事は出来るのだろうか、プルシュには出来ないだろう。彼は彼自身が無力である事を知っている。

十

立場を変えれば、人間は様々な形で映る。

一方から見て、悪い人間でも。別の方から見れば、良い人間だったりする。当然、逆も言えるのだが。というよりも、人間は立場によって、見方が違うのだろう。

ワーロック。

ムシュフシュは、彼を見ながら。そんな事を考えていた。

ワーロックという老人は、祖国について熱心に語る。自然の素晴らしさ、美しさ。民族の持つ力強さの歴史。デュラスが戴冠する前から、この老人はこの地位に付いている。

祖国を愛している。だからこそ、この老人は他民族を幾らでも殺せる程に、憎めるのだろう。正義があるから、何処までも汚くなれる。

それは国家にとって必要悪なのだろう。それがあからこそ、国家というものは維持する事が出来るのだ。

ワーロックは。国民達に、如何に敵国である『グローリィ』が汚い国であり、ヒースとその民族が劣等人種であるかを宣伝していた。

それこそが、彼の役目であり、彼が望んで行っている事だった。

ヒースをコケにした、張り紙も街中には撒かれていた。

これから。戦争が始まるのだろうか。

ムシュフシュでさえも、困惑している。おそらく、デュラスもだろう。

戦争が始まれば、国家の維持どころではない。

只でさえ、この国は物質に限られている。大自然の驚異の只中にもいる。

十

ザルファは白い拘束服によって。身動きを封じられていた。

彼と一緒に、城に侵入したテロリストの男の方も。今、身動きを取れなくしている。あちらの方は、ワーロックが何とかしてくれる筈だ。

デュラスはすぐに理解していた。

このザルファが発しているものは、異常な現象を引き起こす能力などではなく。彼の持つ、異質な雰囲気のようなものだ。

「ヒース。殺してやるよ、俺は元々、それが目的だったからな」

くっくっ、と彼は笑う。

デュラスは困惑している。

この男。……怖い。

これだけ無力化したにも関わらず、何をやってくるか分からない。

「俺の能力『ダーク・クルセイダー』。お前には効果が無いらしいが。ヒースの兵隊達には通用した。どうかな？ 俺を送り込んでみては」

彼は愉悦を浮かべている。

何処か余裕があるかのよう。

こんなにも不自由なのにも関わらず、彼はとても自由そうだった。

その魔性の眼には、取り込まれてしまいそうだ。

「俺の身体に毒物や病原菌を注入してみてもどうだろう？ 奴らにとって、最高のプレゼントになるんじゃないのか？」

ムシュフシュは、大型の剣を彼の首筋に向けた。

「デュラス様。どうします？ こいつ。わたくしめが、彼の首を落としましょうか？ 余り長く生かしていても、どうかと思いますぞ」

「……………。いや、彼と話がしたい」

デュラスは屹然と、緑の瞳をした黒髪の男を見据える。

「私の下には、デス・ウィングがいる。お前は奴よりも、扱い易そうだな。どうかな？ 命を助けてやるから。私の下に付いてみてはどうかな？ 別にお前はテロリスト共に、執着なんて無いのだろう？」

「ああ、無いね」

十

ザルファは女達の血を絞り上げた湯船へと浸かった。

肉体が満たされている感覚。

彼は本当に幸せそうに、血の湯船の中へと浸かっている。

女の死をとてつもなく、愛しく思っているように。まるで、何か大きなものに対して復讐を果たしてしまいたいかのよう。

エリナはザルファの身体を、タオルで拭く。

死体のように冷たい肌。

艶然とした唇。

妖艶な顔。エメラルドの眼。

十

純白のドレスを纏って。棺のような白い硝子ケースで眠るザルファ。

エリナは高揚感を覚えながら、そんな彼に仕えている。

硝子ケースを閉じる瞬間。彼を永遠のものとして所有しているような気分になる。

エリナはザルファの脚に触れる。毛の無い滑らかな肌。

若い女の血を吸って。より、透き通るような質感を帯びているように見える。

ぞっとするような、足首。まるで、聖性さえも感じさせる。

とても男とは。……いや、人間のそれとは思えない身体。

エリナはこれから、ザルファに嬲られるのだ。

ザルファは、エリナの頬を指先で撫でていく。

「脚。怪我しちゃった……」

見ると、彼の踵の辺りが真っ赤になり、血が流れている。

「わ、わたしが綺麗にします……」

エメラルドの瞳をした男は、くっくっ、と笑う。

エリナは夢中になって。ザルファの脚に舌を這わせていた。

タオルケットで隠された、彼の股の付け根。……掴み取りたい。

どうしようもない程の欲情に、女は焦がれている。

彼の背中を見る。

黒いさかしまの十字架。

思わず、エリナは彼の下半身のタオルに手を伸ばす。

エリナの頭の中に。獣欲が過ぎる。

彼を食ってしまいたい。

ヒースは、強く欲望を肯定していた。こういう状況になった場合、女は自分の欲望の赴くままに動くべきだ、とヒースは言っていた。

ザルファはそれに同意する。女というものの存在。彼が憎むべきものの対象。

「させないよ。これでも、食ってな？」

ザルファは人差し指を、エリナに差し出す。

彼女はそれを口にする。激しく舐める。

「美味しい？」

「……え、ええっ。とっても、美味しいです……」

彼の皮膚は、とても甘い。飴のよう。砂糖菓子みたい。

「そう、良かった。俺の肉体は、幼い頃から乳香などを練り込まれている。姉がね。施したんだ。俺の体液、血の味など。凄く美味しい筈。そういう風に、創られたから」

十

夢の中。

エリナはザルファをバラバラに解体している。

首だけのザルファ。彼はサラダや子羊の肉によって盛り付けられている。

香辛料を振りかけられた、ザルファの解体された肉体。

エリナは、それを熱心に口に運んでいる。

彼の全てを飲み干してしまいたいという妄想。

彼に瞬く間に、取り込まれていくのが分かる。

ザルファの世話をして、数日が過ぎた。

ヒースの諜報員として、この街に派遣され。捕まり、無残な死を待っていたが。……。

ザルファには、感謝している。

それから、彼の持つ色気。眩暈がする。

……美味しそう。

実際、ザルファの体臭は甘い。

彼女を含めて、宮廷の女達や。ワーロックが捕らえたヒースの捕虜達は、次々とザルファの僕となっていく。

十

ザルファ。

彼の拷問吏としての、力は優秀だった。

強い意志を持って、睨んできた女達は。彼の前ではすぐに白状した。

ワーロックが息を呑んでいた。

こんな男を此れまでに、見た事は無かったからだ。

背中を服を開かれる鎖で繋がれた、女達。

彼女の背中に向けて、ザルファは鞭を振るう。

女の背中が、引き裂かれる。

ザルファが何事か囁く。

彼は、凍える雪原のような微笑を浮かべていた。

ザルファは女達を魅了していた。

結果的に、彼の拷問は。女達の肉体をそれ程、損壊せず。彼女達の命を救う事にもなった。

彼には異様なまでのカリスマ性がある。魔性の魅力が。

女達は、それに惹き付けられていくのだろう。あるいは、男もかもしれない。

デュラスが創らせたザルファの部屋は。彼の信望者となった女の召使が増えてくる。

信仰の対象が、ヒースからザルファへと移ったのだろう。

元々、女達は。ヒースの魔性によって、彼女を崇拜して。此処に送り込まれていた。彼女は、その崇拜対象をザルファに乗り換えたのだろう。

それくらいに、ザルファという存在は圧倒的だった。信心さえも、塗り替えていくだけの狂気

。

デュラスは絶句していた。

ワーロックは感嘆する。

「人間は。分かりませんな……」

デュラスは彼の言葉に頷く。

確実に。デュラスの宮殿は、ザルファに浸食されていっている。

デュラスは、それを苦笑しながら眺めていた。

捕虜の女達は。嬉しそうに、可愛い、という言葉で叫ぶ。

デュラスは、なかば呆れていた。

女達は口々に、ザルファに畏敬の言葉を放つ。

「ザルファ様。お姉さまと呼んでいいですか？」

「いいよ。でも、俺は男だよ。それでもいいの？」

「呼びたいですっ。お姉さま」

彼は笑った。それは次第に、高笑いへと変わっていく。

実際、ザルファは女王だった。

デュラスは、彼の女達を惹き付ける力に戦慄していた。実際、これまで培ってきた男性的な強い意志が無ければ。デュラスもまた、彼の虜になっていたのかもしれない。

「デュラス殿」

シャックスは言う。

「余り、彼を自由にしてはなりませんよ？」

「分かっている……」

十

たまに折れそうになる時は。

何かに気付いてしまった時だ。

デュラスは雄々しく振舞っているが。やはり、自分は女性なのだと思う。

デス・ウィング、あれは違う何かだ。女性とは違う何か。

デス・ウィングと対面する事によって、彼女は自分がどれ程、女性的であるかを思い知らされた。所詮、自分は女でしかないのだと。

見ないようにしている、貧困層側や他国の苦しみ。

けれども、情報は入り込んでくる。

国民全てを守らなければならないというのに。

十

……あなたの子供よ。

姉は布で包んだものを、ザルファに差し出す。

彼は今日も病床に臥せりながら、その布切れを眺める。

異臭を放っていた。

その時の記憶は、錯綜していて、よく分からない。正気と狂気の狭間が何度も、何度も、反復していき、もはや何が何なのか理解が出来ない。

姉のザルファに対する行為はエスカレートを続けていた。

もはや、彼女自身、正気というものを失いつつあるのだろう。

自分は女の慰め物にされる為に生まれてきたのだろう。

彼は、絶望というものを味わう事になる。

生かされているという事実。

本来ならば、自分など野垂れ死んでいるのだから。
このか弱い肉体は、本当に、どうする事も出来そうにない。
姉は彼にチョコレートやケーキなどを与える。
美味しいでしょう？ と彼女は言う。ザルファは頷く。
そして、姉は仕事をしに外へと出掛ける。
ザルファの生活の為に。
彼はずっと、姉の呪縛から逃れたいと思い続けていた。
けれども、肉体がそれを許さない。
弱過ぎる身体。
自分の存在など、結局の処。全ては顔でしかないのだ。
もし、それが無くなってしまえば。自分の全ては無価値になる。
置かれている果物ナイフ。
それをそっと、喉に当ててみる。
強く強く押し当てようとする。けれども、何度も一定以上、押し込める事が出来ない。
終わらせる事はいつでも出来る筈なのに。いつでも出来るわけじゃない。
まだ、何に縋っているのだろうか。
それすらも、何処かで忘れてしまった。
巨大な光の玉が外では上がっていた。
遙か彼方の地域にて、火薬を筒に詰めて。空へと打ち上げているらしい。
まるで、光の環のようだ。
綺麗だなと思わず思う。そして、自分は何処までも醜いなとも。
その混成された感情こそが、彼の正気を彼岸へと引き離していく。
悪意や敵意があるから、立ち向かえる。
いつか弱さを克服する事は出来るのだろうか。
もし、その時が来れば。この肉体を超えた意志が、強靱なものとなるのかもしれない。
弱さの極地があるのだとすれば。自分以上に弱い人間などいないのではないのかと、彼は思い
続ける。
彼は星を見ていた。届かないもの、手に入らないもの。
ソルティは何の為に。彼に優しくするのだろうか。
こんなにも汚濁に塗れた自分に対して……。
自分自身を消してしまいたくなる。まず、顔こそが何よりも汚らわしい。
ふと。気付く。
自分がどれだけ、傷付いて生きてきたのかを。
自分自身と対面する事が怖く。
他人を恨み、憎み、妬む事でしか生きられない。
ザルファは知っている。
自分が生まれてきた事が、間違いだったのだと。

「処で俺を調教し、支配しようとしたクソは死んだ。お前はどうかだろう？」

ザルファは自分の足首に舌を這わせる女を見下げる。

彼は女を全員、皆殺しにしたいくらいには思っている。敵意と憎悪ばかりが膨れ上がってくる。

「あたし、あなたが大好きなんです……」

「そうかぁ。俺は反吐が出る程、お前が心の底から嫌いなんだけどな？ 何なら、今、此処で自殺してくれないかな？ 飛び降りがいい。俺が好きなら、それくらいするよな？」

女の舌は芋虫のように、ザルファの肌を這っている。

どうしようも無い程に、この女を傷付けたい。心以上に特に顔を。

鼻と両眼、どちらを無くしたら。この女は生きていけなくなるのだろう？ そんな事を考える。

このサディスティックな歓喜は、どうしようもない、彼自身だ。

顔で男を支配して、自分の所有物にしたい。哀願物に、寒気がする程、醜く汚い。ザルファが見ている暗い世界。抑え切れない敵愾心、どうしようもなく湧き上がってくる恨み辛み。それを消す事は出来ないのだろう。

全ては姉の幻影のようで、全ては刺し殺してしまいたいもの。

自分はずっと、姉に凌辱され続ける存在なのではないのかと。屈辱の炎が燃え続けている。彼は只、女を憎む事でしか生きられない。

そうやって自分の人格を完全に、形成してきたのだから。

デュラスは、賢明だろうと思った。彼を見て、すぐに彼の心を見抜いていた。だから、余り近寄らない。代わりに、城の使用人などがザルファに寄ってくる。

ある意味で言えば、使用人達は生贄のようなものだ。彼女はその事に関して、どれくらいの自覚を持っているのだろうか。ザルファは強く、ほくそ笑む。

彼は首をがっしりと掴まれる。女の胸が身体に当たる。全身が揺れ動いている。自分はいつもそうだ、こうやって慰め物にされる。身体が弱いからだろう。女以上に華奢だから。

『ダーク・クルセイダー』を発動させてやりたい。しかし、デュラスの側近達が面倒臭そうだ。いつものように、彼は振舞う。女の方が寄ってくるから。

そして、女はザルファの為に破滅していく。まるで、滑稽な予定調和の劇のように。

それにしても、早くこの女、飽きないかなあ？ そんなに面白いのだろうか？ こっちは過去の映像などがフラッシュバックしたりなどして、大変なのだが。

しかし、今、生かされている。それはとても良い事なのだろう。

ジルズは処刑されると聞かされている、それに比べれば、ザルファの待遇は、とても良いものなのだ。

他の男と違って、性欲が根付く前から。姉によって、無理やり支配されていた。だから、彼は

同性もよく分からない。

十

デス・ウィングは、生きる事に何の意味も見い出してはいない。

彼女は这个世界をつまらなく思っている、だから悪意を振り撒きたいと思っている。

这个世界の人々に対する、無価値さは、死にたいと願い続ける自分にとっては呪詛以外の何物でも無い。ありとあらゆる人々に対して、彼女は呪いを撒いてしまいたい。

それは、一体、どのような感情が基盤になっているか、もはや分からない。

憎悪なのか、嘲笑なのか、嫉妬なのか、どれとも違うような気がしないでもない。

自分は死ねないのだ、それはどうしようもない事実だ。

その地点で、どう这个世界を面白くひっくり返すべきかと考えている。

それは、楽しむ、という事だった。

这个世界の者達を、駒のようにして楽しむ。

そうすると、心の底から愉悦が込み上げてくるのだから。

人間の持っている総体的な悪意。

それが見たくて見たくて、仕方が無い。

だからこそ、旅を続けている。

旅の先に、何かが見つかるのだろうかと考えている。

ひょっとすると、死ねない中で生きていければ。面白い人間が面白いドラマを織り成していくんじゃないのかと。人が生まれ、死に。人生を歩いていき、どのような結末へと向かっていくのか。それを傍観しているのがとてつもなく楽しい。

死にたいという願いを忘れた先に、何かが見つかるのかもしれない。

点在している様々な悪意。

それらはきっと、人々が生きる中でどうしようもなく誕生してしまったものなのだろう。

絶望や狂気、それらこそが、人間にとってとてつもなく、必要なものなのだろう。

生きる事に根拠なんて無いのだが、少なくとも、生きていく倦怠の流れの中で。どうにか価値のあるものを探そうと考えている。

彼女は自嘲する。

全ては、見世物劇なのだ。

空の星々、あそこにも生き物が存在しているのだろうか。

デス・ウィングは楽しみ方を知っている、自分の在り方もだ。

災厄を齎していきたい。

それは、とてつもなく彼女の心を慰めてくれるのだから。

遥かなる雲上の下、世界が凍結していくように。

自分の心は蒼白の只中に置かれているのだ。

先は闇ばかりの人間達を集めて、それらを傍観していくのがとてつもなく楽しい。

それは愉悅を伴うし、最高の娯楽なのだから。

十

ヒースは狂っている。それだけは間違いが無い。

狂王は自身の理念を行進させる事を止めようとはしない。彼女はこの世界に背信している。遺伝子の組み換え。力を手にしてしまったものの宿命として彼女は生きている。

彼女もまた、この世界を憎んでいるのだろう。だからこそ、自分の好きなように、この世界を弄繰り回してしまいたいのだ。

人間は脆過ぎる。だからこそ、動物や機械の部品と混ぜていく必要がある。

それが進化にとって必要なのだ。

グローリィは強くならなければならない。この世界の覇権を握らなければならないのだ。

永遠に渡って、栄光を手にしなければならない。

ヒースは願っている不老不死を。

増強していく肉体、きっと何処までも強くなっていくのだろう。

皮膚も、肉も、骨も、内臓も、人ではない別の何かへと変わっていく。

彼女は部下達に命令する。謀反人も、敵国の者達も、全てを粛清し、血祭りに上げる事をだ。

もはや、独裁などという概念は存在しなくなっていくのだろう。

ヒースは神そのものになる事を願っている。

この力も、この意思も。全てを手に入れた瞬間に、世界は新たな秩序が誕生するのだろうから

。

少年兵達が作成されている。

まだ十にも満たない子供達にライフルが持たされていく。

彼らにも、力は注がれている。

彼らは肉体の一部がメタリックな部品によって構築されている。

まるでおもちゃの兵隊のようだった。サイボーグの部品が、皮膚の下に埋め込まれて、眼球にはスコープがねじ込まれ、心臓は鉄でコーティングされている。

彼らは痛みを感じない。

苦痛というものを捨ててしまったマシンでしかないのだ。

彼らは数々の失敗作の中から作り上げられた、数少ない試作品だ。

世界を席卷する為に、いずれはこの技術は必要になってくるだろう。

まずは、ヴァーゲンを落とさなければならない。そして、あらゆる国家にも領土を広げていく。それこそが、ヒースとグローリーの望みであるのだから。

ヒースにはもう正常さなど無い。そんなもの、とっくの昔に捨ててしまった。

彼女は人間である事を拒んでいる。そして、支配を望んでいる。

この世界を好きなように構築していきたい。

必要なのは、分かりやすいラベリングなのだ。半機械や半動物のボディとして生かし続けて、欲望だけを脳に注入していく。これで戦闘兵器の出来上がりだ。

人間は機械や家畜でいい、ヒースはそう考えている。そうする事によって文明が発展し、この世界に規律が誕生する。科学の進歩こそ世界を掌握出来る。迷いなど何も無かった。

十

ヒースの能力によって、動物化した女達がやがてお互いの肉と肉を喰らい始めた。

血肉が乱れ飛んでいく。

能力のエキスを注入され過ぎたのだろう。もう、こうなってしまうと、只の本能だけで生きる物体と化している。もはや動物ですらない。只、暴食するだけの物体。

やがて、骨を噛み砕く音が聞こえ始めた。

背徳の力『テンパランス・リバーズ』。

ヒースは、きゃはは、きゃはは、きゃはは、と笑っている。

笑う度に、何か感情の堰が外れていくかのようだった。理性というものは、壊れてしまっているのだろう。

ヒースに付き従う者達は、みな、彼女の異常が分からなくなっている。

彼女に付き従う事こそ真理なのだと思っている。

それは一つの宗教のようなものだ。

ヒースのテンパランス・リバーズは、人間という存在を無理矢理、進化させる。

機械と混ざった人々。
彼らはまだ、生きている。
兵器と一体化した者達。
墮落の群れが続いている。

十

子供達を救いたい。けれども、救えない。
プルシュは心が蝕まれている。
何処にも届かない、明日のように。……未来は無い。
どうしようもない現実の中で、何と戦えばいいのか分からない。
エンバーマーという技術は独学で学んでいった。
子供達の死体は美しく蘇る。
何の為に生きてきたのか、プルシュは意味を付けようとする。
子供達は可憐だ。未来への希望なのだ。
かつて、兵器工場を見学しに行った。
みな、良い奴らばかりだ。
彼らは明日の日には死んでいくか、もしくは人体改造を施されていく。
自分には何も出来ないという現実、日々、襲われている。どうしようもなく、どうにもならない。
子供達を救えない。明日の希望を。
どうしようもない現実ばかりが辺りには広がっている。
一体、どこに希望があるというのだろうか。
弱い者達に希望を託さず、明日や未来の担い手を殺していく状態を作ってしまった時点で、その国に未来は無いとプルシュは考えている。
人間が思考停止していく状態、何も考えず機械へと変わっていくという事。
剥き出しの生、人間が人間で無くなっていくという状態。
何としてでも食い止めなければならないもの。

十

開いた窓、靡くカーテン。そいつは窓に座っている。
「君の相方なのだが。国王に囲われた」
死の翼は楽しそうに告げる。
何処からともなく、風が巻き上がっていくかのようにだった。
それは轟音を伴っている。
ソルティは不快そうな顔になる。しかし、彼女の言葉を吟味して複雑そうな顔になる。

「どういう事なんだ？」

「言葉の通り。君の相方は今、王と一緒にもう一つの国に向かっている。さて、私は教えるだけだ。君達がどう動くかに私は興味があるのだけれども、やはり私は無関心でいるべきだろうかからな？」

その女は、漆黒を背にしていた。背後には、寒空が広がっている。

まるで終わりを告げる鐘の音のように。

何者をも嘲笑っているかのように。

デス・ウィングの表情は笑ってこそいるが、酷く冷たい。

それは死や夜の刻限のようだ。

胸の中を、ずっと。不気味で冷たいそよ風が流れ込んでくるかのよう。

どんな希望も潰えて消える。

みな、終わりまで生きているだけだ。

彼女は何処までも傍観者で、どうしようもなく他人に対して冷酷だ。

ただ、他人の人生が破滅していく事ばかりを願っている者の眼だ。

ソルティはザルファの事を思う。どうしようもなく、やるせないもの。

背負った重荷は、自分から引き剥がす事は出来ないのだろう。

ソルティはザルファに依存している。彼に神聖ささえ、見い出している。

それはきっと、ソルティの中にある苦しみを、何故だかザルファは癒やしてくれるのだからだ

。

十

「テレサ……ごめんね、どうも私は。……人を好きになれないみたいなんだ」

ソルティは寂しそうに。とても寂しそうに笑った。

体温。

重ね合わせた唇の温度が。急速に冷え切っていく。

「ごめんね？ これ以上、出来ないみたいなんだ……。多分、私の生育環境と関係があって。

その……辛い思いさせちゃうのかな？ ごめん……」

二人の間の距離は、どうしようもなく分け隔てられている。

急速に身体が冷え切ったような感覚へと陥っていく。

胸にナイフを沢山、刺し込まれたみたいだ。

期待させていて……それ？

一瞬、頭の中が真っ白になっていた。自分をもう一人の自分が後ろから見ているような感覚。

掴んだ幸せ。こんなにも自分が絶対的な瞬間の只中にいるのだと思ったのに。

テレサはその中から、落下していく感覚を感じ取っているのだろう。

「でも、私、貴方の事。好きだよ……」

彼女はとても辛そうに言う。

「分かっている……」

分かっているからこそ、どうしようもなく辛い。この苦しみに焼かれながらも、捨て去っていかねばならないものがある。たとえば、人間らしい生き方だとか。

巻き込めない。

ソルティは自分が幸福になるイメージなんて生まれなかった。

ザルファの下へ向かおうと思っている。

デス・ウィング。不吉な奴だ。

間違いなく分かったのは、あの女は歪んでいる。

底知れない程の心の歪さを抱えている事だけは間違いが無い。

あれと関わってはならない、何とかして、二人をあれと引き剥がしたい。

ソルティは動かなければならない。ザルファの為に。

これはどんな感情なのだろうか。

大切なものを守りたい。そんなものなのだろうか。

諦める事を知っている、少年時代の思い出が蘇っては消える。

自分は幸せになる事なんて在り得ない。そんなもの、どうやっても想像する事が出来ない。テレサはとても優しくて純粹だ。

だからこそ、自分では釣り合わないし、分かり合えないのだと思った。

酷く分かっているのは、自分の下に彼女がいてはいけないという事だ。

彼女の幸福を願う余り、自分のような死の耽溺の中で生きている者に寄り添ってはいけない。

テレサにはまともな人生を歩んで、まともな生涯を築いて欲しい。

夢は叶わない。

ソルティは知っていた。

どんな幸福も在り得ない、それも知っていた。

全て、諦めるしか無いのだろう。ならばせめて、少しだけでも自分を好きになってくれた者の為に祈る事が出来るのなら。それはきっと、自分が生まれてきた証なのだろうから。

十

デス・ウィングは何も手を下さない。

ただ、人間の底知れない悪意が見たいだけなのだ。

だからこそ、この両国がどうなっていくのかには非常に興味がある。

くるくると、世界を手中に収めていく感じ。

それにしても、此処は空気が美味しい。極寒の中、空間という空間に愛しさを覚える。

こんなにも、終わっていく絶景が愛しいのは、心の内に強い空洞を秘めているからだ。

十

ソルティは『グール・ブレス』を使った。

空間に彼の力が混ざり始めていく。

此処はデュラスによって処刑された者達の墓場だ。

死人達が墓から蘇っていく。

ソルティは祈っていた、彼らに祝福を与えているのだ。再び、この地上で生き、果たしたかった使命を果たす為に。彼らの望みを叶えるべく、彼は力を使い続ける。

崩れ落ちた顔、剥き出しの骨、全てソルティが愛しく思うものだ。

死は何と美しい事だろう。それに比べて、ありのままの生は何処か歪だ。

最近、絞首台に吊るされた白髪の少年がかたかたと動き出す。

まだ、舌は腐っていない。呻き声が聞こえる。

ソルティは彼に近寄った。

.....ザ、ザル.....ファ.....。

微かだが、声が聞こえてくる。舌がゆらゆらと蠢いている。

「君はザルファを知っているんだね？　じゃあ、奇妙な運命の巡り合わせだ。君が私と会えたのは、きっと何かの神の導きだよ。ザルファはどうなっている？」

ソルティは彼を絞首台から降ろす。そして、喉にそっと触れる。

「ザ、ザルファが。.....デュラスに利用されて。グローリィ.....ヒースの下に向かうらしい。お、俺は駄目だった。力を封じられて.....。畜生、死んでしまった。いや、俺は生きているのか？」

「君は死人だ。身体も腐っていく。そうだね、私なら時間を与える事が出来る。長生きは出来ないけれども、一矢、報いるつもりは無いかい」

少年は頷く。

彼の名前はジルズと言うらしい。

二人はゾンビの大群を引き連れて、デュラスの下へと向かう事にした。

十

此処からは、もうじきヒースの領地だ。

戦いが始まる。自分は戦えるのだろうか。けれども、覚悟を決めるしかない。

デュラスは自身の力を行使している。

可能な限り、敵が此方側に辿り着けないように。

ムシュフシュは黒い森の陰に奇妙なものを見た。

それは、二人の人のように思った。

ムシュフシュは双眼鏡を取り出して、森の辺りを眺める。

高い丘陵に、そいつらは佇んでいた。

まるで、深淵のような瞳で此方を見据えている。

蝶のような翼を持った女と、蛇のように全身に鱗を生やした女だ。

「どうします？ 間違いなく敵だ。それも見つかったている」

「放っておけ、どうせザルファのダーク・クルセイダーで近付けまい」

デュラスはエアデ・ウント・ゲルトも、使っている。

だから、幸運を操作している。

どうせ、何があった処で。此方側には辿り着けないだろう。

女の一人が機関銃のようなものを取り出した。

そして、それをデュラス達の乗っている車に向けて撃ち込んでくる。……しかし。

機関銃は暴発して、その女は酷い火傷を負っていた。

もう一人が、翼を広げて此方側に向かってくる。蝶の翼を広げている。

まるで、踊るように此方側をくるくると回っていた。

「調べられているな、どうしたものか……」

デュラスは思考していた。

しかし、自分が直接、向かって行って。叩きに行くしかない。

幸運を操作する為には、自分が可能な限り、敵陣へと近付いていかなければならないのだ。

十

ワーロックの首が落とされる。

ジルズが持っていた包丁によって、何度も何度も、ワーロックの首を刺突していき、ついに首をもぎ落としたのだった。

彼は歓喜の叫び声を上げる。

そして、いつの間にか取り出した巨大な鋏を掲げる。その鋏は分裂していき、複数の刃物へと変わっていく。

「こいつが……！ こいつが俺の、俺の力を！ 盗んでいやがったんだあああああ！」

彼は怨嗟の涙を流す。どろどろと黒いものが両眼から流れ落ちていった。

ゾンビの大群が城の中で、次々と衛兵や給仕などを食い殺していた。

彼らは憎しみばかりが深かった。

ソルティはグール・ブレスを使う時だけ冷酷になれる。敵は始末しなければならないから。

自分は戦場の戦乙女のようなものだ、死者達の魂を鼓舞して、戦場へと立たせる。

そう、自分は死者達の司令官なのだ。

十

バイオ・ファクトリーのトゥース・ファンガスは二人の前に立ちはだかっていた。

デュラスと。彼女のエアデ・ウント・ゲルトが無い今、宮殿を守るのは彼しかいなかった。

言わば、重大な使命を背負っているという事になる。

彼はガスマスクを身に着けていた。黒に緑が混ざる髪の色。

本来ならば、テロリストが此れ程までの力を有している筈は無かった。

しかし、何かの歯車が狂っている。

自分と同じような、特殊な力を持つ者の存在。

それは、この世界の調和を物の見事に破壊していく。

彼は自分の力に、絶対的な自信を持っていた。破壊力が、その辺りの火薬などの域を、軽く超えているからだ。

彼は毒の胞子を撒いていた。

しかし、敵兵達には何の効力も持っていない。

ファンガスは気付く、相手が生者では無い事に。

異臭が漂っている。土塊の臭いもだ。

朽ち果てた姿の、白髪の少年がいた。

彼は鉄を振り回していた。

ファンガスは焦る。

十

ワーロックの力で封印されていた、特殊な力を持つ者は他にもいる。

彼は力を封じられながらも、時折、デュラスに助言を与え続けていた。

先代の王も、彼からは助言を与えられていた。

力の名前は『プロフェシー』と言うらしい。

それは予言という意味であり、あるいは、その言葉の意味の裏側には断罪というものさえ含んでいるのかもしれない。詳しくは分からない。彼の情報は何処かへと、不気味に消失している。

地下牢の奥底には、書斎のようなものがあつた。

彼はそこでひっそりと暮らしている。

豪勢な食事が彼の下には運ばれてくる。

彼は一度、謀反を起こそうとした。内容はこの国の末路を予言したからだ。それで、先代の王の怒りを買って、地下牢の中に封印されていた。

彼は、この王国の影の守り神のような存在だった。その正体の一切が不明であり、もしかすると、彼自身。自分の存在が何だったのか忘れてしまったのかもしれない。

着物と呼ばれるものを身に着けている。

彼は異国の者らしい。詳細はまるで不明だ。

ぱらり、ぱらりと、本を捲っている。

男は薄らぼんやりを、虚空を見つめて笑う。

彼の名は『シャックス』と言う。

ファンガスは彼に頼み込む事にした。

「助けてくれ。城が化け物達に占領されている、どうすればいいか分からない。デュラス様もムシュフシュ將軍も出向いている。ワーロック殿も殺された、俺は一体、どうすれば」

「ふむ、全部。知っている。未来の事は俺のページに記されているからな」

そう言って、彼はノートを取り出した。

そこには、大まかだが。此れまでの国家の事情が記されていた。

「俺に情報は与えられない。ただ、見えるだけだ。運命の導きというものを」

「見える……？」

「お前も死ぬ。今から、覚悟を決めておけ。それから、俺も近いうちに死ぬ。覚悟は決まっている。この国は崩壊する、それはどうしようも無い事だ」

予言の宣告だ。

「終わりは近いな、それは定められた事なのだろう。どうしようもなくな」

彼の顔は達観しているものの顔だ。

あるいは、物事の道理の行き着く先を見抜いてしまって、諦観しているのかもしれない。

ファンガスは困惑した。

何かが崩れていくような映像が見えた。

「しかし、引き止めよう。もう少し、先に引き伸ばす事は出来る」

ゾンビ達の足音が忍び寄ってくる。

ファンガスは覚悟を決める事にした。

十

宮殿の中で、異臭が撒き散らされている。

ソルティのグール・ブレスによって蘇った死者達は、数十名程度だ。彼らは生前の恨みを媒介にして、その行動原理にしている。

新たに出来た死者達を蘇らす事は出来ない。彼らは此方側の戦力に恨みを重ねて襲ってくるだろうからだ。

「何だろう？ 嫌な予感が」

ソルティは周囲を見渡す。何かが、おかしかった。

気付く。

それは、キノコの胞子のようだった。

ソルティは寒気を覚える。まるで、それは死の宣告のようにも思えた。

爆発音が鳴り響く。

十

無数のネズミや昆虫の死体が、一人の男の身体に纏わり付いていた。

それらは、ぐずぐずに焼け崩れて男の身体から剥がれていく。

ソルティは装甲を覆う事によって、攻撃を防いでいた。

死者達は黒焦げになって、辺りに散乱している。

ソルティは自分の身体に纏った鎧を剥がしていく。

彼は、顔を上げる。

すると、目の前には、ガスマスクを身に付けた男が立っていた。

ソルティは冷や汗を流す。

彼は全身から、無数の胞子を噴出させている。

グール・ブレスとバイオ・ファクトリー。

二人の能力者はお互いを牽制し合っていた。

一步、踏み込みを間違えれば。あっさりと敵に殺される。

男は余裕そうな顔をしていた。

ソルティは焦る。

自分にはそれ程の強さは無い。相手は明らかに攻撃性に特化しているタイプだ。

そして、気付く。

この敵は、相当、強いのだと。幾千もの戦いの経験を得ている。

十

沢山の歩兵達がやってきた。

ザルファの能力が通じない。老いによる攻撃がまるで効果が無い。

デュラスも力を使い続けている、しかし意味をなしていない。

歩兵達は、顔から植物の蔓のようなものが生えていた。

それが、うねうねと伸びている。そして、ぼとぼとと口元から唾液を吐き出していた。

化け物が、と誰かが毒づいた。

デュラスの部下達が、散弾銃を撃ちまくる。しかし、敵は何度、弾丸を浴びせても死なない。不死身の兵隊達だ。

べきり、べきりと、身体が変形していく。

すると、身体の内部が露出していく、メタリックの身体。

肉体が合金によって覆われている。

ムシュフシュが拳銃で狙撃し続ける。しかし、まるでダメージを受けない。

「私は私の浅はかさを呪う……。ヒースの力は一体、何なの？」

「わたくしめが、何とかします。どうか気丈さをお保ちください！」

ムシュフシュは叫んだ。

三名の能力者、これでヒースを倒すつもりでいた。

戦力が不足しているのは否めない。しかし、たとえ数少ない戦力であっても、最大限に行動を起こして戦うしかないのだから。それ以外に道は開けないのだから。

希望という門は狭いものだ、しかし閉ざされてはいない。戦って勝ち取れるものだと信じている。しかしだ。

情報が不足していた。しかし、それでもやはり、戦いを選ばざるを得なかった、それに関して

、何故、迷う必要などあるのだろうか。

決断をしてしまったのは、きっと、あの女に出会ったからだ。

まるで、その存在自体が不吉を感じるもの。隙間に入り込んでくる風のような存在。

デュラスは、今、戦う事を決断してしまった。きっかけは、あの女。

しかし、今が動くべき時なのだと信じて疑わない。

ムシュフシュの能力である『デア・アングリフ』は、拳銃の威力を底上げするものだ。

銃口から発射された鉛弾は、距離が遠ければ遠い程に凶悪な破壊力を発し。巨大なエネルギーへと変わる。

十

ヒースの能力である『テンパランス・リバーズ』。

その禍々しさは、デュラスやザルファの想像力を遥かに超えていた。

襲ってくる兵隊達は、みな、化け物へと変えられた者達ばかりだ。

そのおぞましさに、言い知れぬ感情が込み上げてくる。

人間には。

どうやっても辿り着けない壁というものは存在する。

凶悪な力、そのもの。それに抗う事など出来るのだろうか。

理性を失った人の形をした残骸が、無数に襲ってくる。彼らは、ただのヒースの操り人形としてのみ生かされている。

人間の肉体の再構築。

ヒースは此れまでの文明史を何とも思っていない。

人間という存在自体の遺伝子を破壊して、新たな生物へと変えようとしているのだ。

子供兵達は、ぐちゃぐちゃに崩れながら、這い回っていた。

大脳を潰されても、動き回っている。

何故、人間にこのような事が赦されるのだろうか。

プルシュは彼女の死を望んでいる、毎晩、どうすれば彼女の息の根を止められるのか考えている。

十

三名は宮殿の中へと突入した。

護衛兵達も、先の戦闘で何名か失ったが。まだ十数名残っている。

デュラスは死ぬわけにはいかない。国家の為に。

それでも、自分の力故に先陣を切らなければならない。

突撃隊はデュラスの力の加護に守られている。

ある程度の不運ならば、相手に押し付ける事が可能だ。

デュラス自身が、ヴァーゲンにいる事によって。国家の経済をコントロールしてきた。
それ程までに強力な力なのだ。

少し不安なのは、デュラスがいなくなったヴァーゲンだ。

何名もの衛兵達が守っているとは思うのだが。

「どうせ、死んでしまえばおしまいなんだ？ 考えるだけ無駄だとは思わないか？」

ザルファは嘲笑う。そして、くっくっ、と哄笑を浮かべた。

大量に所有しているナイフを、今にもデュラスやムシュフシュへと向けてきそうだった。
殺人への渴望、それ程までに彼は他者というものを憎んでいる。

十

ヒースの兵隊達は、ザルファのダーク・クルセイダーとムシュフシュのデア・アングリフによって始末されていった。

更に、向かってくる散弾銃や爆弾の攻撃も。デュラスのエアデ・ウント・ゲルトによって、此方に被害が向かう事は無い。

攻防ともに完璧だった。

このまま、彼女を倒さなくてはならない。

彼女が倒れば、何十万、何百万名もの命が救われる筈なのだ。

これは祖国だけの問題ではない、ひょっとすると、グローリィの者達の問題でもあるのかもしれない。

三名はヒースのいるであろう場所へと突入する。

ザルファが兵隊の一人に拷問して聞いた。

顔のパーツを少しずつ、削いでいく。兵隊は、あっさりとして彼の質問に答えた。

ヒースがいる場所、彼女の寝室へと三名は向かっていた。

ムシュフシュが扉を開く。

「いません……」

「別の場所に移ったんだろうな？」

デュラスは嫌な予感がしていた。

ザルファは相変わらず楽しそうだ。まるで、自らの死を望んでいるかのよう。

十

デス・ウィングは指先を広げる。

指先の一つ一つが、煙のように大気へと溶けていく。

彼女は風そのものだった。

その身体は、人間のそれをしていない。

風の漣。彼女は大気と一体化していく。

彼女は大自然と一つになっていた。

凍える吹雪と溶け合っていく。

そして、遠目からヴァーゲンを眺めていた。

早く、この結末が知りたいのだと。心の中で舌なめずりをする。

十

希望は偽りなのかもしれない。

けれども、形の無い想いに縋るしかない。

人々は願っている、この国が幸福であるようにと。

空も感情も、濁り淀んでいる。

ヴァーゲンでは、信仰が広まり始めていた。

人々は口々に聖なる句を誦んじる。

何に祈ればいいのか分からないが、彼らは土着的なものを信じていた。

古き神々に、大いなるものに。

あるいは、もはやそれしか縋るべきものが無いのかもしれない。

何か救われるものなどあるのだろうか。

正しきものなどあるのだろうか、善なるものなど。

階級制度、貧困、そして相反する享楽と繁華街、みな立場によって見える世界が違っている。

みな、徐々に知らされていっている。

自分達の生きている価値観や現実を支えている基盤など、何も無いのだという事を。

灰色の感情が溢れ出している。未来の無さをみな、感じ取っているのだろうか。けれども、それを押し隠したいが為に、貴族達はますます享楽に耽っていた。

連日、社交界では飲みや歌えの騒ぎが続いている。

今の瞬間を楽しみたいのだろう。もしかすると、近い未来には自分や自分達は戦争に巻き込まれて死を向かえているのかもしれないから。

それならば、一時の幸福を味わう事に意味を見い出した方が良いでしょう。

前線で戦う為の兵隊の募集が掛けられている。

貧困層から選ばれて、突撃隊として加えられていく。彼らは日々の食べ物のために、命を賭して、そして死んでいくのだ。

抗いがたい現実、只、時間ばかりが経過していく。

みな、何処かで何故、こんな時代に生まれてしまったのかと、悩み苦しんでいる。

そして、その葛藤のようなものを様々な形で解決させようとしているのだ。

放蕩も鬭争も、同じ事なのだ。希望も諦めも。

全ては同じ現実の上で構築されているもので、その事に対して、どのように向き合っているかという形が違うだけでしかない。

デス・ウィングは街の中を歩いていた。

この動乱は彼女にとって、見世物舞台だった。

人間の負が充満していく。それは彼女にとって、何よりも心地の良いものだ。

十

ヒースはかつて、宰相の娘だった。

そして、腹違いの子供だった。

彼女は最初、自分の力が何なのか分からなかった。自分の指先から植物の蔓のようなものが伸びていく。そして、それは飼っていた仔兎の紅い眼の中へと入っていった。

小兎は、やがて腹や胸が膨れ上がっていき、植物と融合していき。やがて、数日の間に枯れて死んでしまった。その死体は、骨の部位が植物化していた為に、そのまま地面にすぐに分解されていった。

彼女は幼い頃から、何かが歪んでいた。

人々がとてつもなく異質に思えて仕方が無かった。

構造のようなものの破綻が見えて仕方が無かった。

成長したヒースは、グローリィの権力者達を殺害した。

今でも、城の中には。当時の権力者達の剥製が飾られている。それはもはや、人間の姿をしていなかった。

そして、自分の好きなように国家を構築していった。それは人々にとって、とても悪い結果となるものだった。

ヒースはただ、自分にとって魅力的な世界を作りたいだけだった。

無邪気さは未だ、残っている。それは酷い呪詛にも酷似していた。

彼女は子供達を弄ぶ、それは歪にも彼女自身がかつてこの世界から歓迎されなかった子供だった。幼い頃、無視されて育てられてきた。

ヒースは全てが楽しくて仕方が無い。この世界を彼女の望むものとして制圧する事が出来る。軍隊も国民も、今や彼女の操り人形だ。そして、国民は自分達が人間を止めていく事に関して、まるで疑ってすらいない。

このまま、どんどん自分の世界を広げていこうと考えていた。

十

これから死ぬのなら、幸せな夢の中で生きていたい。

何もかもが叶ってしまった夢の中で。

そこは不思議な家庭の情景だった。

ザルファが幸せに笑っていて、テレサと一緒に暖かな山小屋の中に住んでいる。

長閑な自然が広がっている、紅葉だろうか。秋の夕暮れだ。

三人で、カモミールのハーブ・ティーを飲んでいる。テレサはガレットを作って、二人に振舞う。美味しいね、とみんなで笑い合う。

こんなにも手に入れたいものがあるのは、何故なのだろう。

ソルティは左脇腹に、大きな空洞が開いていた。

そして、それは胸の辺りまで深く抉れている。

意識が朦朧としていく、此れまでの記憶が錯綜していく。

後、どのくらいの間、生きているのだろうか。痛みが無い事の方が、むしろ怖い。

どんな希望も叶わない。未来なんて初めから無かったのだから。

色々な人生の中で、自分はどれくらいの幸せを手にしていたのだろうか。

ひょっとすると、テレサと出会った二週間もの間が、とても幸福だったのかもしれない。運命を分かつものは、些細なものだ。選択する事は幾らでも出来た。

ぼんやりと、辺りの空間を眺めている。もう、網膜は何も映らないのかもしれない。

在り得なかった情景ばかりが、両目に流れていく。きっと、これは脳が捏造しているものなのだろう。

ただ、口の中に広がる鉄の味だけは不可思議に強い実体感を持っていた。

もう少しだけ、何か出来たのかもしれない。テレサともっと話しておくべき事は色々、あった筈なのだ。時間は幾らでもあった。彼女の此れまでの事の、彼女が思い描いている理想の事も。彼女の趣味の事も。

けれども、もう遅過ぎるのだろう。

今、自分はどのような感情を持っているのだろうか。ただ、まだ少しだけ生きていたい。まだ、何か出来る事がある筈なのだから。

遣り残した事は幾らでもある筈なのだ。そして、それは解決出来るのだろうか分からない。ただ、確かに今はまだ生きている。

ちろちろと、グール・ブレスの力によって。爆発で焼け爛れたネズミ達が動き回っていた。

意識が朦朧としていく。ぼそぼそっ、と。自分で何かを呟いていた。

十

ファンガスは宮殿の外へと逃げ延びた。

宮殿は半壊している。だが、仕方が無い。もし、いざとなればそこまですべきだとデュラスは言っていた。

彼はガスマスクを取る。

おそらく、顔色はかなり蒼褪めているだろう。

何だか、胸がむかむかとしている。気分も優れない。

考える事を止めてしまいたくなる、込み上げてくる闘争本能の赴くまま、戦い続けていたい。

あのシャックスという男、彼はファンガスが死ぬ事を予言していた。

国家の為に死ぬという事で、命は惜しくはない。

しかし、何故だろうか。何処か不安定になってくる。命を賭ける覚悟はあった、しかし、何処か死に対する恐怖感が少しずつ増していく。

自分の足場が、どんどん崩れていきそうだ。しかし、彼は使命をまっとうしたのだという自尊心で、それを振り払った。

国家に縋った、死ぬ事など微塵も怖くないと思っていた。実際、突撃兵達の名誉の戦死をファンガスは誇らしく感じていた。自分もいつか死ぬ時は誇りと共に死にたいと。

しかし、実際、死ぬという不安に立たされた時、何かが崩れ落ちそうだった。

目の前が崩壊していくような感覚。

十

プルシュはデュラスの宮殿が炎上しているのを見る。

車が幾つも走ってきて、放水が行われていた。

彼は状況を把握しようとしていた。一体、何があったのか。

頭の中で整理していく、おそらくはテロリストらしき者が宮殿を破壊したのだろう。

ふと気付いた。

この世界を支えているものなど、余りにも脆いものでしかないのだと。

「……この街はどうなっているんだ？」

人々の間で、喧騒が広がり始めている。

彼は取り敢えず、状況を視察する事を決め込んだ。

デュラスはどうなったのだろうか。国民達は真剣に不安に思っている筈だ。

このままだと、抑制が効かずに暴動が起きるのではないのだろうか。

プルシュはふと、気付いた。

自分が望んでいた事とは、一体、何だったのだろうか。

ただ、恨みばかりが強くなっていく中で、壊れてしまった国家というものをイメージ出来ない。そもそも、プルシュの住んでいるグローリィと、此処、ヴァーゲンでは体制の状況も違っている。

「何故、テロルが必要なんだ？ 革命が……」

情熱だけで動こうとしてきた。

体制というものは、彼が憎むべき存在でしか在り得なかった。

調べていくと、此処を支配しているデュラスを心から支持している者達は大勢いる。

国家という存在の維持、経済の建て直し。全ての者達を幸福に出来ないかもしれないが、それでも多くの者達の幸福を願っている独裁者。

もし、この体制の中で幸福な者達が大勢いるのならば。その国家はとても素晴らしいものとも言えるのではないだろうか。

人間は何が幸福なのか分からない。そして、何が幸運なのかさえも。

プルシュは苦しむ、虐げられている子供達の姿が頭に浮かんで消えていく。

トラウマとなって、何度もフラッシュバックして行って。自分自身の情念のコントロールが聞かない。人間は存続していいのかさえも疑う事になった理由。

人が生きて、人が死ぬという事、みな、必ず子供だったのだ。

みな、少しずつ年齢を重ねて成長していった。必ず、みな子供だったのだ。

過去があり、今という自分がある。生きてきた人生がある。しかし、ヒースはそれを踏み躪っていった。構築していった理想、構築していった価値観、全ては未来の為だ。

プルシュは惑い、迷う。

デュラスは殺さないし、殺せない。しかし、ヒースが殺害しなければならない。

自分はどのように戦えばいいのか、分からない。

あの革命家の白髪の少年、彼は吊るされていた。

子供は未来に対する贈与だ。この世界に降下した贈り物なのだ。

十

ムシュフシュは焦っていた。

何かがおかしい、それが何なのか分からない。

此処は、何処か霊廟のようにも思えた。

.....完全に、調査が不足していた。これでは、軍人として失格だ。

彼は自分自身の甘さを恥じる。

そして、デュラス達を守る事を真摯に思い直す。

「おや、お前は何処かであったねえ？」

豹の肉体に、白い翼を生やしている女。

おそらくは、ヒースの側近の一人なのだろう。

ザルファは彼女を覚えている、確か、ジュゼットと言っただろうか。

「そういえば、ヒース様に言われたよ。ちゃんと始末しておけってな。危うく、お怒りを買う処だったじゃないか。まったく」

女は彼らを見て、嘲弄していた。

まるで、蟻か何かを捻り潰そうとしているような声音だ。

「さてと、三名って処か。わたしの『ザ・モード』の前では、お前らはゴミのようなものだ。覚

悟を決めて貰おうかしら？」

豹女はふふっ、と笑った。

デュラスは冷たく笑っている。

ザルファも同じだ。

ムシュフシュは、そんな二人を見て。少しだけ、胸にしこりが取れる。

デュラスもザルファも覚悟が決まっている。そういった者達と共に戦える事を誇りに思う。

軍人としての名誉な事なのだ、味方に恵まれるという事は。

「老化はもう、わたしには効かない。今、対策が立てられつつある。わたしはヒース様の実験に成功した。わたしが、ヒース様の力に一番、近い者の一人だ。人間の不老不死をヒース様は齎そうとしている。緑帽子、お前が幾ら力を使った処で、わたしを老いさせても、わたしはまた、細胞が活性化して若返る。お前の能力は本当に下らなかったな」

ジュゼットは絶対の自信を持って述べていく。

彼女は右腕を振り上げようとした。

ムシュフシュは狙撃銃を構えていた。

『デア・アングリフ』で、此処は敵を仕留めるしかない。

デュラスのエアデ・ウント・ゲルトもある。ある程度の幸運と不幸は入れ替える事が出来る筈だ。

しかし、何故か不安が拭い去れない。何かがおかしい。

デュラスとザルファは、それに気が付いていた。

「ムシュフシュ、任せる」

「御意に」

二人は一人の武人を盾にして、残った兵士達と一緒に。部屋の外へと向かった。

ヒースは一体、何処にいるのか。探し当てなければならない。

ザルファはダーク・クルセイダーを使い続けて、デュラスはエアデ・ウント・ゲルトを使い続ける。そして、周りの兵隊達は銃器を持ちながら。辺りを伺っていた。

あのジュゼットの言った不吉な言葉、対策は立てられつつある。

デュラスは自分の力の弱点とは何なのかを、思考している。

分かっていた。

幸運の量には、限界がある。

幾ら力を使い続けたとしても、たとえば、百発の銃弾を撃ち込まれて、流れ弾の災厄を敵の方へと向かわせたとしても。千発、撃ち込まれれば分からない。

幸運とはそういったものなのだ。続かない、統計には解れのようなものが生じてくるからだ。

十

青い悪魔は、雪原の中、彷徨っていた。

ひらひらの少女服の上に、粉雪が舞っている。

ひらり、ひらり。しとり、しとり。

彼は幽玄の闇に佇んでいた。

奇妙な格好をした、女達が集まってきた。

裸体の上から、腰や胸に甲殻を纏った女達。この雪原でもこの姿で適応出来るらしく、皮膚の表面がつるつるに光りながら、常時、高い体温を発している。

彼女達は青い悪魔に危害を加えようとする。

彼女達は、それぞれ変形した肉体を持って、少女服を纏った少年へと襲い掛かる。

青い悪魔は無感情。

それは、雪原に舞い降りた妖精のようでもあった。

その存在自体が、幻想的だ。

瞬時に、女達はバラバラの粉微塵に解体されていく。

「処で、君は何故、僕に付いてくるんだい？」

「さあ？」

死の翼は、とても楽しそうだった。

いつの間にか、彼の隣に佇んでいた。

「迷っているんだけど、どっちがいいと思う？」

「何が？」

「二つの国があって、どちらも私達は簡単に壊す事が可能だ。どちらかを手助けする事が出来る。しかし、私達はどう動くべきなのかな？ 私は望んでいる、人々の不幸を、災厄を。さて、君は何を望んでいる？」

「よく分からないよ、只、僕は辛いかな。自分の力を抑えられない」

「ふふっ、そうだろうな？」

まるで、悪魔の囁きのような声だ。

デス・ウィングは望んでいる、この青い悪魔が何かしてしまう事を。

彼が動く事によって、更なる災厄が訪れるだろう。それがどうしようもなく、楽しみなのだ。

「さてと、何故。私達のような存在は生まれてきたのだろうか？」

「知らない。僕に関わらないでくれないかな？」

「君は沢山、私のコレクションにしたいものを製作してくれる。それって、凄く私にとっては良い事なんだよ。だから、君は私にとって恩寵のようなものだ」

十

無線機が鳴り響いていた、最新型だ。

デュラスはそれを手に取る。

そして、啞然とした。

「何……？ 宮殿が？ それで、ヴァーゲンは、今。どうなっているんだ？」

何があったのか、まるで分からない。

何とかして、頭の中を整理し直す。

全て、道筋を誤ってしまったのかもしれない。

一体、どの選択を取れば正しかったのか。

宮殿はテロリストによって、破壊されたと聞かされた。

それも、本当に見るも無残にだ。

宮殿にいる給仕や兵隊達は、大量に殺されたのだと。

通信相手は、ファンガスだった。デュラスが信頼している能力者の一人だ。

彼は止むを得ず、宮殿を破壊しなければならなかったと告げた。死人達の大群が宮殿の者達を殺し続けて、どうにもならなくなったのだと。

デュラスは心が一瞬、折れそうになる。

テロリストに対する対策は、もっと行うべきだった。均衡は崩れていったのだ。余りにも、グローリーの脅威に力を注ぎ過ぎた為に、どうにもならなくなってしまった。

ファンガスはテロリストを始末し損ねたかもしれないと言った。

彼の者は、死人を操って押し掛けてきたのだと。

余りにも、異常な事態だ。しかし、それを受け入れるしかない。

やはり、デュラスはヴァーゲンに残り続けるべきだった。彼女が鎮座する事によって、国家には幸運が齎されていたからだ。

「やはり.....私は、祖国に戻る。ムシュフシュに伝えておいてくれ」

ザルファは不快にも、笑い転げていた。心の底から、デュラスの不幸が楽しくて仕方が無いのだろう。

デス・ウィングといい、こいつといい。.....デュラスははらわたが煮えくり返りそうになる。しかし、それを強く抑えて気丈に振る舞う事にした。

「私は向かうぞ、ヴァーゲンに。国民の事が心配だ、おそらくは暴動が起こるだろう。それにしてもだ」

デス・ウィングがやってきてからだ。

何かが、崩壊していきそうだった。冷戦状態を崩されていったような。

そう言えば、ザルファは、ヴァーゲンに来る前に、ヒースの兵隊達を大量に殺した。それがあって、ヒースが怒り狂って。支配と領土拡大を決断した可能性が高い。

汚らわしい背徳者ばかりだ。神の怒りに背いた者達。

デュラスはヴァーゲンへと向かう。一体、どうすればいいのか分からなかった。

幸運とは一体、何なのだろうか。拮抗状態は破壊されていく。今よりもより良いものに向かって、人々は突き進んでいく。デュラスもその生き方から抜け出せない。

与えられた選択の中で、思考して。思考し尽くして、勝ち取っていくしかない。

自分の力は、幸運の操作だ。しかし、その力を持ってしても、どうにもならない事象というものが存在する。自分はあまりにも無力なのだと思う。

自分の行動規範とは、一体、何なのだろうか。

プルシュは我ながら、自分は愚かだと思っている。しかし、どうしようもないくらいに、足が先に動いていた。

彼は宮殿の中に入り込んでいた。

黒煙が一面で揺らめいている。

プルシュは眉を顰めていた。

一応、辺りを警戒しながら伺う。

拳銃レムレースを、辺りへ向ける。

彼の『オルビガード』が何処までやれるのか分からない。

大ホールはぼろぼろに、破壊されていた。

所々に、黒焦げの死体が横たわっている。

十

一人の女性的な顔立ちの青年を見つけた。

最初、女だと思ったが、すぐに男だと分かった。

プルシュは彼に近付く。

「お前……、君は？」

「ああ……、私はソルティア。君は……？」

「俺はプルシュ。これはお前がやったんだろう？」

確信。

「どうかな？ 確かに私が突入したよ。私が追い詰めた、でも、敵の方もね。強かった。しかし、何故、私は此処にいて。こんな事をしているのかな？」

プルシュは彼の姿を見て、溜め息を吐いていた。

もう長くは無いのだろう、彼の傷を見れば分かる。

ネズミ達が、彼の下によってきて。大きな傷の孔へと集まっていく。どうやら、止血しようとしているらしい。しかし、留め止めもなく、傷は溢れていく。

「あ、そうだ。ザルファ……黒髪に緑色の帽子の人に会ったら、伝えておいて。何ていうか、ごめんね。って、それからテレサ、彼女の特徴は……」

彼は何事かを、ぼそぼそと呟いていた。

空ろな眼をしている。

十

プルシュは宮殿の中を駆け巡っていた。

まるで、何かに呼び込まれているかのようだった。実際、呼ばれていた、それは後になって知

る事になる。

そう、彼は向かっていたのだ。知らず知らずのうちに。

そこは、暗い地下牢の奥底だった。

まるで、地獄の入り口のような場所だ。

遠くから、亡霊達の呻き声が聞こえてくるかのようだった。

そこには、一人の男が幽閉されていた。

「お前は……？」

「ああ、俺の名前はシャックス。そうだ、お前も死ぬよ」

彼はそう断言する。

「そうだな。人間はいつか必ず死ぬな？」

プルシュは強気で、その奇妙な男に告げる。

その男は、不思議な異国の服を身に纏っていた。

それは、何だ？ と訊ねると、和の国のもので。着流しだ、と答えられた。

男はプルシュと眼を合わせる。

「俺は言うならば、予言師のようなものだな。世界に気流のように流れている、災厄のようなものを“視る”事が出来る。デュラスの幸運を操れる力は、きっと俺の力を完全に抑えていたんだろうな。彼女自身が気付かぬうちに、いわば、俺とデュラスは双生児のようなものなのかもしれない？ 俺は不幸を引き寄せるような力を持っている。……どう説明すればいいかわからないが、不幸というよりも、死なのかな？ 人間は必ず死ぬ、それはお前が言った通りだ。お前は俺の力の本質を見抜いたのかもしれないな」

プルシュは首を横に振る。

「何を言っているのか分からない」

「分からないだろうな、俺も俺の力が何なのか分からない。パンドラの箱のようなものだ。沢山、詰まっている災難の蓋を引き出す力を持っている。……しかし、お前。沢山の子供達に愛でられているんだな？ お前の背後には、無数の子供の死者が見える。見上げたものだな？」

くっくっ、と。陰鬱に男は笑っていた。

その横顔はとても、虚無的に映った。彼には、おそらく何も無いのだろう。

生きている事など、どうだっていいのだろう。

「デュラスは国を離れるべきじゃなかった。先代の君主は、俺を切り札のように使っていた。しかし、デュラスの方が扱い易かったのだろう。デュラスは幸運を招き、俺は他人に破滅を引き寄せる。教えるが、デュラスが君主になれたのは、その力故だな。先代の王は、自分の後釜に、デュラスを呼んで。この国の操作を行わせたかった。デュラスは子供の頃から英才教育を受けさせられて、官僚になり、そしてこの国の君主になった。それは、先代の王が計略した事なんだ。王は探していたんだな？ 俺の力の代わりになる者を。探し続けて、デュラスを見つけ出した。哀れだと思わないか？」

「デュラスがか？」

「この国家そのものだ」

シャックスは暗い笑みを浮かべていた。

全てが、おかしく滑稽だと言わんばかりに。

「蓋は開いた。俺のせいじゃない、デュラスは堰を押さえていたんだ。とっくに、この国は不況が続き、他国によって侵略されていく運命にあった。しかし、彼女の存在がそれを捻じ曲げていた。彼女はこの国を離れるべきじゃなかった。だが、何だろうな？ この国に、やってきてはいけない者が現われた。俺は“視えている”。そいつは、風の姿をしている。そいつが、デュラスに囁いたんだろう。そいつは、本当にこの世界に存在してはいけない者だ。この世界に対して、背教している。何だろうな、言うならば……」

彼は巧く言い現すための言葉を考えていた。

そして、ふと思いついたように言う。

「そうだな、そいつは。何だ、その。“悪意”そのものだ」

声のトーンが強くなる。彼の感情は少しだけ、起伏が激しくなる。

「黒死病みたいに、彼女の悪意は広がっていく。お前も死ぬし、俺も死ぬ。デュラスはどうなのだろうな？ 守られるのかな？ しかし、彼女の死は不安定だ。先ほどは死ぬと思っていたが、やはり薄っすらぼんやりとしてきた。これは一体、何なのかな？」

「分からないな？」

プルシュは当惑していた。

「俺の力、『プロフェシー』の断片を送り付けてやろう。お前に憑いている子供達、それらがお前の使い魔となり。牙となってくれるだろう。お前は復讐を果たすといい。お前は死ぬが、報われる。お前はお前が憎んでいる者の場所へ向かえ。お前が本当に憎悪し、呪詛している者は。この国にはいないんだろう？」

プルシュは頷いた。

シャックスと名乗った男は、自身の力の概要を説明していく。

それは、むしろ彼自身の問題というよりも。むしろ、他人が持っている可能性そのものに対しての問題に触れていくような……。

「お前に会えた事を感謝するよ。お前は俺にとっては、幸運だった」

「そうか。王は、俺を扱い兼ねていたがな？」

シャックスはうわ言のように、王、王、と呟き続ける。まるで、時間が停止しているかのようだった。

プルシュが牢獄の外へと向かう途中、彼は呟いた。

「青色……。何だろうな、青色の死が。お前を包む。お前はそいつと出会うべきだ。出会えば、お前の目的は叶う。せいぜい、青い死を刺激する事だ。それによって、お前は自身の命と引き換えに。お前の意思は達せられる」

ぼそぼそっ、と聞き取り難い声で喋っていた。

「出会う事は無いのかもしれないな……。お前には、その運命は訪れない。しかし、目的は達せられるかもしれないな。最大の悲劇という形で……」

男の言葉を聞き取る者はいない。男は冷たい壁に向かって、語り掛けていた。

十

人間は必ず死ぬという事実。

それは直面する事態だ。

しかし、死なない、という現象はあるのだろう。

それは、ヒースが求めようとしているものだ。

死なない肉体、不条理な存在。この世界の秩序に抗う存在。

彼女が求めているものは、多くの者達の存在を否定する行為なのだろう。

それにしても、思うのは。死は他人の死でしかない。

人間は自分自身の死と対面する事が出来るのだろうか。

圧倒的なまでの支配、彼女はそれを望んでいる。この世界を踏み躪るという事。そうする事によって、彼女は万能感を手にする事が出来るのだろう。

プルシュは歩みを進める、グローリィへと向かっていく。

必ず、出会えるとあの不気味なシャックスという男は告げていた。

災厄は引き寄せてやったのだと。

蓋は開かれたのだと。

十

青い悪魔は自分の存在の理由が分からない。

ただ、緩やかに思考の流れを止めていたい。

ふと、背後から囁き声が聞こえた。

「デス・ウィングさんは怖いねえ。彼女は死ねないんだねえ。そして、君は殺すしか無いんだねえ」

青い悪魔は、そいつが何なのか分からなかった。

ただ、怖気がして。そいつに力を発動させてみた。

無数のナイフが空間を舞っていく。

「私の名前は“他人の死”。それ以下でもそれ以上でも無い。私を殺す事は出来ないし、そして、私も君に深く干渉するつもりは無いよ。私は言ってみれば、“概念”みたいなものかなあ。誰も彼もが、自分の死を体験する事は無く。全ては他者の死なんだからね」

「言っている意味が分からないよ」

何処にも無いようなドレスを纏った美少年と、少女服を纏った人形のような顔の少年は。お互いを見つめていた。

二人共、性別の向こう側にいる。男では無い男。

そして、二人共、死という存在そのものだった。

「デス・ウィングさんは、君の力を見たがっているよ。君に興味を湧いたみたいだねえ。彼女はずっと前から、君の存在を知っていたみたいだねえ。会えた事は偶然ではなく、必然なのだよ。君が力を使う事を見たいんだって、とても素敵な見世物舞台になるだろうって」

青い悪魔は、強い嫌悪感を覚えていた。

自分は酷く嫌われている。

自分で自分が嫌いだ。

しかし、そのような自分の特性を引きずり出そうとする存在。それはとてつもなく不気味で、悪意に満ちていて。この世界を嘲弄しているかのようだ。

青い悪魔は自分が生まれてきた理由について、苦しむ。

生きているだけで、他人を殺害せずにはいられない自分の存在と、持て余し過ぎている大き過ぎる力。

どうすれば、この強大なまでの殺人そのものを体現した『クラシック・ホラー』という能力をコントロール出来るのだろうか。

分からない。

何も、分からない。

持て余している自分自身。どうしようもない。

デュラスは部下に言って、車を走らせていた。

装甲車だ。別部隊が、既にグローリーの領地に踏み込んでおり、デュラスを乗せてくれた。

グローリーの街は離れていく。ファンガスから、引き続き、ヴァーゲンの状況を中継して貰っている。

此処から、ヴァーゲンまでは。大体、半日くらいは掛かるだろう。

ザルファは残ると言った。

彼の行動を止める理由も術も無かった。

彼は彼なりの目的があって、ヒースを倒したがっているみたいだった。その意思是尊重しようと思う。もはや、少しずつ分かり合えてきている仲になっていた。

装甲車は走り続ける。

数時間程、経過した頃だろうか。

ぽつり、ぽつりと雪が降ってきた。

デュラスは陰鬱そうな顔になる。

「やはりな……」

自分の幸運操作によって、何とか難を逃れて。安全なルートを進んでいたが、ついに見つかってしまったみたいだ。幸運にも限界がある。それはどうしようもない事だ。

風を切るような音が聞こえてくる。

そいつは、トカゲのような鱗を身に纏った女だった。

まるで、耳元に声が響き渡ってくるかのようだ。

「あれえー、あなた。何処かで見た事があるような顔しているなあ？」

デュラスは無視を決め込む事にした。

しかし、他の者達はそうはいかなかった。

装甲車は大きく割り貫かれている。そして、乗っていた護衛兵の何名かは血塗れになっていた。首を挽がれて殺されたのだ。

「ああ、そうそう。私、竜とのハイブリッドだよ。ヒース様の親衛隊の一人なんだけどさ。確か、あなたってあれだよねえ？ あなた殺せば、簡単にヒース様はあなたの国を手に入れられるのよねえ？」

デュラスは運転手に、とにかく、ヴァーゲンへ向かうように告げた。

この敵は、正直、かなりやっかいだった。

肌で感じていた。かなりの強敵であるのだと。

頼りのムシュフシュがない。

ヒースは能力者を作り続けているという事でもある。ヴァーゲンにいる能力者の数は限られている、国家中を探しても。中々、見つからなかった。

ファンガスやムシュフシュは、かなり優秀な能力者だ。

かなり、戦力は分断されている事になる。

だが。

「私一人じゃない。お前はまだ、私に触れられない」

デュラスは冷たく微笑んだ。

強い憐れみさえ、浮かべている。

蛇の鱗を纏い、蝙蝠の翼を生やした女は不思議そうな顔をしていた。

「お前は私の能力を舐め過ぎだ。お前が此処に辿り着けたという事は、それだけで凄い事だ。さてと、幸運の残量は何処まで残っているのだろうか。余り、私を舐めるな、ヒースに伝えておけ。もっとも、お前が生きていたらの話だが」

蝙蝠の翼を生やした女は、ふふん、と嘲る。

そして、いつの間にか。右手には巨大な戦斧を手にしていた。

これによって、装甲車の一部を破壊したのだろう。

「さてと、死んで貰おうか」

女は加虐的な笑みを浮かべる。

デュラスは部下達を眺める。

彼らの顔色は蒼褪めていた。

「指揮を出す。銃を強く持て、敵の眉間を狙え」

凜然とした声音、デュラスの声を聞いて。部下達は、言われた通りに銃を構えて。女へと向ける。

「馬鹿かな？ 私はヒース様の親衛隊隊長のヴィヴィド。私は強いよ？ そんなおもちゃのピストルごときじゃ私の皮膚は通らない」

「やってみなければ分からない」

ヴィヴィドは戦斧を振り下ろす。

デュラスの部下達が銃の引き金を引くのと、同時だった。

刹那。

銃の弾は、ヴィヴィドの両眼へと入り込んでいく。

戦斧は、空回りしていた。

「ああああ、畜生、畜生。けどな？ そんな鉛弾ごときじゃ……」

「たまに“視える”んだ。理由は分からない。でも、もう終わっている。お前は終わっているんだ、諦めろ」

ヴィヴィドは再び、巨大な斧を振り下ろす。

デュラスの部下達は焦っていた。

女の両眼からは、真っ赤な血の涙が溢れていた。

脳に達していない。一時的な失明くらいは引き起こしたのかもしれないが、それでも倒せていない。どうにもならない敵だった。

ヒースの力を十分に与えられた存在、それは鋼のような肉体に、ゴムのような弾力性を帯びている。そして、ありとあらゆる生物の特性を備えていっている。

ヴィヴィドは特に、ヒースの恩寵を強力に受けていた。ヒースの片腕とも言える存在でさえあった。

しかし。

それは、一体。何なのか分からなかった。

デュラスは引き寄せたのだろう、その場所に。

それは彼女の力故の現象だった。本来ならば、そういった運命など有り得なかった。

しかし、デュラスは運命を捻じ曲げた。

たとえ、どれだけの力を持っていても、運命には抗えない。

ヴィヴィドの首が勢いよく飛んでいく。

彼女の振るった斧は、装甲車に深々と突き刺さっていた。

彼女の胴は、勢いよく地面を転がっていった。

「な、何が……」

部下の一人が訊ねる。

「知らん。どういう自然現象なのか、災厄なのか分からないが。これは必然としてこうなった。

私の知った事では無い。ただ、運が悪かったんだろう」

デュラスは淡々と告げた。

部下の一人は、はあっ、と頷いた。

十

青い悪魔は、他人の死をバラバラにしようとして。クラシック・ホラーを使った。

その時に出現したナイフの一本が、辺り一面にいる。彼を傷付ける可能性のある、殺意ある者の下へと飛んでいった。

偶然、デュラスの車は。青い悪魔がいる辺りを走っていた。

いわば、ヴィヴィドは。青い悪魔の攻撃の流れ弾に当たって死んだのだった。

圧倒的な不運を、デュラスはヴィヴィドに引き寄せた。

運命も、運勢も。巡り合いも、彼女の力によって支配されているのだから。

十

プルシュはグローリィへと戻っていた。

シャックスという男は言っていた。ヒースは倒せるだろうと。

しかし、災厄とは一体、何なのだろうか。正直、分からない。

運命的なものなのだろうか。

人は、何かに向かっていくのかもしれない。それは標のようなものだ。おそらくは、あの男は、そのようなものへと導いていくのではあるまいか。

自分の家へと戻った。

子供達の剥製が飾られている。

此処は、プルシュが背負った世界だ。

一人、一人を丁寧に仕上げている。端正込めて、愛情を練り込んでいて。
此処は、美しい地下墓所なのだ。絶えず聖歌が響き渡っているかのようでもあった。
蔽かだ。プルシュは自分のやってきた事を誇りにさえ思う。
この近くには、汚染された工場がある。そこへ向かおうと思っている。
どうにかして、工場にいる者達を解放してやりたい。
そこでは、生きながらにして人体がどんどん腐っていくかのような状況なのだと言う。
ざわざわと、周りでは。何かが歩き出していた。
プルシュは彼らは何なのか分かっている。徐々に、それは実体化してきている。
それは、シャックスの力なのか。あるいは、プルシュ自身が持っていた力なのかは分からない。
シャックスは災厄を与えたと言った。それはもしかすると、プルシュの潜在的に持っている力を引きずり出したのかもしれない。
あるいは、成長してしまったかのような。
人間は死へと向かっていっている。
シャックスの力は、おそらくはそれを早めるものなのかもしれない。
その死へと向かう経過の中で、自分の能力というものは成長していくのだろう。
シャックスは、それを加速させた。
プルシュはそのような解釈をしている。
自分の運命は決まっているのだろうか。命の鐘の音は早まっていくのだろうか。
しかし、自分が死ぬ前に、必ずやるべき事がある。
ヒースを倒さなければならない。
しかし、その前に。なすべき事があるのだ。

十

工場の中、色々な製品が製造されていっている。
主に日用的な雑貨品などだが、奥に進むに連れて。戦場において必要な兵器の部品などが多くなっている。
此処の労働者達は、子供ばかりだ。
子供が安い労働力として使われている。
彼らの手は凍傷でぼろぼろで、呼吸器も痛み、肺病をこじらせていた。みな、寿命は長くないだろう。成人する前に、大多数の者達が死んでいくのだろう。
何名もの大人達が、子供をこき使って。銃器類や爆弾製作などを行わせている。
此処から流れる廃液によって、皮膚病を患っている者達も数多く出ている。
プルシュは工場に侵入した後、どうしてやろうかと考えていた。
どんどん、透明な子供達が彼の周りに集まってきていた。
彼に寄り添っているのだ。縋っているととってもいい。
ふと、悪寒に襲われた。全身が壊されていくような感じ。きっと、気の迷いだろう。自分自身

を奮い立たせる。

オルビガードを全力で使おうと思う。

彼は自分の力を、空気中の気体を圧縮して飛ばすものだと考えていた。

しかし、もしかしたら違うのかもしれない。

彼の持っている力、それは空間中に遍くあるエネルギーのようなものを吐き出す事が出来るのではあるまいか。もし仮に幽霊というものが存在するとしたら。それはエネルギーなのだろうか？

分からない。

とにかく、彼はオルビガードを発動させていた。

レムレースによって、子供を指導と称して実質、虐待を加えている工員の大人の一人を狙撃していく。彼らのうちの一人の頭が吹き飛んでいく。

彼はもう、行すべき事は決まっていた。

十

ザルファは一人、くっくっと笑っていた。

取り残されてしまった。

しかも、それは彼が望んでいた事だ。

ダーク・クルセイダーが効かない敵ばかりが出現している。

どうしようもない、自分自身に対する無力感。

彼は城の中を彷徨い続ける。

たまに、敵が現われる。

あっという間に、毒を仕込んだナイフを。首に突き立てる。

不死身の化け物も、このナイフによってしばらくの間、のたうち回っていた。

そうやって、時折、身を潜めながら。もう、何時間も経っていた。

雪が降り始めている。

空は満月だ。

彼は思わず、服を脱ぎたくなる。背中に月光を当てたいから。

「はははっ、俺はイカれているな？」

しばらく歩いた処だろうか。

部屋を見つけた。

扉を開く。

そこには、一人の女が佇んでいた。

ザルファはけたけたと笑った。

背中に彫られた逆十字が疼いている。過去の記憶が明滅しては消えた。

そいつは、何処か姉の面影を持っていた。きっと、気のせいだろう。

女の両眼は猫の眼のように、光っている。

「きゃはははあああ、やあ、よく来たね。君は？」

「俺か。俺はザルファ、お前はあれだろ？」

彼はくっくっ、と笑う。

二人共、笑い続ける。

「そう、ボクはヒース。この国の王様だよ？」

「そうか、すごえな。最高じゃねえか」

二人は、高らかに哄笑の声を上げる。

二人共、狂っていた。

狂っている故に、どうしようもなく分かり合えるようで、分かり合えなかった。

ザルファは冷たく告げる。

「お前、殺してやるよ。まあ、何だ。気に食わないからな」

「そう？ ボクは強いよ？」

ほぼ裸体の女は笑い転げる。

ダーク・クルセイダー。

テンパランス・リバーズ。

この世界の均衡や調和を破壊していくもの。

「お前はナイフだけで殺す。仕方が無いからな？」

「君は随分と自身満々なんだねええ？」

「自信というよりも、てめえが脆く見える。それだけだ」

ザルファの動きは早かった。

ヒースは呆然としていた。

彼女の右肩に、深々とナイフが突き立てられている。

しばらくして、肉体に痛みが伝達していく。

女はきょとん、としていた。

この部屋は、天蓋に無数の植物がシャンデリアのように生えていた。

どれも、奇形的だった。珊瑚のようにも見えて、成っている実が宝石のようにも見えた。

そして、それは遠目には一見、美しいのだが。よくよく眺めていると、奇怪で不気味なオブジェである事に気付く。まるで、自然界の調和を歪に捻じ曲げて作り上げたような装飾品。

ヒースは脇腹を眺める。

脇腹に深く、ナイフが刺さっていた。

彼女は気付く。そして、馬鹿馬鹿しい事実が分かった。

全身から力が失われていっている。

「何で、分かったの？」

「何となく……………」

緑衣の男は彼女を見下ろしていた。

ヒースは地面に足を下ろす。

かなり、顔色が悪かった。

「お前、かなり消耗しているな？ 分かるよ。俺も無力だから。お前のその力なんだ……」

「コントロールしているんだけどねえ。部下達に力を与え続けていたら、ボクが弱くなっていた。かなり、力を消耗しているよ。もっとボクは強い筈だったんだけどね」

「デュラスの力の影響だろうな？ お前の不運ってのは。お前は自身の力に溺れ過ぎている事に気付かなかった。今、身体が弱っているだろ？ 戦力を分断させ過ぎたな？」

ザルファの両眼は冷たい。見下すようでもあり、哀れむようもでもあり。

そこには、もはや一抹の嫌悪も無かった。

「……………姉も。このように死んだ。俺を馬鹿にし過ぎていた」

呆気ない。

ザルファは詰まらなそうな顔をする。

「俺の勝ちか？」

「処が違うんだなあ？」

彼女はひひっ、と笑っていた。

「ボクは元々の身体を捨てるつもりでいた。もう、この身体はいらない。弱ってしまったから。テンパランス・リバーズはパワー・アップしなければならない。ボクは他人に力を注ぎ過ぎた。でも、手は打ってある。あんたがこの部屋に来てしまった時から、あんたは終わっている」

天蓋の植物はぐるぐると蠢いていた。

そして、勢いよく刃物のようになって。

ザルファの胸元を深く、切り付けていた。

彼は倒れる。

「そういう事かよ」

「ひひっ、そういう事だよ。ボクの本体はこの部屋自体に移した。だから、この人間の形をしている身体は抜け殻のようなものなんだ。だから……」

「てめえは、俺様を舐め過ぎだ」

ザルファは嘲笑する。

ヒースは口から泡を吐いていた。

そして、うくっ、うくっ、と鼻や眼から血を流していた。

体内が破壊されている。呼吸するのも、精一杯だ。

「俺の毒ナイフは、俺の血を混ぜている。闇十字を背負った瞬間から、俺は呪われている。ははっ、さてと」

彼は周囲を見渡した。

「俺は怖くない。俺には悪魔が憑いているから、そうだ。青い悪魔って知っているか？」

彼の言葉はもはや、うわ言のようになっていた。

「俺のダーク・クルセイダーには、こんな使い方もある。もし、力を行使する時に。大気の色を多少、変質させる事も出来るんだな。そろそろ、デュラスはこの辺りから離れた頃か？」

部屋の中に、第三者が入ってくる。

ジュゼットだった。

彼はムシュフシュの首を抱えていた。

そして、這い蹲る二人を眺めて、呆然としていた。

「あ、あの。ヒース様、敵を討ち取ったんですけど、その」

「何だい？」

ヒースはにっこりと笑う。

ジュゼットの姿は悲惨なものだった。

ムシュフシュの攻撃によって、左側頭部が破壊されて。眼球が垂れ下がっていた。胸から腹に掛けて孔が開いている。そして、全身が焼け爛れていた。

デア・アングリフの猛攻によって、機械と一体化させるザ・モードも、かなりの苦戦を強いられたみたいだった。

「え、えと。治して欲しいです、その」

「君、生命の残量がもう、無いんだねえ。ごめんねえ、ボクも今、ぼろぼろでさ。何をされたのか知らないけど」

「そうですか」

ジュゼットは崩れ落ちる。

そして、そのまま絶命した。

ザルファは哄笑を続けていた。

「何がそんなに可笑しいの？」

ヒースは忌々しそうに彼を見据える。

「青い悪魔と、俺は友達なんだ。俺の闇十字を使って。青い空間のようなものが出来たら、それは俺の危機って事だ。俺はつねに悪魔に祝福されて、加護を受けていたんだな？ それは余裕だろう？」

「はははは、ひひっ、何を言いたいのか分からない」

十

青い悪魔、ブラッド・フォースは遠くを眺めていた。

それは風のように見えた。

彼はその力故か、不可思議にも。遠くの景色が見えた。

遠くにある大きな城、そこで、もやもやとしたサインのようなものが見える。

いつだったか、彼と出会ったのは。

何故だったのか、少しだけ分かり合えた気がしたのは。

一晩中、語り明かした。生い立ちの事、苦しんでいる事。

もしかすると、初めて出来た友人なのかもしれない。

「ザルファ……………」

気付けば、そこに向かっていた。

彼といつか話した記憶が鮮明に蘇ってくる。

きっと、あれが友達というものなのだろう。

孤独の中で生きてきた自分。誰にも分かって貰えずに。ただ、自己否定の中で生きてきた。ザルファとの会話、まるで自分自身の存在が赦されたような気分。

彼に何かして上げられる事は無いのだろうか。

ブラッドは決意する。

両足にナイフが生える。

そして、それは音の壁を超えて。空間という空間を切断しながら、その場所へと向かっていた

。

そこは、城だった。

動物や植物、あるいは機械と混ざった人々が大量にいた。

ブラッドは彼らにまるで興味を示さなかった。

十

ヒースは、そいつの姿を見た。

それは、青い少女服を身に纏った少年だった。

そうか、何処かで見た記憶の残滓だ。子供の頃に読んだ、不思議の国のアリスのよう。

まるで、絵本の中からそのまま抜け出してきたかのような。

「ブラッド。また、会ったね」

「ザルファ、そうだね。どうしたの？」

「俺の人生は何だったんだって思ってな？ そうだ、お前、こいつら。全員、殺してくれない？」

」

部屋の中に、ヒースの兵隊達が集まってきた。

彼らは機械と混合されている。

彼らは銃器を持って、ブラッドに鉛弾を撃ち込んでいく。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

みな、理解するのが遅れた。何をしているのか、まるで分からなかったからだ。

奇妙な現象が起きていた。

無数の銃弾が、空気中に静止していた。

兵隊達は、ぽかん、としたような顔になっていた。

まるで、滑稽な切り絵のようだった。

そこには、何も無かったかのように。初めから、全てのベクトルを削ぎ落としていくかのように。他人の敵意というものを否定していく意思そのもの。

他人の殺意に対する恐怖、それによってブラッドの力は培われている。

鉛弾は徐々に変形していく、それは尖った刃物の形へと変わっていく。

「僕のクラシック・ホラーは鉄分を媒介にナイフを作るんだ」

それは、余りにも呆気なかった。

ヒースの兵隊達は、肉体の半分が機械で出来ている。

全員の肉体が次々と変形していく。身体中から刃物が生えていた。

彼らの肉体はバラバラになって、細切れになっていく。

続いて、彼らの悲鳴を聞いて。今度は、半植物の者達がやってきた。

ブラッドは、空中に固定していた。銃弾を変形させて作ったナイフを、彼らへと向けた。

首が飛んでいく。

しゅるしゅる、と。根っこのようなものが傷口から生え出してくるが、再び、刃が戻ってきて。兵隊達を切り刻んでいく。まるで、野菜でも切り刻むよう。

青い悪魔はいつの間にか、傘を差していた。

血液が服にこびり付かないように。

くるくる、と。ナイフは回転しながら、兵隊達を細かく、細かく、小さな部品へと変えていく。

ヒースは、それを見て。完全に絶句していた。

まるで、話にならない程の、圧倒的な暴力。いや、その存在自体が殺人そのもの。

ザルファはくっくっ、と笑っている。

「ねえ、ザルファ。君、とっても苦しそうだよ？」

「そうだなあ、血が流れ過ぎた。長く無いかもなあ？」

「僕が悲しむよ……」

「じゃあ、頼まれてくれるか？」

「いいよ」

「鉄の処女って知っているか？」

「何だい？ それは」

「ほら。あるだろ、中世の拷問器具。巨大な女を象って、中身は大量の針を生やしている奴だ」

「ああ、思い出したよ。それがどうしたの？」

「お前の力で、此処の国の奴ら。全員、それに變えてやれ」

青い悪魔は、にっこりと笑った。

そこには、一点の狂気も無かった。

ただ、親しい友人の役に立ちたいという純粋な感情そのもので。

初めて、自分の力に意味を感じているかのような。

「此処にいる奴ら、人じゃないだろ？ そんな連中を生かしていいのかなあ？」

「そうだね、そう思うよ」

「初めて、お前は人を救えるんだ。人類の未来の為にな。終わらせてやれよ」

「分かった」

ヒースの顔に絶望の表情が浮かんでいた。

そして、二人は彼女の存在を無視していた。

ヒースはずぶずぶと、地面へと潜っていく。早く、この場から逃れなければならなかった。

ヒースは、片目を切り離して。城の外へと向かわせた。

そして、城全体を眺める。

それは、酷い惨状だった。

ヒースが作り上げていった、国家。それが総崩れに崩れていく。

国民達が、次々と。滑稽な姿の人形へと変えられていく。大きな口を開いたワニのように、ぱっくりと。それらは姿を現す。

人々は、地面の鉄分によって作り上げられた鉄の処女へと飲み込まれていく。

国民が次々と、鉄の処女へと変えられていく。それは伝染病のように広がっていく。

馬鹿な人形劇のようだった。

ヒースは、人形芝居をしていたのだと思う。人が人を止めていくという過程を陳列していった。それが、進化の誕生なのだと。

しかし、圧倒的で絶対的なまでの力を振るう怪物の前では、無力そのものだった。

青い悪魔、ブラッド・フォース。

そいつは、存在してはいけない者だった。

ただ、殺戮そのもの。災害そのものを具現化したかのような存在だ。

ヒースの国民達は、泣き叫んでいた。しかし、無情にもクラシック・ホラーの攻撃は止みはしない。ザルファはただただ、哄笑を続けていた。楽しくって仕方が無いといった感じだ。

人々は、踊り狂って死んでいく。死の舞踏だ。黒死病のように、絶対的な死が広がっていく。何十万、何百万名もの。グローリィの住民達が殺されていく。

死は蔓延していく。それは、蹄の音を鳴らす馬のようだった。

死神が楽器を鳴らすように、しゅんしゅん、と嫌な音が鳴り止まない。

十

テレサは別世界へと投げ出されていた。

街を歩けば、沢山の異形の者達が歩いている。

沢山の腕達が路地裏から這い出してきたり。区域の一角自体が口や舌のようになっていたり。ぞろぞろと、得体の知れない黒いものが這い回っていたり。人間がどろどろに溶けていたり。街を歩けば、正気というものが何も無かった。

完全なまでに、別の世界へと飛ばされていた。テレサが幼少時から見ていたもの。

きっと、それは彼女の持つ根源的な不安が実体と化したものなのだろう。

水月だけが、彼女と一緒に幻覚を共有出来た。ひょっとすると、水月は彼女の視える世界に話を合わせてくれていただけなのかもしれない。

あのバザール以来、足元が覚束ない。現実という基盤は完全に崩れしまったのだろう。

それは実体として存在しているのか、それとも彼女の網膜や脳が不安を感じた時に見せる幻覚なのか。今となっては分からない。

テレサは街を歩いていた。

そして、沢山の顔の無い狼達の群れの辺りに近付いていく。

狼達は。じゅるじゅる、と。真っ暗な深淵の顔の辺りから、蛆なのかヒルなのか分からない生き物を吐き出していた。彼らはテレサの方を見つける。

彼らはいつも、テレサと仲良くなりたがっていた。テレサを彼らの世界の住民にしたいのだと、思っている。いつも、そう感じていた。

恐怖、不安、そういったものが強く込み上げてくる。

テレサは全身が痛かった。何かで打ち付けられている。

気が付けば、意識が遠退いていく。

十

デス・ウィングは愉悦を浮かべながら、ヴァーゲンを見ていた。

堰を切ったように、貧困層の暴動が行われている。テロルのせいで、彼らの抑圧していた感情に火が灯ったのだ。みな、狂乱の熱気を帯びていた。街中では、強盗などが多発している。彼らは戦争に対する不安と、体制に対する不安が一緒くたになって、どうしようもない程の暴徒と化している。正気なものも、狂気へと落ちていく。

革命の火が幕を開けた瞬間だった。

まるで、積み木が崩れるように国家というものが瓦解していく。

こんなにも、人間の心は脆いものなのだ。彼女は楽しく笑う。

デス・ウィングは腹を抱えて、笑い出す。この見世物舞台がどうしようもなく素晴らしい。

そして、それらを一通り眺めると。借りている宿へと向かった。

その途中。

見知った一人の少女を見つけた。

「ふふっ、おや？」

一緒に旅をしていた少女だ。二十になるかならないかの少女。

彼女は暴徒達によって、頭を割られて血を流していた。

近付いてみる。

息をしていなかった。

デス・ウィングは彼女を起こす。

両手に血が滴り落ちていく。

彼女はどうやら、金品を奪われたみたいだった。財布が無い。

デス・ウィングは彼女の頭を撫でる。

「ああ……………。位置が悪いな。相当、殴られたんだな？ 抵抗したろうね」

デス・ウィングは彼女を背負った。

そして、借りていた宿へと戻る。

寝台は二つ、そっと少女を横にする。

彼女の荷物は拾ってやった。これだけは奇跡的に残っていた。

それは、花嫁が被る、花の冠だった。丁寧な作りにあしらわれたブーケだ。

どうやら、指輪も二つ買ったみたいだった。

デス・ウィングは備え付けられているサモワールを手にする。この辺りで使われている湯沸かし器だ。彼女はお茶の葉を取り出して、カップにお湯を注いでいく。

「何か見られたかな？ お嬢さん」

デス・ウィングは二人分のお茶を注いでいた。

そして、窓を見下ろす。

階下で騒音がした、別の客達が言い争っているのだろう。

その騒音に生じて、宿の中に暴徒が入ってくる。彼らは手に手に刃物を持って、切り合っていた。

やがて、階段を登る音が響く。

部屋のドアが開けられる、鍵を閉めてなかったからだ。

「おい、お前。金を出せよ」

男が三名。みな、憔悴したような顔をしている。

「ああ、お前。美人だな……」

別の男が言った。酒に酔い潰れているらしい、酷く赤ら顔だ。

デス・ウィングは有無を言わせなかった。

指先を振るう。

彼女は滅多に力を使わない。無意味だし、面倒臭いからだ。

しかし、彼女は少しだけ微妙そうな顔をしていた。

空間が引き裂かれるように、緩やかな旋風が巻き起こったかと思うと。

男達は一瞬にして、バラバラ死体へと変わっていった。そして、肉体が崩れ、それが地面に落ちる間もなく。開かれた窓を通して、血液の一滴さえも、床に落とす事が出来ずに。外へと排斥されていった。

「今から、音楽を流そうとされていて。すみません。またの機会にお越し下さいね。そうだ、モーツァルトがいい。この部屋にはレコードがあった筈」

宿の中は、彼女の荷物でいっぱいだった。

レコードは揃っている。

彼女は眼を閉じるテレサに語り掛ける。

「シェイクスピアの悲劇は好きなんですよ。破綻が破綻を生んで、権謀術数や嫉妬の果てに破滅していく。もう笑ってしまうくらいに、物の見事に、みんな不幸になっていくんですよ？ 此処まで行うのかというくらいに上出来に。だから、私はシェイクスピアの作品が好きなのです。とてもよく出来ている。公演されている劇は何度も、見に行きました。色褪せない劇作家なのです」

彼女はお茶を口にする。

窓の外は喧騒に満ちている。

デス・ウィングは長閑に外の景色を見ていた。

雪が降り積もる。窓から見える街頭の白樺。拳銃の発砲の音。

「安らかですね。今日も素敵な一日でした。こんな日は聖書を読んで過ごしたい。様々な国の宗教書を黙読しながら。……………」

テレサの口元は、笑っているかのようだった。

十

デュラスは、ファンガスと会う。

ワーロックは死亡している事を聞かされた。

それから、シャックスという男と話したという事も聞かされた。

彼女は崩壊している宮殿へと向かっていく。見るも無残だ。

「わたしはとんでもない事を……」

「お前はなすべき事をした。違うか？」

ファンガスはぐうっ、と蹲った。

デュラスは宮殿へと向かう階段を登っていく。

そして、目立つ場所から国民達を見下ろした。

彼女の国民達は、彼女の存在に気付く。

デュラスは声高に叫んだ。

「聞け！ 今、この国は動乱に巻き込まれている。お前達は私を殺せば、幸福になれると思っている。だが、違う。この国は、ヒースのグローリィによって占領されようとしている。お前達が争っている間にも、刻一刻とだ。お前達は自らを破滅へと追いやっているのだぞ？ お前達は自らの命の火を消し去ろうとしている。聞くがいい！ このままでは、この祖国は滅び落ちる。お前達は奴隷になるか死ぬかだ。お前達の家族も例外無くだ、お前達は何故、思考しない？ 繰り返すが、私や政府官僚を殺した処で無駄だ。どうにもならないのだぞ！」

デュラスは叫んだ。

国民達は硬直していた。

デュラスは階段を下りていく。

そして、腰元から長刀を取り出した。

「本当に私を殺してみるか？ どうなるか見てみたいのか？」

デュラスはみなを睨んでいた。

十

ヒースはグローリィから離れていた。

その網膜には、絶望が焼き付いていた。

此れまで積み上げてきた国家が脆くも崩れ去っていく。まるで、砂の城のようだ。漣に打たれて、簡単に崩れ去り、波に溶けていくかのようで。

グローリィの国民がある者はバラバラ死体へと変わり、ある者は鉄の処女へと変わっていく。

無数の刃の雨が国家を襲っていた。

化け物が、とヒースは悪態を付いた。

荒野の只中で、彼女は膝を折る。

天空の星々は煌いていた。絶対的な無力が、精神を支配していた。

このまま死んでしまおうか、そんな事が頭に過ぎる。しかし.....

ヒースはくっくっ、と笑う。

動物や植物、機械は自殺しない。自殺するのは人間だけだ。

ヒースは力を解放しようと思った。

目指す場所は、グローリィだ。

自分の力の全てを撒き散らしていき、自分の墓標を積み上げたい。

ヒースは狂気しかない。正常な人間との価値観があまりにも違い過ぎる。しかしそれは、彼女の幼い頃からの世界に対する違和感の延長線上だったのか。今ではもう、分からない。

十

工場の中で。

プルシュは息絶える事になった。

あの、シャックスという男。

彼が齎したもの。

彼の力、オルビガードが何であったのか、彼は思い知らされる。

子供達は、彼を慕っていたのだろうか。

死体は埋めるものであり、残すべきものでは無かったのかもしれない。

子供達の霊は、いつの間にか肉体を持ったように実体化していきプルシュの皮膚を食い破り始めていた。

工員の大人達を片っ端から、殺していく中で。プルシュの力は成長していった。しかし、それは成長するべき力では無かったのだろう。

死の只中において、彼は考える。

自分のやってきた行いは、只のエゴイズムでしか無かったんじゃないのだろうか。

一体、追悼の意味とは何だったのだろうか。

結局の処、彼はグローリィに生きる上で、子供という存在を糧にして。自己満足の追悼を行ってきたのではないのだろうか。

彼は死の淵へと向かっていく。

全ては達せられず、自分は死んでいく。ヒースを殺したかった。彼の結末。失ってしまったもの、あるいは得たかったもの。全てはなし崩し的な虚無でしかなく。

自分は出来なかったのだ。ただ、敗北していただけなのだ。

彼の命の音色は終わっていく。

あの、着流しの男の顔がちらついて、消えた。

この世界は正しいのだろうか？ デュラスは考える。

人々は彼女の次の言葉を待っている。

自分は何の為に存在しているのか、それを理解しなければならない。

担ってしまったもの、自分自身がどう理解していたというのだろうか。

デュラスは知っている。ただ、ほんの少しの運命の違いによって、人の一生は左右されていくのだと。人はどのように転落していき、死んでいくのか。自分の力がそれを知らせてくれるのだ。

みな、それぞれの生に縋っている。

みな、不安を消して、生き残りたいと願い、望んでいるのだ。

そして、国民達はエゴイストばかりだ。自分と家族、せいぜい友人くらいの事までしか考えられない。それらを支えている基盤である、国家の事など眼にもくれようとししないのだ。何故、思いは伝わらないのだろうか。

デュラスは自分が受けてきた教育の事を考える。一人はみなのためであり、みなは一人のためなのだ。そうやって、秩序というものは保たれているのだから。

そして、自分はこの国家という存在を引き受ける者だ。

強い責任が今、問われている。

もし、基盤が無ければ。人は無秩序になっていくのだろう。デュラスは屹然と、国民の前に立っていた。

戦わなければならない、国を守らなければならないのだ。

ヒースと、その軍勢は此方側に迫っているだろう。

ザルファもムシュフシュも置いてきた。そして、ヒースの兵団は化け物揃いだ。

デュラスは思考する。そして、結論付けた。

「お前達、もしこの国に不満があるのならば。この国を今すぐ出ていくがいい」

屹然とした口調で、彼女は告げる。

「愛国心の無い者達、無秩序を望む者達。お前達は病原菌でしかない。お前達は必要無い。お前達はお前達の国を作ればいいのでないか！」

デュラスは叫んだ。

そして、旗手を呼んで。ヴァーゲンの旗を掲げる。車輪のような形状の国旗だ。

水車や風車を意識して作った紋章なのだろう。此処は、まず、農牧地帯が多かった。そこから国は徐々に発展していった。

今や、全てが瓦解しようとしている。

デュラスの胸には、怒りが滾っていた。

何者かが、拳銃を取り出していた。

鉛弾がデュラスの下へと向かっていく。

彼女は自身の力のベクトルを別の方向へと向けていた。

この国家全体に、自分の身を守護するための幸運を投げ捨てて。
デュラスの額から、鮮血が零れ落ちた。彼女は地面へと倒れる。

十

ヒースはヴァーゲンへと向かっていた。

ヴァーゲンからやってきた兵隊の一部を捕まえて、自身の奴隷と化して動かしていた。

兵隊達は頭に植物の蔓を埋め込まれて、装甲車を運転している。

この力が全ての者達へ浸透していけばいい。

やがて、ヴァーゲンへと彼女は辿り着いた。

今度はこの国を支配下に置いてやろう、そう決意する。

力を持て余し続けてきた、自分は支配者になるために生まれてきたのだ。そう確信している。
万物の支配者にだ。

彼女はテンパランス・リバーを限界まで引き出して、使おうとする。

さかしまの調和。人間との関係と関係の構造が粉々に変形していく力。

もはや、人間など存在しなくていい。みな、神話の神々のような存在へと変わっていくのだ。
変質していく肉体の先に、大なる調和が得られる筈だ。

自分は間違っていない、自分の思想は正しい、ヒースはそう確信している。迷いなどあろう筈
が無かった。

ヒースは雄叫び声を上げていた。

もはや、それは人の怒声なのか獣の咆哮なのか機械の金属音なのか分からなかった。

彼女の全身から、様々な動物のパーツが出現しては、消えていく。

彼女はこの大地に根を張ろうとする。大地と一体化しようとする。

十

ファンガスは国民達に対して、心の底から怒りを感じていた。

もう、自分もどうなったって構わない。国家もどうなったって構わない。

自分が心の支柱としていたデュラスが倒れた。

こんな腐敗した国家に、一体、何の意味があるというのか。

彼はバイオ・ファクトリーの胞子を街中へと振り撒いていく。国民に対する、彼の憎悪の鉄
槌だ。何故、人々はこんなに浅はかなのか。信じるべきものは、国家なのだ。そればかりが、み
なを守ってくれるというのに。

彼が守りたかったもの。デュラスが守りたかったもの。

このままでは、ヒースによって潰されていくだろう。ファンガスはただただ、怒り狂うしか
なかった。

街頭は一面、黄色く染め上げられていく。

毒の孢子によって、次々と人々は倒れていく。

辺り一面が、黄塵地帯へと変わっていく。

自分をまるで制御出来なかった。

実際、彼の力は強大だった。デュラスは彼を、軍隊の一個大隊よりも凶悪だと賛辞を贈っていた。それこそが、能力者だった。在り得ない力。

十

デュラスの意識は朦朧としていた。

酷く頭部が出血している。

このまま、死んでいくのだろう。

しかし、自身の力を解除するわけにはいかない。死ぬ、その瞬間まで、なすべき事があるのだから。

「もし、幸運が訪れるとすれば……。届く筈だ。何者かに。ヒースを殺せる者が来る筈。私にはどうにもならない。この世界に神はいるのか。私には……」

デュラスは漆黒の宇宙に、何かを見た。

それは、雲が裂けたかのようなだった。

自分自身の肉体が、生という重力の中から解放されていく感じ。ああ、人は必ず、この感触に出会うのだな、と思った。

ふと、それは目の前に降り立った。まるで天空からの使者のようだ。

それは、人では無かった。

人ならざる者だった。

そいつに出会った瞬間から、何かの歯車が狂い始めていた。

まるで、崩落していくように状況が突き崩れていく。

風が緩やかに流れている。

まるで、他の者からは見えないかのように、そいつはデュラスの眼だけが認識しているかのようだった。

「また会ったな、デス・ウィング。どうした？ コレクションは揃ったのか？」

「ええ、またお会いしましたね。デュラスさん。私は沢山、揃いましたよ。物語の舞台劇、とても楽しかったです。そろそろ幕を降ろしましょうか。私は冷戦状態の貴方達を見て、少し亀裂を入れてしまいました。ちょっとした悲劇作家のような気分なのです。とてもとても、楽しかったです」

彼女は、結局。殆ど、何もしていない。

何もしていないにも、関わらず。彼女がこの街にやってきてから、状況がどんどん変転していった。

彼女が行った事、ほんの少しの些細な事だ。

デュラスの心を揺さぶった、ただ、それだけだ。

決断の瞬間。戦うべき事。

しかし、デュラスは今の状態で、ヒースと戦う事を選んだ。

「お前は死神なのか？」

「さあ？ 私自身、自分が何者なのか分かりません」

もし、運命が変えられるのならば、変えてしまいたい。

「頼みがある」

「何とでも」

「ヒースを殺してくれ」

女は楽しそうに笑った。

「報酬は？」

「死んだ者達の遺骸だが。全部、お前の好きなようにしていい。此処しばらく、この街をお前に預ける」

デス・ウィングは笑った。

「そういえば。少し前に戴いた、拷問によって死んだ女の報酬は貴方の味方になる、という事でした。だから、私は貴方の役に立つつもりでいます。お守りしますよ、この国家を。国民達を。皆様の幸運と栄光を願って」

「ああ、すまない……」

悔いというものは何なのだろうか。それは足を止めるものなのだろう。

自分の最期、これで良かったと思っている。きっと、確かに使命は果たせたのだから。

運命、幸運。それは、一体。何だったのだろうか。

デュラスは深い眠りに付く。もう、目覚める必要など無い。

十

ファンガスは、一通り、沢山の者達を殺害した後、宮殿へと戻る事にした。

あのシャックスという男が気になっていた。もしかすると、彼ならば突破口を開けるのかもしれない。

自分が求めていたもの、国家の守護者。そういったものが、自分の役割だと信じていた。

牢獄の中で、着流しの男は一人、壁を眺め続けていた。

彼の両目は空ろだ。何もかもを見据えているかのような。

「なあ、どうにかならないものなのか？」

ガスマスクの男は訊ねる。

「どうにもならないな」

シャックスは答える。

「そうだな。俺は及ばなかった。それだけの事なのだろう……」

ファンガスは彼に背を向ける。

そして。

牢獄の中へと、胞子の粉を撒いていく。

「お前はこの前、会った時から嫌いになった。お前は何と言うか、汚らわしい」

「俺はデュラスの影みたいなものだろう？」

「デュラス様は導きだった。けれども、もう何も無い……………」

「ああ、そうだ。お前の死の事だが……」

「聞いても意味が無い、此処でお別れだ」

シャックスは眼を閉じる。覚悟の決意。

宮殿が粉々になっていく。壁が崩れ、完全なまでに崩壊へと向かっていく。

此処は跡地になるだろう。ファンガスは闇へと消えるつもりだ。

この街は、ヒースによって占領されていくのだろうか、分からない。

しかし、デュラス亡き今、一体、明日は何があるのだろうか。

全ては虚無の淵へと落下していくかのようだった。

腰元から、巨大な刃物を取り出す。

そして、ファンガスはそれを自分の喉下へと突き立てた。真っ赤な鮮血が飛び散っていく。

十

ヒースはヴァーゲンへと辿り着いた。

途中、幾つもの部隊を編纂していた。

新たなる栄光の始まりだ。

これからは、この国が彼女の領土と化す。

「くくくっ、行くよ？」

彼女は甲殻の肉体を変形させていく。

そして、両眼を大きく開く。

右手に、巨大な槍を手にしていた。

彼女は進軍する、新たなる場所の支配へと。

今度は、青い悪魔に対する対策も立てておかなければならない。

この国家だけではなく、征服していく領土の拡大を。即座に推し進めていかなければならない。大地の全てを自分の物へと変えていく。それこそが、彼女が願っている事なのだから。

幼い頃から、自分は化け物だと呼ばれて育った。ならば、みな、化け物になればいい、それが彼女の願いだった。

この力は、世界を支配する為に神から与えられたものだ。今はそれを信じて疑わない。

ヒースは、街に近付いて。ぽかん、とした眼をした。

何か、大きなものが空に渦巻いている。

それは、ぐるぐると回転しており。天空そのものを引き裂いていた。

「何？ あれ？」

ヒースは背中から、翼を生やした。

そして、天空にあるものをじっと眺める。

何か、強い違和感を感じた。それは、本能的に感じる、非常に抗いがたいもので。

突然。

ヒースの全身に、何かが撃ち込まれていた。

それは、さながら雹のようなものだった。何か雨粒や粉雪の強いものにもでも当たったのだろう。

。

そう思っていた。しかし。

ヒースの身体の所々に、孔が開いている。

それは、空間を貫いていくかのように次々と、ヒースの肉体へと撃ち込まれていく。

彼女は一度、地面へと落下する。何をされているのか分からない。

ヒースは、背後を見る。

すると、彼女が作り上げてきた兵団達が、無残にも全身を切り刻まれて、殺されていた。

青い悪魔の時と、同じよう。

まるで、神から振るわれる無慈悲な暴力のように。どうしようもなく、理不尽で。

自分という存在が余りにも、無力なものでしかないと思わされるもの。

これは、二度目。……………そして、最後なのだろう。

ヒースは全身を変形させていく。抵抗するのに、必死だ。

しかし、彼女は抗う術が何も無かった。

圧倒的なまでの、自然の驚異の前に敗北していく無力な人間そのもの。

それが、今の自分ではないかと。

ヒースは脳に幾つもの致命傷を受けていた。もう、どうにもならないくらいに深刻なダメージだ。

この現象を引き起こしている相手は、まるで哀れな小動物でも弄ぶかのように。ヒースという存在を捻り潰していつている。

十

白銀の絶景が広がっている。

青い悪魔は、雪原の中、歩き出す。

彼は傘を刺していた。

周辺を、細かい刃の粒子が覆う事によって、自分の肌や服に豪雪が降り注ぐのを防いでいる。

「青い悪魔さん。どんな気分だった？」

他人の死と呼ばれる存在は、彼に囁きかける。それは、呪いの言葉そのものだ。

彼に対して、そいつは告げている。お前は存在自体が殺人でしかないのだと。

しばらく歩くと。

古びたニット服に、色褪せたマフラーを巻いた。ろくに手入れのされていない髪を靡かせてい

る女に出会った。

夥しい銀幕の下で、女はとても楽しそうな顔をしていた。

それはぞっとするような、酷薄な笑みだった。

まるで、世界の全てに意味なんて感じていないかのように。そして、あらゆる虚無を抱えている者達よりも。更なる深い深淵を心に抱えているかのようで。

「貴方が青い悪魔さんですね？」

女は楽しそうに、彼に訊ねた。

ブラッド・フォースは煙たそうな顔をする。

「貴方のコレクションが見てみたい。そして、一度。貴方と手合わせしてみようと思ひまして。どうでしょうか？ 貴方の力は、私の不死を終わらせる事が出来るのでしょうか？ それはとてもなく、興味深いのです」

まるで、悪魔の囁きのように女は言う。

実際、彼女は本当に、そのような概念に値するものなのだろう。

この世界に墜とされて、この世界の価値をさかしまに見ている存在。

「グローリィは降りしきる雪の底へと沈んでいくのでしょうか。ヴァーゲンはどうなるのでしょうか？ 来年の春くらいには持ち直していくのかもしれませんがね。新たな秩序が生まれるのでしょうか。体制はどのように移り変わっていくのでしょうか。他国との関係は？ とても、興味深いです。でも、私の今、一番、興味がある事はそれじゃない」

彼女は意味深に口上を述べていく。

「青い悪魔さんが、果たして。死が無い私を終わらせる事が出来るのだろうか。そんな事を思い尽きましてね。どうでしょうか？ 私が見てきたものは、いつも他人の死でしたから」

口調こそおどけているが、彼女の眼は、真摯だった。

彼女が視ている世界、彼女の価値観。

それは限りの無い、何処までも悪意に満ち満ちた世界だ。

デス・ウィングが見ている世界は。その全てが、人間の悪意によって形成されている。

彼女はこの世界を弄びたいと思っている、それがどうしようもなく面白いのだから。

デス・ウィングは不死だった。死ぬ事が出来ない。無意味にただ、生き続けている。

彼女は自分の人生を終わらせられる存在を探している。

その時までは、人々の闇を楽しみたいと思っている。それだけが生き甲斐なのだから。

青い悪魔は立ち止まらない。自らの罪が重過ぎるから。

どうしようもなく生きている事、自分の意識が存在しているという事実が辛過ぎて、心を何処かへと置き去りにしてしまったのだが。それでも、生きている。もう、それはどうしようもない事なのだ。

「さて、私を殺して下さいよ。貴方は本当に、お強いんでしょう？」

「興味が無いよ」

「そうですか。では、此方から始めようと思ひます」

デス・ウィングはブラッド・フォースに告げる。

二人は、それぞれ二つの国を蹂躪して、崩壊へと追い込んでいった。

デス・ウィングは、悪意で。

ブラッド・フォースは純然たる暴力で。

二人は何故、誕生してしまったのか分からない。きっと、神の気まぐれのようなものなのだろう。この世界に存在してはならない力そのもの。

彼らは、この世界に背いている。この世界にとって害以外の何物でもない。

もし、天の国があるとすれば。二人は、その扉を潜れないのだろう。

二人は、この世界の理に背信し、ただ、存在している事そのものが、悪以外の何者でも無いのだろうから。

E N D